

柏崎

梗 概

柏崎何某の妻、夫に死別し、又その子花若の遁世したる悲しみに堪へずして、氣も心も狂ひ亂れ、故郷を浮れ出でて、善光寺に詣でしに、不思議や我が子に廻り會へり。後半、阿彌陀如來の佛説を述ぶる事詳なり。(四番目)

シテ 狂女(前は女) 子方 花若

ワキ 小太郎 ツレ 僧

ワキ次第通「夢路も添ひて故郷に、夢路も添ひて故郷に、歸るや現なるらん。是は越後國柏崎殿の御内に、小太郎と申す者にて候。さても頼み奉りし人は、訴訟の事候ひて、在鎌倉にて御座候ひしが、只かりそめに風の心地と仰せ候ひて、程なく空しくなり給ひて候。又御子息花若殿も、同じく在鎌倉にて御座候ひしが、父御の御別れを歎き給ひ、何處ともなく御遁世にて候。さる間花若殿の御文に、御形見の品々を取り添へ、只今故

雪の下山の内一  
共に鎌倉の地名

郷柏崎へと急ぎ候。道行通 乾しぬべき、日影も袖やぬらすらん。日影も袖やぬらすらん。今行く道は雪の下、一通り降る村時雨、山の内をも過ぎ行けば、袖さえまさる旅衣、確氷の峠打過ぎて、越後に早く著きにけり、越後に早く著きにけり。

ワキ「急ぎ候程に、故郷柏崎に著きて候。まづく案内を申さうするにて候。如何に申し候。鎌倉より小太郎が参りて候。それく御申し候へ。レテ「なに小太郎とは、もし殿の御歸りありたるか。あら珍しや何とて物をば申さぬぞ。ワキ「さん候是までは参りて候へども、誰何と申しあぐべきやらん、更に思ひも辨へず候。レテ「あら心もとなや。物をば申さでさめぐと泣くは、さて花若が方に何事かある。ワキ「さん候花若殿は御遁世にて御座候。レテ「何と花若が遁世したるとは、さては父の叱りけるか、など追手をばかけざりしぞ。ワキ「いや左様にも御座なく候。様々の御形見の物を持ちて参りて候。レテ「誰「何さまぐの形見とは、さては花若が父の空しくなりたるな。誰「此程は其方の風もなつかしく、便も嬉しかりつるに、形見を届くる音信は、なかく聞きても恨めしきぞ

やがてと言ひし  
—やがて歸らん  
と言ひし

や。只假初に立ち出でて、やがてと言ひし其主は、地謡「昔語り」に早なりて、形見を見るぞ涙なる。

ロンギ「謡」さてや最期の折節は、いかなる事か宣ひし、委しく語りおはしませ。せめては聞いて慰まん。ワヤ「謡」只故郷の御事を、おほつかなく思召し、御最期までも人知れずひそかに御説ありしなり。シテ「謡」實にやさこそはおはすらめ。三年離れて其後は、我も御名残、いつの世にかは忘るべき。ワヤ「謡」御ことわりと思へども、歎きをとどめおはしまし、形見を御覽候へ。シテ「謡」實にや歎きても、かひなき世ぞと思へば、地謡「形見を見るからに、すすむ涙はせきあへず。

さてもく—こ  
れより文の文句  
命つれなく—命  
が無情にて死な  
ず

ワヤ「謡」花若殿の御文の候。これを御覽候へ。シテ「謡」さてもく—父御前、勞はりつかせ給ひ、程なく空くなりたまへば、心の内の悲しさは、只思召しやらせ給へ。我も歸りて御有様、見参らせたくは候へども、思ひ立ちぬる修行の道、もしや止められ申さんと、思ふ心を便にて、心強くも出づるなり、命つれなく候はど、三年が内には参るべし、様々の形見

恨みながらも—  
實はかはゆき意

善光寺—阿彌陀  
院百濟寺と號す  
推古天皇十年草

如來堂—其寺の  
本堂

を御覽じて、御心を慰みおはしませと、書いたる文の恨めしや。地謡「亡からん父が名残には、子ほどの形見あるべきか。上歌父が別れば如何なれば、父が別れば如何なれば、悲しみ修行に出づる身の、などや生きてある、母に姿を見みえんと、思ふ心のなかるらん、恨めしの我子や。憂き時は、恨みながらもさりとは、我子のゆくへ安穩に、守らせ給へ神佛と、祈る心ぞあはれなる。祈る心ぞあはれなる。(中入)

ワヤ(僧)「詞」かやうに候者は、信濃國善光寺の住僧にて候。又是に渡り候人は、いづくとも知らず愚僧を頼む由仰せ候程に、師弟の契約をなし、此程出家させ申して候。さる間毎日如來堂へ伴なひ申し候。今日も又参らばやと思ひ候。一雙「詞」是なる童部どもは何を笑ふぞ。なに物に狂ふがをかしいとや。うたてやな心あらん人は、訪ひてこそ給ふべけれ、それをいかにといふに、夫には死して別れ、只ひとり忘れ形見とも思ふべき、諸子の行方をも白糸の、地謡「亂れ心や狂ふらん。サシ「謡」實にや人の身のあだなりけりと、誰かいひけん空言や。又思ひには死なれざりけりと、詠みしもことわりや。今身の上には知られた

越後の國府一頸  
城郡に在り

常盤の里一以下  
地名皆善光寺道  
中  
木鳥一雉子を言  
掛く

内陣一本尊を安  
置せる所  
極重惡人云々一  
往生要集の文

九品一極樂の蓮  
の臺に九等あ  
上品中品下品の  
各々に上生中生  
下生あるなり

り。是もひとへに夫や子の、故と思へば恨めしや。地謡「うき身は何と櫓の葉の、柏崎を  
ば狂ひ出で、上歌 越後の國府に著きしかば、越後の國府に著きしかば、人目も分かぬ我  
姿、いつまで草のいつまでと、知らぬ心は麻衣、浦はるく」と行くほどに、松風遠く寂  
しきは、常盤の里の夕かや、我にたぐへて、あはれなるは此里。子故に身をこがしよは、  
野邊の木鳥の里とかや、降れども積らぬ淡雪の、淺野といふは是かとよ。桐の花咲く井  
の上の、山を東に見なして、西に向へば善光寺、正身の彌陀如來、わが狂亂はさておき  
ぬ、死して別れし、夫を導きおはしませ。

ワキ、ツレ調「いかに狂女、御堂の内陣へは叶ふまじきぞ、急いで出で候へ。レテ調「極重惡人  
無他方便、唯稱彌陀得生、極樂とこそ見えたれ。ワキ、ツレ調「是は不思議の物狂ひかな。そ  
も左様の事をば誰が教けるぞ。レテ調「教は本よりみだ如來の、御誓にてはましまさずや。  
唯心の淨土と聞く時は、此善光寺の如來堂の、内陣こそは極樂の、九品上生の臺なるに、  
女人の參るまじきとの御制戒とはそもされば、如來の仰せありけるか。よし人々は何と

形見こそ一伊勢  
物語の歌

三物一射麩の名  
流鏑馬、笠掛、犬  
追物の三つ

縁塗一樹製の鳥  
帽子の縁を穿り  
たるしの  
鳴るは瀧の水一  
亂舞の謠

もいへ、謠聲こそしるべ南無阿彌陀佛、地謡「頼もしや、頼もしや、レテ調「釋迦は遣り  
地謡「彌陀は導く一筋に、こよを去ること遠からず。是ぞ西方極樂の、上品上生の、内  
陣にいざや參らん。光明遍照十方の、誓ぞ著き此寺の、常の燈火影頼む、夜念佛申せ  
人々よ、夜念佛いざや申さん。

レテ調「いかに申し候。如來へ參らせ物の候。此鳥帽子直垂は、別れし夫の形見なれども、  
謠形見こそ今はあだなれ是なくは、忘るよひまもあらまし物をと、よみしも思ひ知られ  
たり。是を如來に參らせて、夫の後生善所をも、祈らばやと思ひ候。あらいとほしや此  
鳥帽子直垂の主は、爾よろづ何事につきても闇からず、弓は三物とやらんを射そろへ  
歌連歌の道も達者なりし上、又酒盛などの折節は、いで人々に亂舞まうて見せんとて、  
謠「鎧直垂とりいだし、衣紋うつくしく著ないて、縁塗取つて打ちかづき、手拍子人に囃  
させて、扇おつ取り鳴るは瀧の水。

ワキ、ツレ調「それ一念稱名の聲の内には、攝取の光明を待ち、聖衆來迎の雲の上には、レテ

白虹地に満ちて  
彌陀來迎の光  
明をいよ

身三口四意三の  
十の道十惡な  
り、殺生偷盜邪  
淫は身の罪、妄  
語綺語惡口兩舌  
は口の罪、貪欲  
瞋恚愚痴は意の  
罪  
初の御法一釋迦  
が最初に説きし  
華嚴經のこと  
黄金の岸一橋樂  
の池底には金沙  
を敷けりといふ

謡「九品蓮臺の花散りて、地誦「異香みち／＼て人に薫じ、白虹地に満ちて列れり。レテ、サシ誦「つ  
らつら世間の幻相を觀するに、飛花落葉の風の前には、有爲の轉變を悟り、地誦「電光石火  
の影の中には、生死の去來を見る事、始て驚くべきにはあらねども、幾世の夢とまとは  
りし、假の親子の今をだに、添ひ果てもせぬ道芝の、露のうき身の置き所、レテ誦「誰に問  
はまし旅の道、地誦「是もうき世のならひかや。クセ悲しみの涙眼にさへぎり、思の煙胸  
に満つ。つらく／＼之を案するに、三界に流轉して、猶人間の妄執の、晴れ難き雲の端の、  
月の御影や明けき、眞如平等の臺に、いたらんとだにも歎かずして、煩惱の絆に、結ほ  
ほれぬるぞ悲しき。罪障の山高く、生死の海深し。如何にとしてか此生に、此身を浮め  
んと、けに歎けども人間の、身三口四意三の、十の道おほかりき。レテ誦「されば初めの御  
法にも、地誦「三界一心なり、心外無別法、心佛及衆生と聞く時は、是三無差別、なに疑ひ  
のあるべきや。己身の彌陀如來、唯心の淨土なるべくは、尋ねべからず此寺の、御池の  
蓮の、得ん事をなどか知らざらん。只願はくは影たのむ、聲を力の助船、黄金の岸に至

量無き命の佛  
無量壽佛阿彌陀  
如來

園原や一新古今  
集是則の歌末句  
逢はぬ君かな

るべし。そも／＼樂みを極むなる、教あまたにうまれ行く、道さま／＼の品なれや。寶  
の池の水、功德池の濱の眞砂、數々の玉の床、臺も品々の、樂みを極め、量無き命の佛  
なるべしや。若我成佛、十方の世界なるべし。レテ誦「本願誤り給はずは、地誦「今の我が  
願はしき、夫の行方をしら雲の、たなびく山や西の空の、彼國に迎へつよ、一つ淨土の  
縁となし、望を叶へ給ふべしと、稱名も鉦の音も、曉かけて燈火の、善き光ごと仰ぐ  
なりや。南無歸命彌陀尊、願をかなへ給へや  
ロンギ地誦「今は何をか包むべき、是こそ御子花若と、いふにもすよむ涙かな。レテ誦「我子ぞ  
と、聞けば餘りに堪へかぬる、夢かとはかり思ひ子の、何れぞさてもふしぎやな。地誦「と  
もにそれとは思へども、かはる姿は染染の、レテ誦「見しにもあらぬ面忘れ、地誦「母の姿  
もうつよなき、レテ誦「狂人といひ、地誦「衰へといひ、互にあきれてありながら、よく／＼  
見れば園原や、伏屋に生ふる帯木の、ありとは見えて逢はぬとこそ、聞きしものを今は  
はや、疑もなき、其母や子に逢ふこそ嬉しかりけれ。逢ふこそ嬉しかりけれ。

# 阿漕

梗  
伊勢の阿古木が浦は昔太神宮へ調進の贄の佳肴を漁する所たり。故に一般の漁獵は禁制たりき。然るに阿古木といふ漁夫之れを犯して度重なり顯れければ罪に問はれて果てぬとぞ。この傳説に據りて漁夫の亡靈を出し昔語をなさしめ旅僧の弔を受けしむ。前に掲げたる鶉飼に似たる曲なり。(四番目)

概

シテ 阿漕(前は漁翁) ワキ 旅僧

心盡しの古今集に、木の間に影みれば心盡しの秋はきにけり淡路調一金葉集に「淡路島通よ千鳥の鳴く聲に幾夜病覺めぬ須磨の關守」

ワキ次第「心盡しの秋風に、心盡しの秋風に、木の間の月ぞすくなき。是は九州日向國の者にて候。我未だ伊勢大神宮に參らず候程に、只今思ひ立ちて候。道行諸日向ふ、國の浦舟漕ぎ出でて、國の浦舟漕ぎ出でて、八重の汐路をはるくくと、分けこし波の淡路瀧、通ふ千鳥の聲聞きて、旅の寢覺を須磨浦、關の戸ともに明け暮れて、阿漕が浦に著きにけり、阿漕が浦に著きにけり。急ぎ候程に、是は早伊勢國阿濃の郡とやらん申し候。暫

身の秋いつと！海士なれば袖のぬるくは秋の露を待たずとなり

六帖「家六帖といふ貫之女撰と稱す逢ふ事も六帖には下旬敷重ならば人も知りなんとあり

く人を相待ち、所の名所をも尋ねばやと思ひ候。

一「波ならで、乾す隙もなき海士衣、身の秋いつと限らまし。ヤン夫れ世を渡る習ひ、我一人に限らねども、せめては職を營む田夫ともならず、かく淺ましき殺生の家に生れ、明暮物の命を殺す事の悲さよ。拙かりける殺生かなとは思へども、浮世の業にて候程に、今日も又釣に出でて候。如何に是なる尉殿に尋ね申すべき事の候。此方

の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ「如何に是なる尉殿に尋ね申すべき事の候。此方

シテ「さん候此所をば阿漕が浦と申し候。ワキ「さては承り及びたる阿漕が浦にて候ひけるぞや。古き歌に、伊勢の海阿漕が浦に引く網も、度重なれば顯れにけり。かやうに詠まれし浦なるぞや。あら面白や候。レテ「あらやさしの旅人や。所の和歌なればなどかは知らで候べき。彼の六帖の歌に、逢ふ事も阿漕が浦に引く網も、度重ならば顯はれやせん。かやうに詠まれし海士人なれば、さも心なき伊勢をの海士の、みるめも輕き身なればとて、賤しみ給ひ候なよ。ワキ「實にや名所舊跡に、馴れて年経ば心な

物の名も「草  
の名」所に上り  
てかけるなり難  
波のあしは伊勢  
の「濱」といふ  
連歌あり  
藻鹽焼く「體後  
拾遺集の歌初句  
讀處のとあり

き、シテ誦「海士の焼く藻の夕煙、ワヤ誦」身を焼くべきにはあらねども、シテ誦「住めば所によ  
る波の、ワヤ誦」音も變るか、シテ誦「聞き給へ、上歌地誦」物の名も、所によりて變りけり、所  
によりて變りけり、難波の芦の浦風も、こよには伊勢の濱の、音をかへて聞き給へ。  
藻鹽焼く、煙も今は絶えにけり、月見んとての、海士のしわざにと、許され申す海士衣、  
敷島により来る、人なみに如何で漏るべき。

ワヤ誦「此浦を阿漕浦と申すいはれ御物語候へ、シテ誦」總じて此浦を阿漕浦と申すは、伊勢大  
神宮御降臨より以來、御膳調進の網を引く所なり、されば神の御誓によるにや、海邊の  
うろくづ此所に多く集まるによつて、浮世を渡るあたりの海士人、此所にすなごりを望  
むといへども、神前の恐あるにより、堅く戒めてこれを許さぬ所に、阿漕といふ海士人、  
業に望む心の悲しさは、夜々忍びて網を引く。しばしは人も知らざりしに、度重なれば  
顯れて、阿漕を縛め所をかへず、此浦の沖に沈めけり。誦さなきだに伊勢をの海士の罪  
深き、身を苦しみの海の面、重ねておもき罪科を、受くるや冥途の道までも、地誦「娑婆

錦木一圓名の誦  
曲を見よ  
靈清一西行法師  
の俗名、上藤に  
思をかけし事を  
いふ

うちぶれ給へー  
浦といふ語を合  
めてつゞけたる  
にてこゝは馴れ  
休む意  
敷波一重なる波

にての名にしおふ、今も阿漕が恨めしや。阿責の責の隙なくて、苦しみも度重なる、罪  
弔はせ給へや。ワヤ 恥かしや古へを、語るもあまり實に、阿漕が浮名もらす身の、なき  
世語の色々に、錦木の數積り、千束の契忍ぶ身の、阿漕がたとへ浮名立つ、憲清と聞え  
し、其歌人の忍び妻、阿漕々々といひけんも、責一人に、度重なるぞ悲しき。  
ロンギ地誦「不思議やさては幽靈の、幻ながら現れて、執心の浦波のあはれなりける値遇か  
な。シテ誦「一樹の宿をも、他生の縁と聞くものを、御身も前の世の、値遇をすこし松陰  
に、うらぶれ給へ墨衣、地誦「日も夕暮の夕煙、立ち添ふ方や漁火の、シテ誦「影もほのかに  
見え初めて、地誦「海邊も晴ると村霧に、シテ誦「すはや手繰の、地誦「網の綱、繰返し、  
浮きぬ沈むと見しよりも、俄に疾風吹き、海面暗くかき暮れて、敷波も立ち添ひ、漁の  
燈消え失せて、こはそも如何にと叫ぶ聲の、波に聞えしばかりにて、跡はかもなく失せ  
にけり。跡はかもなく失せにけり。(申入)  
ワヤ誦「いざ弔はん數々の、いざ弔はん數々の、法の中にも一乗の、妙なる花の紐解きて、

海士の刈る一古  
今集、藤原直子  
の歌

伊勢の無清き活  
の備馬樂歌の  
語、たまくと  
いふ爲の序

火車に業積む  
地獄の火の車に  
罪を積むこと

紅蓮大紅蓮一地  
獄の名  
焦熱大焦熱一詞

昔の衣の玉ならば、終に光は暗からじ、終に光は暗からじ。

後「海士」の刈る、藻に住む蟲の我からと、音をこそ泣かめ世をば恨みじ。今宵は少し波  
あれて、御膳の贅の網はまだ引かれぬよなう。調よき隙なりと夕月なれば、宵よりやが  
て入汐の、誦道をかへ人目を、忍びくくに引く網の、沖にも磯にも船は見えず、只我のみ  
ぞ英虞の海、阿漕が鹽木こりもせで、地謡「なほ執心の網置かん。シテ謡「伊勢の海、清き渚  
のたまくも、地謡「弔ふこそたより法の聲、シテ謡「耳には聞けどもなほ心には、地謡「只罪  
をのみ持網の、波はかへつて猛火となるぞや。あら熱や堪へがたや、丑みつ過ぐる夜の  
夢、丑みつ過ぐる夜の夢、見よや因果の廻り來る、火車に業積む、數苦しめて目の前の、  
地獄も眞なり。實に恐しのけしきや。シテ謡「思ふも怨めし古への、地謡「思ふも恨めし古へ  
の、娑婆の名を得し、阿漕が此浦に、なほ執心の、心引く網の手馴れしうろくづ今は却  
つて、悪魚毒蛇となつて、紅蓮大紅蓮の氷に身を傷め、骨を碎けば叫ぶ息は、焦熱大焦  
熱の、烟煙り、雲霧立居に隙もなき、冥途の責も度重なる、阿漕浦の罪科を、助け給へ

や旅人よ、助け給へや旅人として、また波に入りにつけり、また波の底に入りにつけり。

内七

志賀

梗概

古今集の序に「大伴の黒主はそのさまいやしいはど薪を頁へる山人の花の陰に休めるが如し」とあるによりて、黒主の住國近江志賀の地に寄せて、その靈出でて歌語りをなす事を作る。歌道を説き、御代を頌する意を帶ぶ。(脇能)

シテ 大伴黒主(前は樵夫) シテツレ 樵夫  
ワキ 臣下 ワキツレ 臣下

三人次第「道ある御代の花見月、道ある御代の花見月、都の山ぞ長閑けき。ワキ詞」そもく、是は當今に仕へ奉る臣下なり。さても江州志賀の山櫻、今を盛なる由承り及び候程に、只今志賀の山路へと急ぎ候。道行詠「春の色、棚引く雲の朝ほらけ、棚引く雲の朝ほら

花見月一三月の異名  
志賀の出線一北白河より近江に超ゆる邊



さく波や千載  
集の歌「さく波  
や志賀の都は荒  
れにしを昔なが  
らの山櫻かな」  
忠度の歌なるこ  
と平家物語に見  
ゆ  
山路日暮滿耳  
者様歌牧笛之聲  
一朗詠集の詩句  
山遠雲埋行客  
之跡一詞  
譯入仙家篇半  
日之客一詞  
道のべの—雲玉  
集に黒主の歌と  
てあり

け、長閑けき風の音羽山、今朝越え来れば是ぞ此、名に負ふ志賀の山越や、湖遠き眺め  
かな。湖遠き眺めかな。一詞「急ぎ候程に、江州志賀の山に著きて候。暫く此所に候ひ  
て花を詠めうするにて候。一聲謡「さよ波や、志賀の都の名を留めて、昔ながらの山櫻  
ッレ謡「春に馴れてや心なき、シテ、ッレ謡「身にも情の残るらん。レテ、サレ謡「山路に日暮れぬ樵歌  
牧笛の聲、シテ、ッレ謡「人間萬事様々の、世を渡り行く身の有様、物毎に遮る眼の前、光の影を  
や送るらん。下歌餘「山を遠く来て、雲また跡を立ち隔て、上歌入りつるかたも白波の、入  
りつる方も白波の、谷の川音雨とのみ、聞えて松の風もなし。實にや誤つて、半日の客  
たりしも、今身上に知られたり。今身上に知られたり。

ワキ詞「不思議やな是なる山賤を見れば、重かるべき薪に猶花の枝を折り添へ、休む所も  
花の陰なり。是は心有りて休むか、只薪の重さに休み候か。シテ詞「仰せ畏つて承り候  
ひぬ。先薪に花を折る事は、謡道のべの便の櫻折り添へて、詞「薪や重き春の山人と、歌  
人も御不審有りし上、今更何とか答へ申さん。ッレ謡「又奥深き山路なれば、松も檜原も

心を寄する—歌  
道に熱心なるこ  
と

古今の道—古今  
集の意を含む

多けれども、取り分き花の陰に休むを、シテ詞「只薪の重さに休むかとの、おほせは面目な  
きよなう。シテ、ッレ謡「さりながら彼黒主が歌のごとく、其様賤しき山賤の、薪を負ひて花  
の陰に、休む姿は實にも又、其身に應ぜぬ振舞なり。許し給へや上藤達。ワキ詞「こは如何  
に優るをも羨まざれ、劣るをも賤しむなどの、古人の掟は眞なりけり優しくも、古歌の  
喩への心を以て、謡今の返答申したり。シテ詞「いや〜古歌の喩へとやらんも、更々知ら  
ぬ身なれども、賤しき身にも思ひよりて、ワキ謡「彼大伴の黒主が、心を寄する老の波、シテ謡  
「和歌の浦わの藻蘆草、ワキ謡「かく喩へ置く世語の、シテ謡「それは黒主、ワキ謡「是は眞に、  
シテ謡「さよも賤しき、ワキ謡「山賤の、地謡「身には應ぜぬ事なれど、許させ給へ都人、とて  
もの思出に、花の陰に休まん。實にや今までも、筆を残して貫之が、詞の玉のおのづから、  
古へ今の道とかや。古へ今の道とかや。  
ワキ地謡「それ賢かつし時代を尋ぬるに、延喜の聖代の古へ、國を恵み民を撫でて、萬機の  
政を治め給ふ。シテ、サレ謡「然れば其御時に至つて、和歌の道盛んにして、古今の詠歌を

二聖一人磨赤人  
六歌仙一僧正遍  
昭・在原業平・  
文屋康秀・喜撰  
法師・小野小町・  
大伴黒主  
其外の人々一以  
下古今集序の詞  
を用ふる

無見頂相の如來  
一三十一字は如  
來の無見頂相を  
除きて卅一相を  
表し又卅一尊に  
謂歎すと云り

撰み、地謡「二聖六歌仙を始として、其外の人々は、野邊の葛のはひ廣ごり、林に茂き木の葉の露の、色に染み行く歌人の、心は花になるとかや。シテ謡「實に埋木の人知れぬ、地謡「ことわざまでの情とかや。クセそもく、難波津淺香山の、影見えし山の井の、淺くは誰か思ひ草の、露往き霜來る色なれや。濱の眞砂より、數多き言の葉の、心の花の色香までも、妙なりや敷島の、道有る御代の、翫び。然れば三十一文字の、神も守護し給ひて、無見頂相の如來も、感應垂れたまへば、君も安全に、萬民時を樂みて、都鄙圓滿の雲の下、四海八洲の外までも、波の聲萬歳の、響は長閑けかりけり。シテ謡「今天皇の御代久に、地謡「萬の政の、道直ぐに渡る日の、東南に雲をさまり、西北に風靜にて、言葉の林榮ゆくや、花も常磐の山松の、巷に諸の聲までも、是和歌の詠に漏るべしや 天地を動かし、鬼神も感をなすとかや。  
地謡「實にや異なる山賤の、實にや異なる山賤の、家路いつくの末ならん。ゆかしき心なるべし。シテ謡「今は何をか包むべき、其いにしへは大伴の、黒主といはれしが、時代とて

いざ今日は古  
今集秀性の歌末  
句花の陰かは

銅山古今集黒  
主の歌に「銅山  
いざ立寄りて見  
て行かん年經ぬ  
る身は老やしぬ  
ると  
薪の斧の一管王  
實山に入り仙人  
の暮を打つを見  
て斧のくちたる  
故事

此山の、神とも人や見るらん。地謡「そも此山の神ぞとは、不思議やさては大伴の、シテ謡「そ  
れは黒主が家の名の、地謡「大作か。シテ謡「我はたど、地謡「薪負ふ友もなく、ひとり山路  
の花の陰に、長休みしつる 恥やと、夕の雲に立ち隠れて、志賀の宮路に歸りけり。志  
賀の宮路に歸りけり。(中入)

上歌謡「いざ今日は、春の山邊にまじりなん、春の山邊にまじりなん、暮れなばなけの花の  
陰、月に詠じて天の原、時の調子に移り來る、舞歌の聲こそあらたなれ。舞歌の聲こそ  
あらたなれ。

後シテ謡「雪ならば幾度袖を拂はまし、花の吹雪の志賀の山、越えても同じ花園の、里も春  
めく近江の湖の、志賀辛崎の松風までも、千聲の春の長閑けさよ。海越に、見えてぞ向  
ふ鏡山、地謡「年經ぬる身は老が身の、シテ謡「それは老が身これは志賀の、地謡「神の白木綿  
かけまくも、忝しや神樂の舞。(神舞)  
シテ謡「不思議なりつる山人の、不思議なりつる山人の、薪の斧の永き日も、残る和光

のあらたさよ。 レテ謡實に惜むべし君が代の、長閑けき色や春の花の、塵に交はる雪ならば、踏む跡までも心せよ。 地謡實に心して春の風、聲も添ふなり御神樂の、 レテ謡小忌の衣の色はえて、 地謡花は梢の白和幣、 レテ謡松は立枝の、 地謡青和幣、かくるやかへるや レテ謡梓弓、春の山邊を越え来れば、道も去りあへず散る花の、雲の羽袖を返しつよ、紅の御袴のそばを取り、拍子を揃へて神かぐら、實に面白き奏かな。 實に面白き奏かな。

梓弓春の山邊を  
古今集の歌末  
句花ぞ散りける

鶴

梗 概

源三位頼政が内裏に於て、鶴といふ怪物を射取りし功名談は載せて平家物語にあり。此曲はその資料として脚色し、鶴の靈出でて昔語をなし旅僧の巾を受くといふ例の如き形式なり。(四番目)

シテ 鶴(前は舟人) ワキ 僧

次第 ワキ 世を捨人の旅の空、世を捨人の旅の空、來しかた何處なるらん。 詞 是は諸國一見の僧にて候。 われ 此程は三熊野に参りて候。 又 是より都に上らばやと思ひ候。 道行 諸程もなく、歸り紀の路の關越えて、歸り紀の路の關越えて、猶行く末は和泉なる、信田の森をうち過ぎて、松原見えし遠里の、こよ住の江や難波湯、蘆屋の里に著きにけり。蘆屋の里に著きにけり。 詞 急ぎ候程に、是ははや津の國蘆屋の里に著きて候。日の暮れて候程に、宿を借らばやと思ひ候。

紀一茶に掛く  
遠里一遠里小野  
のこと、をりを  
のともいふ

青島の浮木一質  
盛に狂す  
空穂舟一丸木舟  
のこと

古き歌にも盧の  
屋の一伊勢物語  
の歌

一壁「謡」悲きかなや身は籠鳥 心を知れば盲龜の浮木、たと闇中に埋木の、さらば埋れも  
果てずして、亡心何に残るらん。一壁浮き沈む、涙の波の空穂舟、地謡「こがれて堪へぬい  
にしへを、」  
ワヤ謡「不思議やな夜も更け方の浦波に、幽に浮び寄るものを、見れば聞きしに變らずし  
て、舟の形は有りながら、只埋木の如くなるに、乗る人影も定かならず。あら不思議の  
者やな。」  
の、人知れぬ身とおほしめさば、不審は爲させ給ひそとよ。ワヤ謡「いや是は只此里人の、さ  
も不思議なる舟人の、夜々來ると言ひつるに、見れば少しも違はねば、我も不審を申す  
なり。」  
焼く海士の類ひならば、業をばなさで暇ありけに、夜々來るは不審なり。レテ謡「實に〜  
暇の有る事を、疑ひ給ふも謂れあり。古き歌にも盧の屋の、ワヤ謡「灘の鹽焼き暇なみ、黄  
楊の小櫛はさよす來にけり。」  
レテ謡「我も憂きには暇なみの、ワヤ謡「汐にさよれて、」  
レテ謡「舟

人は、上歌地謡「さよで來にけり空穂舟、さよで來にけり空穂舟、現か夢か明けてこそ、み  
るめも刈らぬ蘆の屋に、一夜寝て海士人の、心の闇を弔ひ給へ。有難や旅人は、世を遁  
れたる御身なり、我は名のみぞ捨小舟、法の力を頼むなり、法の力を頼むなり。  
ワヤ謡「何と見申せども更に人間とは見えぬ、如何なる者ぞ名を名乗り候へ。」  
レテ謡「是  
は近衛の院の御宇に、頼政が矢先にかより、命を失ひし鶴と申し、物の亡心にて候、其  
時の有様委しく語つて聞かせ申し候べし。跡を弔うて賜はり候へ。ワヤ謡「さては鶴の亡心  
にて候か、其時の有様委しく語り候へ。跡をば、懇に弔ひ候べし。  
ワヤ謡「さては近衛の院の御在位の時、仁平のころほひ、主上夜なく、御惱あり。レテ謡「有  
驗の高僧貴僧に仰せて、大法を修せられけれども、そのしるし更になかりけり。地謡「御  
惱は丑の刻ばかりにてありけるが、東三條の森の方より、黒雲一村立ち來つて、御殿の  
上に蔽へば、必ずおびえ給ひけり。レテ謡「即ち公卿詮議あつて、地謡「定めて變化の者なる  
べし、武士に仰せて警固有るべしとて、源平兩家の兵を選ぜられける程に、頼政を選

有驗一所釋の効  
驗有る意

内七 鶴

猪早太一名は高直  
二重一藍の轉  
訛青花と赤花と  
にて染めたるな  
り  
尖矢一さきの鏡  
き矢  
滋藤の弓一藤を  
しげく巻きたる  
可  
矢叫び一射聲

鳴く聲鶴に似た  
り一此は鳥なり  
鳥の類怪鳥其啼  
聲を因とす  
三角柏一三葉柏  
をいふ種古今集  
の歌に思ひ餘  
り三角柏に問ふ  
事の沈むに浮く  
は涙なりけり

み出だされたり。クモ頼政其時は、兵庫の頭とぞ申しける。頼みたる郎等には、猪早太、只一人召し具したり。我身は二重の狩衣に、山鳥の尾にて知いだりける。尖矢二筋、滋藤の弓に取り添へて、御殿の大床に伺候して、御惱の刻限を、今や今やと待ち居たり。さる程に案の如く、黒雲一村立ち來り、御殿の上に蔽ひたり。頼政きつと見上ぐれば、雲中に、怪きものの姿あり。シテ誦「矢取つて打ちつがひ、地誦「南無八幡大菩薩と、心中に祈念して、よつびきひやうと放つ矢に、手應へしてはたと當る。得たりやおうと、矢叫びして、落つる所を猪早太、つよと寄りて續けさまに、九刀ぞ刺いたりける。さて火を燈し能く見れば、頭は猿、尾は蛇、足手は虎のごとくにて、鳴く聲鶴に似たりけり。恐ろしなんども、悪かなる形なりけり。  
ロンギ地誦「實に隠なき世語りの、その一念を翻し、浮む力となりたまへ。シテ誦「浮むべきたより渚の淺緑、三角柏に有らばこそ、沈むは浮む縁ならめ。地誦「實にや他生の縁ぞとて、シテ誦「時もこそあれ今宵しも、地誦「なき世の人に合竹の、シテ誦「棹取り直し空穂舟、

一佛成道云々！  
釋迦山の語  
五十二類一諸の  
大比丘より菩薩  
人天龍王鬼神飛  
鳥樹林神象王仙  
人四天魔王自在  
天まで五十二類  
として涅槃經に  
説く

地誦「乗ると見えしが、シテ誦「夜の波に、地誦「浮きぬ沈みぬ、見えつ隠れ絶々の、幾重に聞  
くは鶴の聲、恐ろしや凄まじしや、あは恐ろしや、凄まじしや。(中入)  
ワキ上歌誦「御法の聲も浦波も、御法の聲も浦波も、皆實相の道弘き、法を受けよと夜と共に、此御經を讀誦する、此御經を讀誦する。一佛成道觀見法界、草木國土悉皆成佛、  
後シテ誦「有情非常皆俱成、佛道、ワキ誦「頼むべし、シテ誦「頼むべしや。地誦「五十二類も我同性の、涅槃にひかれて眞如の月の、夜汐に浮みつよ是まで來れり。有難や。  
ワキ誦「不思議やな目前に來る者を見れば、面は猿、足手は虎、聞きしに變らぬ變化の姿、あは恐ろしの有様やな。シテ誦「さても我惡心外道の變化となつて、佛法王法の障りとならんと、王城近く遍滿して、東三條の林頭に暫く飛行し、丑三ばかりの夜なくに、御殿の上へ飛びさがれば、地誦「即ち御惱しきりにて、玉體を惱まして、おびえ魂消らせ給ふ事も、我が爲す業よと怒りをなしよに、思ひもよらざりし頼政が、矢先に中れば變身失せて、落々磊々と地に倒れて、忽ちに滅せし事、思へば頼政が矢先よりは、君の天罰を

宇治の大臣一相

いるに任せて一  
弓を射ると月の  
入るとを言掛く

暗きより云々  
拾遺集和泉式部  
の歌

當りけるよと、今こそ思ひ知られたれ。其時主上御感あつて、獅子王と言ふ御劔を、頼政に下されけるを、宇治の大臣賜はりて、階を下り給ふに、折節郭公音づれば、大臣とりあへず、シテ「ほとよぎす名をも雲井に上ぐるかなと、仰せられければ、地蓋頼政右の膝をついて、左の袖をひろげ月を少し目に懸けて、弓張月のいるに任せてと、仕り、御劔を賜はり、御前を罷り歸れば、頼政は名をあけて、我は名を流す空穂舟に、押し入れられて淀川の、よどみつ流れつ行く末の、宇渡野も同じ蘆の屋の、浦わの浮洲に流れ留まつて、朽ちながら空穂舟の、月日も見えす暗きより、暗き道にぞ入りにける。遙かに照らせ山の端の、遙かに照らせ山の端の、月と共に海月も入りにけり、海月と共に入りにけり。

### 大原御幸

梗 平家の一門、壽永の秋のあはれを留めて、西海の藻屑となりぬ。建禮門院は再び都へ上り給ひしかど、星移り物變りければ、御出家ありて、大原の寂光院に籠らせ給ふこそいたましけれ。かくて後白河法皇忍びの御幸あり、御對面ありて往昔を語り合ひ給ふ。事は平家物語に名文として存す。此曲はこれを脚色せるもの、景情雙絶、頗る閑寂の趣あり。  
(三番目)

- シテ 建禮門院
- ツレ 阿波内侍
- ツレ 大納言局
- ツレ 後白河法皇
- ワキ 萬里小路中納言
- トモ 官人

先帝—安徳天皇  
二位殿—清盛の  
内室  
女院—建禮門院  
安徳天皇の御母

ワキ大臣「是は後白河院に仕へ奉る臣下なり、扱も此度先帝二位殿を始め奉り、平家の一門長門の國早鞆の沖にして、ことごとく果て給ひて候。女院も御身を投げさせ給ひ候を取り上げ奉り、かひなき御命助かりおはしました候。三河守範頼、九郎大夫判官義

經兄弟俱奉し申し、三種の神寶事故なく都に納まりたまひ候。さるほどに女院は都に移  
 させたまふべかりしを、先帝安德天皇の御菩提に、二位殿の御跡御弔ひの爲に、大原  
 の寂光院に浮世を厭ひ御座候を、法皇御幸をなされ、御訪ひあるべきとの勅説にて  
 候間、御幸の山路をも申し付けばやと存じ候。いかに誰かある。大原へ御幸あるべきな  
 れば、行幸の道をもつくり、其清めを仕り候へ。

山里は古今集の歌末句住みよかりけり  
 正木の葛青つらら共葛の名綴るより來ると言辨く  
 草薙願淵登雨還原電極一朗  
 詠集の句二人共に賢にして貧なりき  
 レテ、サン、山里は物の寂しき事こそあれ、世の憂きよりはなかくに、  
 折ける柴の樞、都の方の音信は、間遠に結へる笹垣や、憂き節繁き竹柱、立居につけて  
 物思へど、人目なきこそ安かりけれ。下歌地謡「折々に心なけれど訪ふ物は、上歌「賤が妻木の  
 斧の音、賤が妻木の斧の音、梢の嵐猿の聲、これらの音ならでは、正木の葛青つらら、來  
 る人稀になりはてよ、草、顔淵が巻に、滋き思ひの行方とて、雨原憲が樞とも、濕ふ袖  
 の涙かな。濕ふ袖の涙かな。  
 シテ、「いかに大納言の局、後の山に上り櫓を摘み候べし。局、「わらはも御供申し、妻木蔵

悉く太子一淨迦  
 のこと  
 淨飯王一淨迦の  
 父

を折り供御にそなへ申し候べし。シテ、サン、たとへば便なき事なれども、悉く太子は淨飯  
 王の都を出で、檀特山の峻しき道を凌ぎ、菜摘み水汲み薪地謡「とりく様々に難行し、  
 仙人に仕へさせ給ひて、終に成道なるとかや。我も佛の爲なれば、御花筐取りく、猶  
 山深く入り給ふ、猶山深く入り給ふ、  
 一、雙、九重の、花の名残を尋ねてや、青葉をしたふ山路かな。分けゆく露もふかみ  
 草、分けゆく露もふかみ草、大原の御幸急がん。ワキ、「行幸をはやめ申し候間、大原に入  
 御候。話かくて大原に御幸なつて、寂光院の有様を見渡せば、露結ぶ庭の夏草繁りあ  
 ひて、青柳糸を亂しつよ、池の浮草波に揺られて、錦を曝すかと疑はる。岸の山吹咲き  
 亂れ、八重立つ雲の絶間より、山時鳥の一聲も、君の御幸を待ち顔なり。法皇、法皇池の  
 汀を叙覽あつて、池水に汀の櫻散り敷きて、波の花こそ盛なりけれ。上歌地謡「ふりにける、  
 岩のひまより落ちくる、岩のひまより落ちくる、水の音さへよしありて、緑蘿の垣翠黛  
 の山、繪にかくとも、筆にも及びがたし。一字の御堂あり。葺破れては、霧不斷の香を

葺破れては云々  
 院の荒れ果て  
 たる状をあらは  
 す霧を香に、月  
 を燈火に見立て  
 たるなり

燒き、欄落ちては月も又、常住の燈火をかよぐとは、かよる所か物すごや、かよる所か物すごや。

ワヤ調「是なるこそ女院の御庵室にてありけに候。羅軒には葛朝顔はひかより、藜藿深く鎖せり、あらものすこの氣色やな。調いかに此庵室の内へ案内申し候。内侍調「誰にてわたり候ぞ。ワヤ調「是は萬里小路の中納言にて候。内侍調「それはさて人目まれなる山中へは、何とて御わたり候ぞ。ワヤ調「さん候。女院の御住居御訪ひのため、法皇是まで御幸にて候。内侍調「女院は上の山へ花つみに御出でて、今は御留守にて候。ワヤ調「御幸の由申して候へば、女院は上の山へ花摘みに御出でて、今は御留守の由候。暫く此所に御座をなされ、御歸りを御待ちあらうするにて候。法皇調「やあ如何にあの尼前、汝はいかなる者ぞ。内侍調「けにく御見忘れは御ことわり、是は信西が娘、阿波の内侍がなれる果にて候。調かくあさましき姿ながら、明日をも知らぬ此身なれば、恨みとは更に思はずさむらふ。法皇調「女院はいづくに御渡り候ぞ。内侍調「上の山へ花摘みに御出でて候。

信西—少納言通  
羅の法號

極重惡人云々—  
往生要集の文句  
成等正覺—成佛  
のこと

法の人—法皇を  
指す  
同じ道—女院も  
法皇も共に御法  
體なればなり

法皇調「さて御供には、内侍調「大納言の局。今少し待たせおはしました候へ、やがて御歸りにて候べし。

シテ、サシ調「昨日も過ぎ今日も空しく暮れなんとす。明日をも知らぬ此身ながら、只先帝の御面影、忘るゝ隙はよもあらじ。極重惡人無他方便、唯稱彌陀得生極樂。主上を始め奉り、二位殿一門の人々、成等正覺、南無阿彌陀佛。調や、庵室のあたりに人音の聞え候。局調「しばらく是に御休み候へ。

内侍調「只今こそあの岨傳ひを女院の御歸りにて候。法皇調「さて何れが女院。大納言の局はいづれぞ。内侍調「花がたみ臂に懸けさせ給ふは、女院にてわたらせ給ふ。妻木に蕨折添へたるは、大納言の局なり。調いかに法皇の御幸にて候。シテ調「なかくに猶妄執の闇浮の世を、忘れもやらで浮名を又、漏せば漏るゝ涙の色、袖の氣色もつとまじや。下歌地調「とは思へども法の人、同じ道にと頼むなり。上歌「一念の窓の前、一念の窓の前に、攝取の光明を期しつと、十念の柴の欄には、聖衆の來迎を待ちつるに、思はざりける今日の暮古



關の清水一寂光  
院の裏にあり  
北祭一來ると言  
拵く、賀茂祭の  
こと

玉松一松の美稱  
初花より一金  
葉集に「夏山の  
青葉交りの遅櫻  
初花よりも珍し  
きかな」

へに歸るか、猶思出の涙かな。けにや君こよに愼慮のめぐみ末かけて、あはれもさぞ  
な大原や、芹生の里の細道、臙の清水月ならで、御影や今に残るらん。ロンギ地謡「さてや  
御幸の折しもは、いかなる時節なるらん。レテ謡「春過ぎ夏もはや、北祭の折なれば、青葉  
にまじる夏木立、春の名残りぞ惜しまるよ。地謡「遠山にかよる白雲は、レテ謡「散りにし花の  
形見かや。地謡「夏草の、しけみが原のそことなく、分け入り給ふ道の末、レテ謡「こよとて  
や、こよとてや、けに寂光の寂かなる、光の影を惜しめたと、地謡「光の影も明らけき、  
玉松が枝に咲き添ふや、レテ謡「池の藤波夏かけて、地謡「是も御幸を、レテ謡「待ち顔に、地謡「青  
葉隠れの遅櫻、初花よりも珍かに、なか／＼様變る有様を、あはれと愼慮にかけまくも、  
かたじけなしや此御幸、柴の櫛のしばしが程も、あるべき住居なるべしや、あるべき住  
居なるべしや。

レテ謡「思はずも深山の奥の住居して、雲井の月をよそに見んとは。かやうに思ひ出でし  
に、此山里までの御幸、かへす／＼も有難うこそ候へ。法皇詞「先つ頃ある人の申せしは

觀身岸頭離根  
草論命江頭不  
娶船一朗詠集  
の詩句

六道一ことの文  
中に見ゆる餓鬼  
地獄修羅畜生人  
天

女院は六道の有様まさに御覽じけるとかや。佛菩薩の位ならでは見給ふ事なきに不審に  
こそ候へ。レテ謡「勅説はさる御事なれども、つらく／＼我身を案じ見るに、クリそれ身を觀ず  
れば、岸の額に根を離れたる草、地謡「命を論ずれば、江のほとりに繫がざる舟。レテ、サレ謡「さ  
れば天上の樂みも、身に白露の玉かづら、地謡「ながらへ果てぬ年月も、つひに五衰のお  
とろへの、レテ謡「消えもやられぬ命の中に、地謡「六道の巷に迷ひしなり。クセまづ一門、西  
海の波に浮き沈み、ゝるべも知られぬ船の内、海にのぞめども、潮なれば飲水せず、餓  
鬼道の如くなり。又ある時は、汀の波の荒磯に、打ちかへすかの心地して、船舉りつよ  
泣き叫ぶ、聲は叫喚の、罪人もかくや淺ましや。レテ謡「陸の争ひある時は、地謡「是ぞ誠に  
目の前の、修羅道の戦、あら恐ろしや数々の、駒の蹄の音聞けば、畜生道の有様を見  
聞くも同じ人道の、苦しみとなり果つる、憂き身の果ぞ悲しき。

法皇詞「眞に有難き事どもかな、先帝の御最期の有様、何とか渡り候ひつる御物語り候へ。  
レテ謡「恥かしながら、語つて聞かせ申し候べし。其時の有様申すにつけて恨めしや。長門

鈍色の二つ衣  
薄黒き色の二枚  
重ね  
練袴―練絹にて  
作れる袴

今ぞ知る―長門  
本平家物語にて  
は二位局の歌と  
す

國早鞆とやらんにて、筑紫へ一先落ちゆくべきと一門申し合ひしに、緒方の三郎が心變りせしほどに、薩摩洞へや落さんと申しよ折節、上り汐に支へられ、今はかうよと見えしに、能登の守教経は、安藝の太郎兄弟を左右の脇に挟み、最期の供せよとて海中に飛んで入る。謡新中納言知盛は、沖なる船の碇を引き上げ、兜とやらんに戴き、乳母子の家長が、弓と弓とを取りかはし、其まよ海に入りけり。其時二位殿鈍色の二つ衣に、練袴のそば高く挟んで、我が身は女人なりとて、敵の手には渡るまじ、主上の御供申さんと、安徳天皇の御手を取り、舷に臨む。いづくへ行くぞと勅諭ありしに、此國と申すに逆臣多く、かくあさましき處なり、極樂世界と申して、めでたき所の此波の下にさむらふなれば、御幸なし奉らんと、泣くく奏し給へば、さては心得たりとて、東に向はせ給ひて、天照大神に御暇申させ給ひて、地謡又十念の御爲に、西に向はせおはしまし、レテ謡今ぞ知る、地謡御裳濯川の流れには、波の底にも都ありとはと、是を最期の御製にて、千尋の底に入り給ふ。自らも續いて沈みしを、源氏の武士とりあけて、か

ひなき命ながらへ、二度龍顔に逢ひ奉り、不覺の涙に、袖をしほるぞ恥かしき。いつまでも、御名残はいかで盡きぬべき、はや還幸とすむれば、はや還幸とすむれば、御輿を早め遙々と、寂光院を出で給へば、レテ謡女院は柴の戸に、地謡暫しが程は見送らせ給ひて、御庵室に入り給ふ。御庵室に入り給ふ。

梅枝

梗 富士といふ樂人、非命の最期を遂げしかば、その妻この世に執心を殘して、浮みやらざりしが、旅僧に一宿を許し、その功德によつて成佛する意に作る。末段懺悔のため舞樂奏づる事あり。(四番目)

シテ 富士の妻の靈(前は女) ワキ 僧 ツレ 僧

沙門一僧のこと  
雲水の身一行脚僧のこと  
ワキ、ツレ「捨てよも廻る世の中は、捨てよも廻る世の中は、心の隔てなりけり。ワキ詞「是は甲斐國身延山より出でたる沙門にて候。われ縁の衆生を濟度せんと、多年ののぞみにて候程に、此度思ひ立ち廻國に赴き候。道行、ツレ「何處にも、住みは果つべき雲水の、住みは果つべき雲水の、身は果知らぬ旅の空、月日程なく移り來て、所を問へば世を厭ふ、我が衣手や住の江の、里にも早く著きにけり。里にも早く著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に、

是ははや津の國住吉に著きて候。あら笑止や、俄に村雨の降り候。是なる菴に宿を借らばやと思ひ候。如何に此屋の内へ案内申し候。

草壁の宿一茅屋の意  
正木のかづら一後拾遺集に「旅寢する宿は深山にとぞちれて正木の葛來る人もなし」  
利益一功德

菴の宿はうれたくともし伊勢物語の歌に「養生ひて荒れたる宿のうれたきは假にも鬼のすだくなりけり」

シテ詞「實にや松風草壁の宿に通ふといへども、正木の葛來る人もなく、心も澄める折節に、事問ふ人は誰やらん。ワキ詞「是は無縁の沙門にて候。一夜の宿を御貸し候へ。レテ詞「實にけに出家の御事、一宿は利益なるべけれども、さながら傾く軒の草、埴生の小家のいぶせて、何と御身を置かるべき。ワキ詞「よし、内はいぶせくとも、降りくる雨に立ち寄る方なし、只ざりとは貸し給へ。シテ詞「實にや雨降り日もくれ竹の、一夜を明かさ給へとて、地通「早此方へと夕露の、菴の宿はうれたくとも、袖を片敷きて、御泊りあれや旅人、上歌「西北に雲起りて、西北に雲起りて、東南に來る雨の脚、早くも吹き晴れて、月にならん嬉しや。所は住吉の、松吹く風も心して、旅人の夢を覺ますなよ、旅人の夢を覺ますなよ。

ワキ詞「如何に主に申すべき事の候。シテ詞「何事にて候ぞ。ワキ詞「是に飾りたる太鼓、同じく

伶人―樂人

逆縁―順縁と對する語、始より其心ありて申ふを順縁不用意なるを逆縁といふ

太鼓は朽ちず云云―朗詠集に誦鼓若深鳥不盡の句あり唐麴の代太平にして誦の鼓の用ゐるによしなかりしをいふ

舞の衣裳の候不審にこそ候へ。レテ詞實によく御不審候ものかな。是は人の形見にて候。是に付き哀れなる物語の候。語つて聞かせ申し候べし。ワヤ詞「さらば御物語り候へ。レテ詞「昔當國天王寺に、淺間といひし伶人あり。同じく此住吉にも富士と申す伶人有りしが、其頃内裏に管絃の役を争ひ、互に都に上りしに、富士此役を賜はるによつて、淺間安からずと思ひ、富士をあやまつて討たせぬ。其後富士が妻夫の別れを悲しみ、常は太鼓を打つて慰み候ひしが、それも終に空しくなりて候。逆縁ながら申ひて給はり候へ。ワヤ詞「かやうに委しく承り候は、其古への富士が妻の、ゆかりの人にてましますか。レテ詞「いやとよそれは遙の古へ、思ふも遠き世語の、ゆかりといふ事あるべからず。ワヤ詞「さらば何とて此物語、深き思ひの色に出でて、涙を流し給ふぞや。レテ詞「なう何れも女は思ひ深し。殊に戀慕の涙に沈むを、などか哀れと御覽せざらん。ワヤ詞「猶も不審は残るなり。形見の太鼓形見の衣、ことには残し給ふらん。レテ詞「主は昔になり行けども、太鼓は朽ちず苦むして、ワヤ詞「鳥驚かぬ、レテ詞「此御代に、上夏地誦「住むもかひなき池水の、

是最第一―法華經提婆品の文

一者不得作梵天王云々―同上の文即ち女人成佛の五障を云ふ

若有聞法者云々―同經方便品の文

内七 梅枝

二二七

住むもかひなき池水の、忘れて年を経しものを、又立ち歸る執心を、助け給へと云ひ捨てて、かき消す如くに失せにけり。(中入)ワヤ誦「それ佛法さまぐなりと申せども、法華は是最第一、ワヤ、ツレ誦「三世の諸佛の出世の本懐、衆生成佛の直道なり。ワヤ誦「なかんづく女人成佛疑ひあるべからず。ワヤ、ツレ誦「一者不得作梵天王、二者帝釋三者魔王、四者轉輪聖王、五者佛身云何女身、地誦「速得成佛、何疑ひか荒磯海の、深き執心を、晴らして浮み給へや。上歌或は若有聞法者、或は若有聞法者、無一不成佛と説き、一度此經を聞く人、成佛せずといふ事なし。只頼め頼もしや、弔ふ燈火の陰よりも、化したる人の來りたり。夢か現か見たりともなき姿かな。ワヤ誦「不思議やな見れば女性の姿なるが、舞の衣裳を著し、さながら夫の姿なり。詞「さては有りつる富士が妻の、其幽靈にてましますか。シテ誦「實にや碧玉の寒き簾、錐囊に脱すとは、今身の上知られさむらふぞや。さりながら妙なる法の受持に逢はど、變成男子

惡縁―地獄畜生  
餓鬼の三惡道

戀忘草―古今集  
に「道知ちばつ  
みにもゆかん住  
吉の岸に生ふて  
ふ戀忘草」  
―夫帯の縁淺か  
りしこと麻に淺  
の縁語につゞけ  
て片思といへり  
波もてゆへる―  
古今集の歌上句  
わだつみのかざ  
しにさせる白妙  
の末句淡路島山  
手返し―太鼓の

の姿とは、などや御覽じ給はぬぞ、然らば御巾ひの力にて、地謡「憂かりし身の昔を、懺悔に語り申さん。ヶセさるにても我ながら、よしなき戀路に侵されて、長く惡趣に墮しけるよ。さればにや、女心の亂れ髪、ゆひかひなくも戀衣の、妻の形見を戴き、此狩衣を著しつと、常には打ちし此太鼓の、寢もせず起きもせず涙、敷妙の枕上に、残る執心を晴らしつと、佛所に至るべし。嬉しの今の教へや。レテ謡「思ひ出でたる一念の、地謡「起るは病うとなりつと、繼がざるは是藥なりと、古人の教へなれば、思はじく、戀忘草も住吉の、岸に生ふてふ花なれば、手折りやせまし我が心、契麻衣の片思ひ、執心を助け給へや。

ロンギ地謡「實に面白や同じくは、懺悔の舞をかなでて、愛著の心を捨て給へ。レテ謡「いざいざさらば妄執の、雲霧を拂ふ夜の、月も半なり、夜半樂を奏でん。地謡「心も共に住吉の、松のひまよりながむれば、シテ謡「波もて結へる淡路瀉、地謡「沖も靜に青海の、レテ謡「青海波の波返し、地謡「かへすや袖の折を得て、軒端の梅に鶯の、レテ謡「來鳴くや花の越殿樂、

梅が枝―備馬樂  
歌にあり

明ぐれ―夜明け  
のうすぐちき時

地謡「諷へや諷へ、シテ謡「梅が枝、地謡「梅が枝にこそ、鶯は巢をくへ、風吹かば如何にせん、花に宿る鶯、シテ謡「面白や鶯の、地謡「面白や鶯の、聲に誘引せられて、花の陰に來りたり。我も御法に引き誘はれて、我も御法に引き誘はれて、今目前に立ち舞ふ舞の袖、是こそ女の夫を戀ふる、想夫戀の樂の鼓、うつよなの我が有様やな。レテ謡「思へばいにしへを、地謡「思へばいにしへを、語るは猶も執心ぞと、申せば月も入り、音樂の音は松風にたぐへて、有りし姿は明けぐれに、面影ばかりや残るらん。面影ばかりや残るらん。

### 誓願寺

梗概

諸國遊行の一邇上人曾て熊野の御示現により都誓願寺にて御札を結縁せる時和泉式部の亡靈現れその告げによりて誓願寺の額を六字の名號に改むる事當寺縁起に基きて作る。(三番目)

シテ 和泉式部(前は里女) ワキ 一邇上人

證願殿熊野本宮阿彌陀如來を祀る  
手束弓一弓の握りの大きな弓をいよ

三人次第誦「教の道も一聲の、  
教の道も一聲の、御法を四方に弘めん。  
ワキ誦「是は念佛の行者一遍と申す聖にて候。我此度三熊野に参り、一七日參籠申し證誠殿に通夜申して候へば、あらたに靈夢を蒙りて候。六十萬人決定往生の御札を、普く國土に弘めよとの靈夢に任せ、まづ都へと志して候。道行誦「彌陀頼む、願も三つの御山を、願も三つの御山を、今日立ち出づる旅衣、紀の關守が手束弓、出で入る日數重なりて、時もこそあれ春の頃、花の都に著きにけり。花の都に著きにけり。

誓願寺一初め大和にありて三輪宗なりしが後京都に遷されて淨土宗たり

ワキ誦「急ぎ候程に、是は早都誓願寺に著きて候。告に任せて札を弘めばやと思ひ候。誦有難や實に佛法の力とて、貴賤群集の色々に、袖を連ね踵をついで、知るも知らぬもおしなめて、念佛三昧の道場に、出で入る人の有難さよ。

ワキ誦「所は名におふ洛陽の、花の衣の今更に、心は空に墨染の、ワキ誦「夕の鐘の聲々に、稱名の御法、ワキ誦「梵鐘の響、ワキ誦「聽衆の人音、ワキ誦「軒の松風、ワキ誦「おのれくと、

蓮葉の濁りにしまぬ云々僧正遍照の歌の詠

ワキ誦「かはれども、上歌地誦「彌陀頼む、心は誰も一聲の、心は誰も一聲の、内に生まると蓮葉の、濁りにしまぬ心もて、何疑ひの有るべき。有難や此教、洩らさぬ誓目のあたり、受け悦ぶや上人の、御札をいざや保たん。御札をいざや保たん。

ワキ誦「如何に上人に申すべき事の候。ワキ誦「何事にて候ぞ。ワキ誦「此御札を見奉れば、六十萬人決定往生とあり。扱々六十萬人より外は往生に洩れ候べきやらん、返すくも

不審にこそ候へ。ワキ誦「實によく御不審候物かな。是は三熊野の御夢想に四句の文有り、其四句の文の上の字を取りて、證文のために書き付けたり。たゞ決定往生南無阿彌陀

六字名號云々  
六字は南無阿彌陀佛、名號は念佛此を一遍唱ふれば萬善萬行の功德納る十界は六道に佛界(佛菩薩聲聞緣覺)を併せいふ其各依報正報あるを一週の念佛によりて成佛すといふ萬行云々は一遍得道する意念佛の行人は上々の人なれば妙好華即ち分陀利華に喩ふ稱ふれば佛も我も一遍上人の歌末句聲ばかりして  
至誠心云々  
至誠心深心回向發願心を淨土の三心といふ

佛と、此文ばかり御頼み候へ。シテ詞「さてく四句の文とやらんは、如何なる事にて有るやらん、愚痴の我等に示し給へ。ワヤ詞「いでく語つて聞かせ申さん。六字名號一遍法、十界依正一遍體、萬行離念一遍證、人中上々妙好華、此四句の文の上の字なれば、六十萬人とは書きたるなり。シテ詞「今こそ不審春の夜の、闇をも照らす彌陀の教へ、ワヤ詞「光明遍照十方世界に、漏るよ方なき御法なるを、僅に六十萬人と、人数をいかでさだむべき。シテ詞「さては嬉や心得たり、この御札の六十萬人、其人数をばうち捨てよ、ワヤ詞「決定往、生南無阿彌陀佛と、シテ詞「只一筋に念すならば、ワヤ詞「それこそ即ち決定する、シテ、ワヤ詞「往生なれや何事も、皆うち捨てよ南無阿彌陀佛と、上歌地謡「稱ふれば、佛も我もなかりけり、佛も我もなかりけり。南無阿彌陀佛の聲ばかり、至誠心深心廻向、發願の鉦の聲、耳に染みて有難や。誠に妙なる此教、十聲一聲數分かで、悟りをも迷ひをも、迎へ給ふぞ有難き。さる程に夕陽雲にうつろひて、西にかけろふ夕月の、夜の念佛を急がん。夜念佛をいざや急がん。

涼しき直ぐしきの傳字の誤か

八萬諸聖教一稱迦一代中の説教の歌多きこと

ロンキ地謡「早更け行くや夜念佛の、聴衆の眠り覺まさんと、鉦うち鳴らし念佛す。シテ詞「有難や五障の雲のかよる身を、助け給はば此世より、二世安樂の國に早、生れ行かんぞ嬉しき。地謡「實に安樂の國なれや、安く生るよ蓮葉の、臺の縁ぞ誠なる。シテ詞「ありがたや、ありがたや。さぞな始めて彌陀の國、涼しき道ぞ頼もしき。地謡「頼みぞまこと此教。或は利益無量罪。シテ詞「又は餘經の後の世も、地謡「彌陀一教と、シテ詞「聞く物を、地謡「ありがたや、ありがたや、八萬諸聖教、皆是阿彌陀佛なるべし。此御本尊も上人も、只同じ御誓願寺ぞと、佛と上人を、一體に拜み申すなり。シテ詞「いかに上人に申すべき事の候。ワヤ詞「何事にて候ぞ。シテ詞「誓願寺と打ちたる額を除け、上人の御手跡にて、六字の名號になして給はり候へ。ワヤ詞「是は不思議なる事を承り候ものかな。昔より誓願寺と打ちたる額を除け、六字の名號になすべき事、思もよらぬ事にて候。シテ詞「いや是も御本尊の御告と思召せ。ワヤ詞「そも御本尊の御告とは、御身は何くに住む人ぞ。シテ詞「わらはが住家はあの石塔にて候。ワヤ詞「不思議やなあの石塔は、

和泉式部―初は和泉守道貞の妻後は福原保昌の妻

二十五菩薩―觀世音大勢至藥王藥上菩薩法自在王彌子吼陀羅尼虛空藏德藏寶藏金藏金剛藏光明王山街惠花嚴王珠寶王月光王日照王三昧王定自在王大自在王白象王大威德王無邊身の廿五

和泉式部の御墓とこそ聞きつるに、謡御住家とは不審なり。シテ「さのみな不審し給ひそよ。我も昔は此寺に、地謡値遇の有れば、すむ水の、春にも秋や通ふらし。地謡結ぶ泉のみづからの、名を流さんも恥かしや。よしそれとても上人よ、我偽りは亡き跡に、和泉式部は我ぞとて、石塔の石の火の、光と共に失せにけり。光と共に失せにけり。(申入)  
ワヤ「佛説に任せ誓願寺と打ちたる額を除け、六字の名號を書き付けて、謡佛前に移し奉れば、上歌不思議や異香薫じつよ、不思議不思議や異香薫じつよ、花降り花降り下り音樂の、聲する事のあらたさよ。是に付けても稱名の、心一つを頼みつよ、鉦鉦打ち鳴らし、同音同音に、ワヤ「南無阿彌陀佛彌陀如來。  
後シテ「あらありがたの額の名號やな。末世の衆生濟度のため、佛の御名を現して、佛前にうつつす有難さよ。我も假なる夢の世に、和泉式部といはれし身の、佛果を得るや極樂の、歌舞の菩薩となりたるなり。二十五の、地謡菩薩聖衆の御法には、紫雲たなびく夕日影、シテ「常の燈火影清く、地謡「さながらこよぞ極樂世界に、生れけるかと有難さよ。

聖歌遙聞孤雲上聖衆來迎落日前―大江定基入道寂の詩

八邪―邪見思惟邪語邪業邪命邪方便邪念邪定

クリ「地謡」そもく、常誓願寺と申し奉るは、天智天皇の御願、御本尊は慈悲萬行の大菩薩、春日の明神の御作とかや。シテ「サレテ神と云ひ佛と云ひ、只これ水波の隔てなり。地謡「然るに和光の影廣く、一體分身現れて、衆生濟度の御本尊たり。シテ「されば毎日一度は、地謡「西方淨土に通ひ給ひて、來迎引攝の、誓を現しおはします。クセ笙歌遙かに聞ゆ、孤雲の上なれや、聖衆來迎す、落日の前とかや。昔在靈山の、御名は法華一佛、今西方の彌陀如來、慈眼視衆、生現れて、娑婆示現觀世音、三世利益同一體、有難や我等がための悲願なり。シテ「若我成佛の、光りを受くる世の人の、地謡「我が力には行き難き、御法の御舟の水馴棹、さよでも渡る彼岸に、至りくつて、地謡「極むる國の道なれや。十惡八邪の、迷ひの雲も空晴れ、眞如の月の西方も、こよを去る事遠からず。唯心の淨土とは、此誓願寺を拜むなり。シテ「歌舞の菩薩もさまぐの、地謡「佛事をなせる心かな。(舞)「シテ「ひとり猶、佛の御名を尋ね見ん、地謡「各歸る法の場人、各歸る法の場人、法の場人の、シテ「實にも妙なる稱名の數々、地謡「虚空に響くは、シテ「音樂の聲



地謡「異香薫じて、シテ謡「花降る雪の、地謡袖をかへすや返すくも、貴き上人の利益かなと、菩薩聖衆は面々に、御堂に打てる六字の額を、皆一同に禮し給ふは、あらたなりける奇瑞かな。

内八

蟻通

梗

概

紀貫之雨中に泉州蟻通明神を過ぎ、歌を詠みて神慮を和げたる事を作る。貫之集に曰く、紀の國に下りてかへりのほどまりて曰く、これに馬の死ぬべくわづらふ處に、道行く人立ち年頃社もなく、しるしは見えぬど、うたてある神のし給ふならん、まかゝるには命をなん申すといふに、幣帛もなければ、何業もせで手洗ひて、神おはしげもなしや、そも、ななにの神とか聞えんと問へば、蟻通の神といふを聞きて、よみて奉る。馬の心地やみにけり、蟻通の神といふを聞きて、よみて奉る。ほしをば思ふべしやは、(四番目)

シテ 蟻通明神 ワキ 紀貫之

ワキ次第「和歌の心を道として、和歌の心を道として、玉津島に参らん。是は紀の貫之にて候。我和歌の道に交はるといへども、いまだ住吉玉津島に参らず候程に、只今思ひ立

和歌の心を道として、玉津島明神は和歌の守護神なる故に此く云ふ

櫻居一  
一 時時歌行處氏涙  
一 離行かぞ一頃羽  
一 涙の重圍に陥り  
一 たる時力抜山  
一 今氣盡世時不  
一 利今難不近離  
一 不近今可奈何  
一 處々々々奈若  
一 何と歌へり、誰  
一 の上にてはぐい  
一 いかんすべきと  
一 い字行れるが如  
一 し  
一 ナトしめ一神樂  
一 を奏して神慮を  
一 涼しむること  
 下馬は渡り下  
 馬にて御通行

ち紀の路の旅にと志し候。道行夢に寝て、現に出づる旅枕、現に出づる旅枕、夜の關  
 戸の明暮に、都の空の月影を、さこそと思ひやる方も、雲居は跡に隔たり、暮れ渡る空  
 に聞ゆるは、里近けなる鐘の聲、里近けなる鐘の聲。詞あら笑止や、俄に日暮れ大雨降  
 りて、しかも乗りたる駒さへ伏して、前後を辨へず候は如何に。誰燈暗うしては數行  
 虞氏が涙の雨の、足をも引かず、驢行かず、虞奈何すべき便りもなし。あら笑止や候  
 ンテ、サレテ瀟湘の夜の雨頻に降つて、遠寺の鐘の聲も聞えず。なにとなく宮寺は、深夜の  
 鐘の聲、御燈の光なんどにこそ、神さび心も澄み渡るに、社頭を見れば燈火もなく、すど  
 しめの聲も聞えず、神は宜禰が習はしとこそ申すに、宮守一人もなき事よ。よし御  
 燈は暗くとも、和光の影はよも暗からじ。あら無沙汰の宮守どもや。  
 ワキ「調」なうく其火の光に付いて申すべき事の候。シテ「調」此あたりには御宿もなし。今少  
 し先へ御通りあれ。ワキ「調」今の暗さに行く先も見えず、しかも乗りたる駒さへ伏して、前  
 後を忘れて候なり。シテ「調」さて下馬は渡りもなかりけるか。ワキ「調」そもや下馬とは心得ず、

馬上のなき所一  
 馬上にて通行せ  
 られざる所の意

雨雲の一此歌貫  
 之集と異同あり  
 ありとほし一屋  
 有りといふに  
 蟻通の神名を含  
 めたり

ことは馬上のなき所か。シテ「調」あら勿體なの御事や、蟻通の明神とて、物咎めし給ふ御神  
 の、かくごと知りて馬上あらば、よも御命は候べき。ワキ「調」是は不思議の御事かな。さて  
 御社は、シテ「調」此森の中、ワキ「調」實にも姿は宮人の、シテ「調」ともしの光の影より見れば、  
 ワキ「調」實にも宮居は、シテ「調」蟻通の、地蔵神の鳥居の二柱、立つ雲透に、見ればかたじけ  
 なや、實にも社壇の有りけるぞ。馬上に折り残す、江北の柳蔭の、糸もて繫ぐ駒、かく  
 とも知らで神前を、恐れざるこそはかなけれ。恐れざるこそはかなけれ。  
 シテ「調」さて御身は如何なる人にて渡り候ぞ。ワキ「調」是は紀の貫之にて候が、住吉玉津島に  
 参り候。シテ「調」貫之にてましまさば、歌を詠うで神慮に御手向け候へ。ワキ「調」是は仰せに  
 て候へども、それは得たらん人にてこそあれ、我等が今の詞の末、いかで神慮に適ふべき  
 と、思ひながらも言の葉の、末を心に念願し、蟻雨雲の立ち重なる夜半なれば、あり  
 とほしとも思ふべきかは。シテ「調」雨雲の立ち重なる夜半なれば、ありとほしとも思ふべ  
 きかは。詞面白し面白し。我等適はぬ耳にだに、おもしろもと思ふ此歌を、などか納受

喜をのべし延  
喜の字を含めた  
リ  
旋頭・五七七五  
七七と續けたる  
歌  
混本一短歌の末  
七字無きもの  
逢坂の一貫之の  
歌一逢坂の圓の  
清水に影見えて  
今や引くらん望  
月の駒  
越鳥云々一各々  
その古里を忘れ  
ぬ意

なかるべき。ワキ誦心に知らぬ科なれば、何か神慮に背くべきと、レテ誦萬の詞は雨雲の、  
ワキ誦「立ち重なりて暗き夜なれば、レテ誦ありと星とも思ふべきかはとは、あら面白の御  
歌や。下歌地誦「凡そ歌には六義あり。是れ六道の巻に定め置いて、六つの色を見するなり。  
上歌されば和歌の事業は、神代よりも始まり、今人倫に遍し。誰か是を賞めざらん。中に  
も貫之は、御書所を承りて、古今までの、歌の品を選びて、喜びをのべし君が代の、  
直なる道を顯はせり。クセ凡そ思つて見れば、歌の心すなほなるは、是以て私なし。人代  
に及んで、甚だ起る風俗、長歌・短歌・旋頭・混本の類是なり。雜體一つにあらざれば、源  
流漸く繁る木の、花の内の鶯、又秋の蟬の吟の聲、いづれか和歌の數ならぬ。されば今  
の歌、我が邪をなさざれば、などかは神も納受の、心に適ふ宮人も、レテ誦かよる奇特  
に逢坂の、地誦關の清水に影見ゆる、月毛の此駒を、引き立て見れば不思議やな、もと  
の如くに歩み行く。越鳥南枝に巢をかけ、胡馬北風に嘶えたり。歌に和らぐ神心、誰か  
神慮の、誠を仰がざるべき。

八相一如来の衆  
生濟度に出世せ  
る八種の相降兜  
奉託胎注胎出胎  
出家成道轉法輪  
入涅槃

ワキ誦「宮人にてましまさば、祝詞を讀うで神慮をすとしめ御申し候へ。レテ誦「承り候  
誦いでく祝詞を申さんと、神の白木綿かけまくも、ワキ誦「同じ手向と木綿花の、レテ誦「雪  
を散らして、ワキ誦「再拜す。レテ誦「謹上再拜。敬つて白す神司、八人の八少女、五人の神  
樂男、雪の袖を返し、白木綿花を捧げつよ、神慮をすとしめ奉る。御神託に任せて、猶  
も神忠を致さん、有難や。そもく神慮をすとしむる事、和歌よりも宜しきはなし。其  
中にも神樂を奏し少女の袖、返すくも面白やな、神の岩戸のいにしへの袖、思ひ出で  
られて、和光同塵は結縁の始め、ワキ誦「八相成道は利物の終り。レテ誦「神の代七代、ワキ誦「す  
なほに人あつうして、レテ誦「精欲分つ事なし。地誦「天地開け始まりしより、舞歌の道こそ  
すなほなれ。

レテ誦「今貫之が言葉の末の、地誦「今貫之が言葉の末の、妙なる心を感ずる故に、假に姿を  
見ゆるぞとて、鳥居の笠木に立ち隠れ、あれはそれかと見しまよにて、かき消すやうに  
失せにけり。貫之も是を悦びの、名残の神樂夜は明けて、旅立つ空に立ち歸る、旅立つ

空に立ち歸る。

忠度

梗 概

平家の公達薩摩守忠度は、歌の道に志篤かりし人なり。出陣の途中より引返して、俊成卿の門を叩き、詠草を渡して、その勅撰集に入れられんことを頼みしに、その後よみ人知らずとして一首の歌の千載集に入りしは名高き話也。この曲はこれに忠度最後の事を加へて脚色す。材料は平家物語也。(二番目)

シテ 平忠度(前は樵夫) ワキ 僧

ワキ次第通 花をも憂しと捨つる身の、花をも憂しと捨つる身の、月にも雲は厭はじ。 是は俊成の御内に在りし者にて候。 さらにも俊成なくなり給ひて後、かやうの姿となりて候。 又西國を見ず候程に、此度思ひ立ち西國行脚と心ざし候。 サレ誠城南の離宮に赴き、都をへだつる山崎や、關戸の宿は名のみして、泊りも果てぬ旅の習ひ、憂き身はいつも交りの塵の浮世の芥川、猪名の小篠を分け過ぎて、下歌月も宿かる昆陽の池、水底清く澄みなし

城南の離宮一鳥羽にあり  
關戸の宿一昔關を置かれし所山城福澤の界

鹽木一照焼く  
用ひる薪

わくらはに  
原行平の歌

て、上歌蘆の葉分の風の音、蘆の葉分の風の音、聞かじとするに憂き事の、捨つる身まで  
 も有馬山、隠れかねたる世の中の、憂きに心はあだ夢の、覺むる枕に鐘遠き、難波は跡  
 に鳴尾洞、沖浪遠き小舟かな、沖浪遠き小舟かな。  
 一、鹽「實に世を渡る習ひとて、かく憂き業にもこりすまの、汲まぬ時だに鹽木を運べ  
 ば、乾せども隙は馴衣の、浦山かけて須磨の海、海人の呼聲ひまなきに、しばなく千鳥音  
 ぞ遠き。サレそもくこの須磨の浦と申すは、寂しき故に其名を得る。わくらはに問ふ人  
 あらば須磨の浦に、藻鹽たれつよわぶと答へよ。實にや漁の海人小船、藻鹽の煙松の風、  
 いづれか寂しからすと云ふ事なき。又此須磨の山陰に一木の櫻の候。是は或る人の亡  
 き跡のしるしの木なり。諸殊更時しも春の花、手向の爲に逆縁ながら、足引の山より歸  
 る折ごとに、薪に花を折りそへて、手向をなして歸らん、手向をなして歸らん。  
 ワキ「如何に是なる老人、おことは此山賤にてましますか。レテ「さん候、此浦の海人に  
 て候。ワキ「海人ならば浦にこそ住むべきに、山ある方に通はんをば、山人とこそいふべ

若木の櫻一須磨  
寺の門前にあり  
し名木忠度を喩

れ。レテ「そも海士人の汲む沙をば、焼かて其まよ置き候べきか。ワキ「實にく、これは  
 理なり。藻鹽焚くなる夕煙、レテ「絶間を遅しと鹽木とる、ワキ「道こそかはれ里離れの、  
 レテ「人音稀に須磨の浦、ワキ「近き後の山里に、レテ「上歌「柴といふ物の候へば、地謡「柴  
 といふ物の候へば、鹽木の爲に通ひ來る。レテ「餘りに愚なる、御僧の御説かなやな。  
 地謡「實にや須磨の浦、餘の所にや變るらん。夫れ花に辛きは、嶺の嵐や山嵐の、音をこ  
 そ厭ひしに、須磨の若木の櫻は、海少しだにも隔てねば、通ふ浦風に、山の櫻も散る物  
 を。ワキ「如何に尉殿、はや日の暮れて候へば、一夜の宿を御貸し候へ。レテ「うたてや  
 な此花の陰ほどの御宿の候ふべきか。ワキ「實にく、是は花の宿なれどもさりながら、誰  
 を主と定むべき。レテ「行き暮れて木の下陰を宿とせば、花や今宵の主ならましと、詠  
 めし人は此苦の下、痛はしや我等が様なる海人だにも、常は立ち寄り弔ひ申すに、御僧  
 達はなど逆縁ながら弔ひ給はぬ。おろかにまします人々かな。ワキ「行き暮れて木の下陰  
 を宿とせば、花や今宵の主ならましと、詠めし人は薩摩の守、レテ「忠度と申しよ人は

忠度の聲一度に  
法を掛く  
花の臺一極樂の  
運臺

定家一俊成の子

此一の谷の合戦に討たれぬ。ゆかりの人の植忍置きたる標の木にて候なり。ワヤ謡「こはそ  
も不思議の値遇の縁、さしもさばかり俊成の、シテ謡「和歌の友とて浅からぬ。ワヤ謡「宿は  
今宵の、シテ謡「主の人、地謡「名も忠度の聲聞きて、花の臺に座し給へ、シテ謡「有難や今よ  
りは、かく弔ひの聲聞きて、佛果を得んぞ嬉しき。地謡「不思議や今の老人の、手向の聲を  
身に受けて、喜ぶ氣色見えたるは、何の故にてあるやらん。シテ謡「御僧に弔はれ申さんと  
て、これまで来れりと、地謡「夕の花の陰に寝て、夢の告をも待ち給へ、都へ言傳て申さ  
んとて、花の陰に宿木の、行くかた知らずなりにけり。行くかた知らずなりにけり。(申入)  
ワヤ謡「先々都に歸りつと、定家に此事申さんと、上歌「夕月早くかけろふの、夕月早くか  
けろふの、おのが友よぶ村千鳥の、跡見えぬ磯山の、夜の花に旅寝して、浦風までも心  
して、春に聞けばや音すこき、須磨の關屋の旅寝かな。須磨の關屋の旅寝かな。  
後シテ謡「恥かしや亡き跡に、姿を歸す夢の内、覺むる心はいにしへに、迷ふ雨夜の物語、申  
さんために魂魄に、うつりかはりて來りたり。さなきだに妄執多き娑婆なるに、何なか

勅勘の身一朝歌  
よみ人知らず  
さくなみやの歌  
折角千載集には  
入りたれど名字  
をあらはされざ  
りしなり

狐川一淀川に落  
つる川、白氏文  
集に狐藏蘭菊  
冠とある語を  
冠らしむ

今はかうよ一最  
早是迄の意

をかの千載集の、歌の品には入りたれども、勅勘の身の悲しさは、よみ人知らずと書か  
れし事、妄執の中の第一なり、されどもそれを撰じ給ひし、俊成さへ空しくなり給へば、  
御身は御内にありし人なれば、今の定家君に申し、然るべくは作者をつけてたび給へと、  
夢物語申すに、須磨の浦風も心せよ。  
ワヤ謡「實にや和歌の家に生れ、その道を嗜み、敷島の蔭に依つし事、人倫に於て専らな  
り。ワヤ謡「中にも此忠度は、文武二道を受け給ひて、世上に眼高し。地謡「そもく後  
白河の院の御宇に、千載集を撰はる。五條の三位俊成の卿、承つて之を撰ず。下歌「年は  
永壽の秋のころ、都を出でしときなれば、地謡「さも忙はしかりし身の、さも忙はしかり  
し身の、心の花か蘭菊の、狐川より引き返し、俊成の家に行き、歌の望みを嘆きしに、望  
み足りぬれば、又弓箭にたづさはりて、西海の波の上、暫しと頼む須磨の浦、源氏の住  
み所、平家の爲はよしなしと、知らざりけるぞはかなき。地謡「さる程に一の谷の合戦、  
今はかうよと見えし程に、皆々舟に取り乗つて、海上に浮む。シテ謡「我ら船に乗らんとて、

西拜まん一西方  
極樂淨土をいよ

其年もまだしき  
一まだ老人ならぬ  
意ぬ  
上のつね一言尋  
常の人ならじと  
なり

汀みぎはの方に打ち出でしに後を見れば、武藏國むさしのくにの住人ぢゆうじんに、岡部おかべの六彌太ろくや忠澄ただずみと名のつて、六  
七騎しちきにて追つかけたり。是こそ望む所のぞこころよと思ひ、駒こまの手綱たづなを引つ返せば、六彌太ろくややがて  
むすと組み、兩馬りやうばが間にどうと落ち、彼の六彌太ろくやを取つておさへ、既に刀かたなに手をかけし  
に、地謡「六彌太ろくやが郎等らうどう御後おんうしろより立ちまはり、上うへにまします忠度たけのりの、右の腕かたなを打ち落せば、  
左の御手おんてにて、六彌太ろくやを取つて投げ除け、今は叶かなはじと思召おぼしめして、そこ退き給へ人々よ  
西拜さいがまんと宣のたまひて、光明くわうみやう遍照へんぜう十方世界じつぱうせかい、念佛衆生ねんぶつじゆうじやう攝取しやくしゆ不捨ふしやと宣のたまひし、御聲おんこゑの下したよりも、  
痛いたはしやあへなくも、六彌太ろくや刀かたなを抜き持ち、つひに御首おんくびを打ち落す。地謡「六彌太ろくや心に思  
ふやう。地謡「痛いたはしや彼人かのひとの、御死骸おんしがいを見奉みたまれば、其年そのとしもまだしき、長月ながつき頃の薄曇うすぐもり、  
降りみ降ふらすみ定めなき、時雨しぐれぞ通かよふ村紅葉むらもみぢの、錦にしきの直垂ひたれは、たゞ世よの常つねによもあらず、  
如何いかさま是は公達きんだちの、御中おんなかにこそあるらめと、御名おんなゆかしき所に、簾あしらみを見れば不思議ふしぎや  
な、短册たんじやくを附つけられたり。見れば旅宿りよしゆくの題だいをする、行き暮くれて木この下陰したかげを宿やどとせば、  
地謡「花はなや今宵こよひの主あるじならまし、忠度たけのりと書かかれたり。地謡「さては疑うたがひあらしの音ねに、聞きえ

花は根に歸るな  
り一千載集の歌  
詞

し薩摩さつまの守まもりにてますぞ痛いたはしき。  
地謡「御身おんみ此花このはなの、陰かげに立ち寄り給たまひしを、かく物語ものがたり申まをさんとて、日ひを暮くらしとどめし  
なり。今は疑うたがひよもあらず、花はなは根ねに歸かへるなり。我跡わがあととひてたび給へ、木陰こかげを旅りよの宿やどと  
せば、花はなこそ主あるじなりけれ。

熊野

梗 概

平宗盛に熊野といふ侍女あり。老母の病氣の爲め暇を乞へど許されず強ひて花見に伴はる。然るに落花につけていかにせん都の春も惜しけれど馴れし東の花や散るらんと詠みて宗盛を感動せしむ。これ観音の利益なりとの意を作る。都の春景色と老母を懐ふ情と信仰の念と叙し去り叙來りて文章の優麗なる談曲中の白眉たる定評あり。(三番目)

シテ熊野 ツレ朝顔  
ワキ 平宗盛 トモ 太刀持

平宗盛一清盛の三男八島大臣といふ

ワキ「是は平の宗盛なり。さても遠江の國池田の宿の長をば熊野と申し候。久しく都に留め置て候が、老母のいたはりとして度々暇を乞ひ候へども、此春ばかりの花見の友と思ひ留め置て候。いかに誰かある、トモ「御前に候。ワキ「熊野來りてあらば此方へ申し候へ。」

夢の間惜しき春一春は好時季にして一刻も惜しまるゝ意

トモ「畏つて候。

ツレ「次第」夢の間惜しき春なれや、夢の間惜しき春なれや、咲く頃花を尋ねん。トモ「是は遠江の國池田の宿、長者の御内に仕へ申す、朝顔と申す女にて候。嗣さても熊野久しく都に御入候が、此程老母の御いたはりとして、度々人を御上せ候へども、更に御下りもなく候程に、此度は朝顔が御迎にのほり候。道行「此程の、旅の衣の日も添ひて、旅の衣の日も添ひて、幾夕ぐれの宿ならん。夢も數そふ假枕、明かし暮らして程もなく、都に早く著きにけり。都に早く著きにけり。急ぎ候程に、是は早都に著きて候。是なる御内が熊野の御入り候所にてありけに候。まづく案内を申さばやと思ひ候。いかに案内申し候。池田の宿より朝顔が参りて候、それく御申し候へ。」

養得自爲花父母一朗詠集の句

ツレ「草木は雨露のめぐみ、養ひ得ては花の父母たり、況んや人間に於てをや。あら御心もとなや何とか御入り候らん。ツレ「池田の宿より朝顔がまゐりて候。ツレ「なに朝顔と申すか、あら珍しや、さて御いたはりは何と御入りあるぞ。ツレ「以てのほかには御



見うづる一見む  
とするの意  
突止一氣の毒の  
意  
御目にかけて一  
宗盛に見せんと  
の意

便無う一不都合  
の意  
甘泉殿の云々一  
以下文の段、漢  
の武帝の李夫人  
の住みたる宮殿  
驪山宮は唐の玄  
宗皇帝の寵姫楊  
貴妃住めり  
末世一代教主の  
如來一釋迦をい  
ふ  
朽木櫻一老母を  
いふ

入り候。是に御文の候御覽候へ。シテ調「あら嬉しや先々御文を見うするにて候。あら笑止  
や、此御文のやうも頼み少う見えて候。ツレ調「左様に御入り候。シテ調「此上は朝顔をも連  
れて参り、又此文をも御目にかけて、御暇を申さうするにてあるぞ、こなたへ來り候へ。  
誰か渡り候。トモ調「誰にて渡り候ぞ。や、熊野の御参りにて候。シテ調「わらはが参りたる  
由御申し候へ。トモ調「心得申し候。いかに申し上げ候。熊野の御参りにて候。ツキ調「こな  
たへ來れと申し候へ。トモ調「畏つて候。此方へ御参り候へ。シテ調「いかに申し上げ候。老  
母のいたはり以ての外に候とて、此度は朝顔に文をのほせて候。便無う候へども、そと見  
参り入れ候べし。ツキ「なにと故郷よりの文と候や。見るまでもなしそれにて高らかに  
讀み候へ。

シテ調「甘泉殿の春の夜の夢、心を碎く端となり、驪山宮の秋の夜の月、終なきにしもあ  
らず。末世一代教主の如來も、生死の掟をば遁れ給はず。過ぎにし二月の頃申しよ如く、  
何とやらん此春は、年ふりまさる朽木櫻、今年ばかりの花をだに、待ちもやせじと心弱

老いぬれば一伊  
勢物語の歌  
さらぬ別の一初  
句世の中に末句  
人の子の爲

き、老の鶯逢ふ事も、涙に咽ふばかりなり。たど然るべくはよきやうに申し、しばし  
の御暇を賜はりて、今一度まみえおはしませ。さなきだに親子は一世の中なるに、同じ  
世にだに添ひ給はずは、孝行にもはづれ給ふべし。唯かへすくも命の内に今一度、見  
参らせたくこそ候へとよ。老いぬればさらぬ別のありといへば、いよく見まくほしき  
君かなと、古事までも思出の涙ながら書きとどむ。上歌そも此歌と申すは、そも此歌と申  
すは、在原の業平の、其身は朝に隙なきを、長岡に住み給ふ、老母のよめる歌なり。さ  
てこそ業平も、さらぬ別のなくもがな、千代もと祈る子の爲と、よみし事こそあはれな  
れ。よみし事こそあはれなれ。シテ調「今はかやうに候へば、御暇を賜はり、東に下り候  
べし。ツキ調「老母の痛はりは然る事なれどもさりながら、この春ばかりの花見の友、いか  
で見すて給ふべき。シテ調「御詞をかへせば恐れなれども、花は春あらば今に限るべから  
ず、是はあだなる玉の緒の、長き別れとなりやせん。唯御暇を賜はり候へ。ツキ調「いやい  
や左様に心弱き、身に任せてはかなふまじ。いかに心慰めの、花見の車同車にて、

おもひの家の内  
比世を火宅と  
いふ思ひに火を  
言掛く

春前有雨花開  
早秋後無霜葉  
寂遅一雨聯抄解  
の詩  
山外有山山不  
盡路中多路路  
無窮一同上  
山青山白雲來去  
人樂人愁酒有無  
一同上  
誰言春色從東  
到一朗詠集の詩  
句

聞提一太忍不信  
の徒それをも觀  
音は救ふとなり  
たちちね一母

誰ともに心を慰まんと、上歌地謡「牛飼車寄せよとて、牛飼車寄せよとて、是もおもひの家  
の内、はや御出と勸むれど、心は先に行きかぬる、足弱車の力なき花見なりけり。

レテ謡「名も清き、水のまにくとめくれば、地謡「河は音羽の山櫻、東路とても東山、せめ  
て其方のなつかしや。地謡「春前に雨有つて花の開くる事早し、秋後に霜なうして落葉遅  
し。山外に山有つて山盡きず、路中に道多うして道きはまりなし。レテ謡「山青く山白くし  
て雲來去す。地謡「人樂しみ人愁ふ、是れ皆世上の有様なり。誰か言ひし春の色、けに長閑  
なる東山、上歌し、四條五條の橋の上、四條五條の橋の上、老若男女貴賤都鄙、色めく花衣、袖  
を列ねて行末の、雲かと見えて八重一重、さく九重の花ざかり、名に負ふ春のけしきか  
な。名に負ふ春のけしきかな。

ロンギ地謡「河原おもてを過ぎゆけば、急ぐ心の程もなく、車大路や六波羅の、地藏堂よと  
伏し拜む。レテ謡「觀音も同座あり。聞提救世の方便あらたに、たちちねを守り給へや。  
地謡「けにや守りの末すぐに、頼む命は白玉の、愛宕の寺も打ち過ぎぬ。六道の辻とかや。

花車一花見車

播磨瀧磨一磨  
磨の襦かちん  
といふ織物の事  
を以て徒歩の序  
とす

レテ謡「實におそろしや此道は、冥途に通ふなるものを、心細鳥邊山、地謡「煙の末も薄霞  
む、聲も旅雁の横たはる、レテ謡「北斗の星の曇りなき、地謡「御法の花も開くなる、レテ謡「經  
書堂は是かとよ。地謡「其たちちねを尋ぬなる、子安の塔を過ぎ行けば、レテ謡「春の隙行  
く駒の道、地謡「はや程もなく是ぞこの、レテ謡「車宿り、地謡「馬留め、こよより花車、おり  
るの衣播磨瀧、飾磨の徒歩路清水の、佛の御前に念誦して、母の祈誓を申さん。

ワヤ調「いかに誰かある。トモ調「御前に候。ワヤ調「熊野はいづくにあるぞ。トモ調「いまだ御堂  
に御座候。ワヤ調「何とて遅なはりたるぞ。急いで此方へと申し候へ。トモ調「畏つて候。い  
かに朝顔に申し候。はや花の本の御酒宴の始まりて候。急いで御参りあれとの御事にて  
候。其よし仰せられ候へ。レテ、ツレ調「心得申し候。いかに申し候。はや花の本の御酒宴の  
始まりて候。急いで御参りあれとの御事にて候。レテ調「何と早御酒宴の始まりたると申  
すか。レテ、ツレ調「さん候。レテ調「さらば参らうするにて候。

レテ調「なうく、皆々近う御参り候へ、あら面白の花や候。今を盛と見えて候に、何とて

花前蝶舞紛々雪  
柳上鶯飛片々金  
―百聯抄解の時

婆羅雙樹―釋迦  
此木の下にて入  
滅す時に其木萎  
れしとなり

青かりし葉の秋  
―和泉式部に對  
て童の詠みし歌  
に「時雨する稻  
荷の山の紅葉は  
はあをかりしよ  
り思ひそめて  
き」  
春雨の―古今集  
の歌末句人しな  
ければ

御當座などを遊ばされ候はぬぞ。クリ謠實にや思ひ内にあれば、色外に顯る。地謡「よし  
やよしなき世の習ひ、歎きても又餘りあり。レテ、サシ謠「花前に蝶舞ふ紛紛たる雪、地謡「柳上  
に鶯飛ぶ片片たる金。花は流水に随つて香の來る事速し、鐘は寒雲を隔てよ聲の至る  
事遅し。クセ清水寺の鐘の聲、祇園精舎をあらはし、諸行無常の聲やらん。地主權現の花  
の色、娑羅雙樹のことわりなり。生者必滅の世のならひ、實にためしある粧ひ、佛も元  
は捨てし世の、半は雲に見えぬ、鶯の御山の名を残す、寺は桂の橋柱、立ち出でて峯の  
雲、花やあらぬ初櫻の、祇園林下河原、レテ謠「南を遙かにながむれば、地謡「大悲擁護の薄  
霞、熊野權現の移ります、御名も同じ今熊野、稻荷の山の薄紅葉の、青かりし葉の秋、又  
花の春は清水の、唯たのめ頼もしき、春も千々の花盛、レテ謠「山の名の、音羽嵐の花の  
雪、地謡「深き情を人や知る。レテ詞「妾御酌に参り候べし。ワキ詞「いかに熊野、一さし舞  
ひ候へ。地謡「深き情を人や知る。(中ノ舞)レテ詞「なうく、俄に村雨のして花の散り候は如  
何に。ワキ詞「けにく、村雨の降り來つて花を散らし候よ。レテ謠「あら心なの村雨やな春雨

東の花―母を諷  
ふ

なか／＼の事―  
いかにもといふ  
意

木綿附鳥―鶯の  
こと鳥が鳴くは  
東の枕詞

の、地謡「降るは涙か、降るは涙か櫻花、散るを惜しまぬ人やある。ワキ詞「由ありけなる言葉  
の種取り上げ見れば、謠いかにせん都の春も惜しけれど、レテ謠「なれし東の花や散るらん。  
ワキ詞「けに道理なり哀なり。早々暇とらするぞ、東に下り候へ。レテ謠「なに御暇と候や。  
ワキ詞「なか／＼の事、とく／＼下り給ふべし。レテ謠「あら嬉しや尊やな、是觀音の御利生  
なり。是までなりや嬉しやな。地謡「是までなりや嬉しやな。かくて都に御供せば、また  
もや御意の變るべき、只このまよに御暇と、木綿附の鳥が鳴く、東路さして行く道の、  
やがて休らふ逢坂の、關の戸さしも心して、明け行く跡の山見えて、花を見すつるかり  
がねの、それは越路我は又、東に歸る名残かな。東に歸る名残かな。

### 遊行柳

梗 遊行上人、奥州下向の折しも、柳樹の精現れ、法力を受けて成佛する事を作る。末段柳に關する文學上の故事を加ふ。  
 概 (三番目)

シテ 柳の精前は老人　ワキ 遊行上人

ワキ次第歸るさ知らぬ旅衣、歸るさ知らぬ旅衣、法に心や急ぐらん。詞是は諸國遊行の聖にて候。我一遍上人の教を受け、遊行の利益を六十餘州に弘め、六十萬人決定往生の御札を、普く衆生に與へ候。此程は上總の國に候ひしが、これより奥へと志し候。遊行諸國津洲の、國々廻る法の道、國々廻る法の道、迷はぬ月も光添ふ、心の奥を白河の、關路と聞けば秋風も、立つ夕霧の何くにか、今宵は宿を狩衣、日も夕暮になりにけり。日も夕暮になりにけり。詞 急ぎ候程に、音にきよし白河の關をも過ぎぬ。又是にあまた道

奥一陸奥

何くにか一新古今集の歌下句日にも夕暮の暈の嵐

のを見て候、廣き方へ行かばやと思ひ候。

シテ詞「なうく」遊行上人の御供の人に申すべき事の候。ワキ詞「遊行の聖とは札の御所望にて候か。老足なりともいまして急ぎ給へ。シテ詞「ありがたや御札をも賜はり候べし。まづ先年遊行の御下向の時も、古道とて昔の街道を御通り候ひしなり。されば昔の道を教へ申さんとて、はるく是まで参りたり。ワキ詞「不思議やさては先の遊行も、此道ならぬ古道を、諸通りし事の有りしよなう。シテ詞「昔は此道なくして、あれに見えたる一村の、森のこなたの河岸を、御通りありし街道なり。其上朽木の柳とて名木あり。諸かよる尊き上人の、御法の聲は草木までも、成佛の縁ある結縁たり。下歌「此方へいらせ給へとて、老いたる馬にはあらねども、道しるべ申すなり。急がせ給へ旅人。上歌「けにさぞな所から、けにさぞな所から人跡絶えて荒れはつる。葎蓬生刈萱も、亂れあひたる淺茅生や、袖に朽ちにし秋の霜、露分衣きて見れば、昔を殘す古塚に、朽木の柳枝さびて、蔭踏む道は末もなく、風のみ渡るけしきかな。風のみ渡るけしきかな。

老いたる馬一齊の管仲老馬を用ゐて踏み迷ひたる道を得し故事淺茅生や一新古今集の歌下句忘れぬ夢をふく嵐かな

シテ調「是こそ昔の街道にて候へ。又是なる古塚の上なるこそ朽木の柳にて候、よくく御覽候へ。ワキ調「さては此塚の上なるが名木の柳にて候ひけるぞや。遙けに川岸も水絶えて、河そひ柳朽ち残る、老木はそれとも見えわかず、葛のみはひかより 青苔梢を埋む有様、眞に星霜年ふりたり。調「さていつの世よりの名木やらん、委しく語り給ふべし。シテ調「昔の人の申しおきしは、鳥羽の院の北面、佐藤兵衛憲清出家し、西行と聞えし歌人、此國に下り給ひしが、頃は水無月半なるに、此河岸の木のもとに、暫し立ちより給ひつづ、一首を詠じ給ひしなり。ワキ調「謂れを聞けば面白や。さてく西行上人の、詠歌は何れの言の葉やらん。シテ調「六時不絶の御勤めの、隙なき内にも此集をば、調「御覽じけるか新古今に、上歌地謡「道のべに、清水ながるよ柳陰、清水ながるよ柳陰、しばしとてこそ立ちとまり、涼みとる言の葉の、末の世々までも、残る老木はなつかしや。かくて老人上人の、御十念を賜はり、御前を立つと見えつるが、朽木の柳の古塚に、寄るかと思えて失せにけり、寄るかと思えて失せにけり。(中入)

北面一院の武士  
水無月一六月

六時一初夜、中夜、後夜、晨朝  
日中、日没  
道のべに一末句  
しばしとてこそ  
立ちとまりつれ

思ひの珠一歌珠

ワキ調「不思議やさては朽木の柳の、我に詞をかはしけるよと、上歌思ひの珠の数々に、思ひの珠の数々に、御法をなして稱名の、聲打ち添ふる初夜の鐘、月も曇らぬ夜もすがら、露をかたしく袂かな、露をかたしく袂かな。後シテ調「沅水羅紋海燕かへる、柳條恨みを牽いて荆臺に至る、徒に朽木の柳時を得て、地謡「今ぞ御法に合竹の、シテ調「直に導く彌陀の教、地謡「衆生稱念、必得往生の、功力に引かれて草木までも、佛果に至る老木の柳の、髪も亂るよ白髪の老人、忽然と現れ出でたる烏帽子も、柳さびたる有様なり。ワキ調「不思議やなさまも古塚の草深き、朽木の柳の本より、其様化したる老人の、烏帽子狩衣を著しつと、現れ給ふは不審なり。シテ調「何をか不審し給ふらん。はや我が姿はあらはし衣の、日も夕暮の道しるべせし、其老人にて候なり。ワキ調「さては昔の道しるべせし、人は朽木の柳の精、シテ調「御法の教なかりせば、非情無心の草木の、臺に到る事あらじ。ワキ調「中々なりや一念十念、シテ調「唯一聲の内、内に生ると、ワキ調「彌陀の教を、シテ調「身に受けて、上歌地謡「此界一人念佛名、西方便有一

沅水羅紋海燕回  
柳條恨即到荆  
臺一三體時李  
群玉送客詩な  
り沅水は川の名  
羅紋は浪の紋刺  
臺は地名  
柳さび一烏帽子  
の一種淺烏帽子  
とも云ふ

此界一人云々一  
五會法華讀の文  
此界にて申す念  
佛を稱として極  
樂に一の蓮花生  
ずる也其人命終  
の時は此花還來  
りて迎ふとなり

瀧瀬一河陀の智水をそとぎ給へとなり  
他力一佛の教をたのむこと  
貸秋一船を作り初めし人

宮前楊柳寺前花  
三體詩王德華  
清宮詩

四本の木陰一柳  
の庭のかよりの木  
手飼の虎一猫をいよ  
柏木一源氏物語  
の柏木右衛門督  
が夕霧大將と蹴鞠をなし女三の宮を見初めし事

蓮生、但使一生常不退、此花歸つてこよに向ひ、上品上生に至らん事ぞうれしき。

レテ誦「釋迦既に滅し、彌勒未だ生ぜず。彌陀の悲願を頼ますは、いかで佛果に至るべき。

アリ地誦「南無や瀧濁歸命頂禮、本願偽りまします。超世の悲願に身を任せて、他力

の船に法の道、レテ、サレ誦「則ち彼岸に至らん事、一葉の船の力ならずや。地誦「彼黃帝の貸

狄が心、聞くや秋吹く風の音に、散りくる柳の一葉の上に、蜘蛛の乗りてさよがにの、糸

引き渡る姿より、たくみ出だせる船の道、これも柳の徳ならずや。レテ誦「其外立宗華清宮

にも、地誦「宮前の楊柳寺前の花とて、眺め絶えせぬ名木たり。クセそのかみ洛陽や、清水

寺の古、五色に見えし瀧浪を、尋ね登りし水上に、金色の光さす、朽木の柳、忽に、楊

柳觀音と現れ、今に絶えせぬ跡とめて、利生あらたなる、歩を運ぶ靈地なり。されば都

の花盛、大宮人の御遊にも、蹴鞠の庭の面、四本の木陰枝たれて、暮に數ある杳の音、

レテ誦「柳櫻をこきまかせて、地誦「錦をかざる諸人の、花やかなるや小簾の隙、洩りくる風

の匂ひより、手飼の虎の引綱も、長き思ひに憎の葉の、其柏木の及びなき、戀路もよし

柳花苑一樂の名

玉にもぬける  
古今集に「淺緑  
露よりかけて白  
露を玉にもぬけ  
る春の柳か」

なしや。是は老いたる柳色の、狩衣も風折も、風に漂ふ足もとの、弱きもよしや老木の

柳、氣力無うして弱々と、立ち舞ふも夢人を、現と見るぞはかなき。レテ誦「教嬉しき法の道

地誦「迷はぬ月につれてゆかん。(序ノ舞)レテ誦「青柳に鶯傳ふ羽風の舞、地誦「柳花苑とぞ思ほ

えにける。レテ誦「柳の曲も歌舞の菩薩の、舞の袂を返すくも、上人の御法を受け、喜ぶ

報謝の舞も、是までなりと名残の涙の、地誦「玉にも貰ける春の柳の、レテ誦「暇申さんと木

綿附の鳥も鳴き、地誦「別れの曲には、レテ誦「柳條を縮ぬ。地誦「手折るは青柳の、レテ誦「姿

もたをやかに、地誦「結ぶは老木の、レテ誦「枝もすくなく、地誦「今年ばかりの風や厭はんと、

漂ふ足もとも、よろく／＼よろく／＼と、倒れ臥柳、假寢の床の、草の枕の一夜の契も、他

生の縁ある上人の御法、西吹く秋の風打ち拂ひ、露も木の葉も散りく／＼に、露も木の葉

も散りく／＼になり果てて、残る朽木となりけり。

# 藤戸

梗概

佐々木盛綱備前の兒島にて平家を攻めし時、淺瀬を教へく  
れし漁夫を殺し、我一人の功名とせし物語により、漁夫の老  
母の亡靈を出し、恨を訴へしめ、法事の功德によりて得脱成  
佛する事を作る。(四番目)

シテ 海士の靈前は老母) ワキ 佐々木盛綱  
トモ 従者

佐々木三郎盛綱  
秀義の三男後  
入道して西念と  
云ふ  
入部一入國のこ  
と

ワキ次第謡「春の湊の行末や、春の湊の行末や、藤戸の渡なるらん。是は佐々木の三郎盛綱にて候。さても今度藤戸の先陣を仕りし御恩賞に、兒島を賜はつて候。今日は日もよく候程に、只今入部仕り候。道行謡秋津洲の、波靜なる島廻り、波靜なる島廻り、松吹く風も長閑にて、實に春めける朝ほらけ、船も道ある浦傳ひ、藤戸に早く著きにけり。藤戸に早く著きにけり。如何に誰かある。トモ謡「御前に候。ワキ謡「皆々訴訟あらんする

海士の列る一古  
今集の歌末句世  
をば恨みて  
彌延の人一武士

音高し一聲高し  
に同じ制する詞

扱ひ草一人の持  
て扱ふ種話の種  
なり

者は罷り出でよと申し候へ。トモ謡「畏つて候。如何に皆々たしかに聞き候へ。此浦の御主佐々木殿の御入部にて有るぞ。何事も訴訟あらん者は罷り出で申し候へ。

一聲謡「老の波、越えて藤戸の明暮に、昔の春の歸れかし。ワキ謡「不思議やな是なる女の、訴訟ありけに、某を見てさめくと泣くは何事にてあるぞ。シテ謡「海士の列る藻に栖む蟲の我からと、音をこそ泣かめ世をば實に、何か恨みん本よりも、因果の廻る小車の、彌延の人の罪科は、皆報いぞといひながら、我が子ながらも餘り實に、科も例も波の底に、沈め給ひし御情なさ、申すにつけて便なけれども、御前に参りて候なり。ワキ謡「何と我が子を波に波めし恨みとは更に心得ず。シテ謡「さてなう我が子を波に沈め給ひし事は候。ワキ謡「あゝ音高し何とく。シテ謡「なう猶も人は知らじとなう。なか／＼に其有様を顯はして、跡をも弔ひ又は世に、生き残りたる母が身をも、訪ひ慰めてたび給はど、少しは恨みも晴るべきに、下歌地謡「いつまでとてか忍ぶ山、忍ぶかひなき世の人の、扱ひ草も繁き物を、何と隠し給ふらん。上歌住み果てぬ、此世は假の宿なるを、此世は假の宿なるを、親

子とて何やらん、幻に生れ来て、別るれば悲しみの、思ひは世々を引く、絆となつて苦しみの、海に沈め給ひしを、せめては訪はせ給へや、跡弔はせ給へや。

「言語道断」かよる不便なる事こそ候はね。今は何をか包むべき。其時の有様語つて聞かせ候べし。近う寄つて聞き候へ。語さても去年三月二十五日の夜に入りて、浦の男を一人近づけ、此海を馬にて渡すべき所やあると尋ねしに、彼者申すやう、さん候河瀬の様なる所の候。月頭には東にあり、月の末には西にあると申す。即ち八幡大菩薩の御告と思ひ、家の子若黨にも深く隠し、彼者と唯二人夜にまぎれ忍び出で、此海の浅みを見置きて歸りしが、盛綱心に思ふやう、いやく下郎は筋なき者にて、又もや人に語らんと思ひ、不便には存じしかども、取つて引き寄せ二刀刺し、其まゝ海に沈めて歸りしが、さては汝が子にてありけるよな。よし／＼何事も前世の事と思ひ、今は恨みを晴れ候へ。レテ「言」さてなう我子を沈め給ひし、在所は取り分き何處の程にて候ぞ。ワ「言」あれに見えたる浮洲の岩の、少し此方の水の深みに、死骸を深く隠しとなり。レテ「言」さては

去年三月一元宵  
元年のこと平家  
物語には九月東  
鑑には十二月と  
す  
月頭一月初め

筋なき者一餘理  
を辨へぬ者

人の申しよも、少しも違はざりけり。あの邊ぞとのふ波の、ワ「言」夜の事にて有りし程に、人は知らじと思ひしに、レテ「言」やがて隠れはなき跡を、ワ「言」深く隠すと思へども、レテ「言」好事門を出でず、地「言」悪事千里を行けども、子をば忘れぬ親なるに、失はれ参らせし、こはそも何の報いぞ、實にや人の親の、心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ知られたれ、もとよりも定めなき、世の理はまのあたり、老少不定の境なれば、若きを先立てて、つれなく残る老鶴の、眠りの内なれや。夢とぞ思ふ親と子の、二十餘の年竝、かりそめに立ち離れしをも、待ち遠に思ひしに、又いつの世に逢ふべき。レテ「言」世に住めば、憂き節繁き河竹の、地「言」杖柱とも頼みつる、海士の此世を去りぬれば、今は何にか、命の露を懸けてまし。ありがひも有らばこそ、とても憂き身なるものを、亡き子と同じ道になしてたばせ給へと、人目も知らず伏し轉び、我子返させ給へやと、現なき有様を、見るこそ哀なりけれ。

好事不出門  
惡事千里一  
覆土の語  
人の親一後撰集  
の歌末句迷ひぬ  
るかな

「言」あら不便や候。今は恨みてもかひなき事にて有るぞ。彼者の跡をも弔ひ、又妻子



をも世に立てうするにてあるぞ。まづ我家に歸り候へ。如何に誰かある。餘りに彼者不便に候程に、さまざまの弔ひをなし、又今の母をも世に立てうするにて有るぞ。其由申し付け候へ。狂言シカク。

般若一智慧のこと  
一切有情云々  
大般若經の文

ワキ「さまのくに、弔ふ法の聲立てよ、弔ふ法の聲立てよ、波に浮寝の夜となく、晝とも分かれぬ弔ひの、般若の船の、おのづから其纜をとく法の、心を静め聲を上げ、一切有情殺害三界不墮惡趣。

後「憂しや思ひ出でじ、忘れんと思ふ心こそ、忘れぬよりは思ひなれ。さるにても身はあだ波の定めなくとも、科によるべの水にこそ、濁る心の罪あらば、重き罪科も有るべきに、よしなかりける海路のしるべ、思へば三途の瀬踏なり。

ワキ「不思議やな早明方の水上より、化したる人の見えたるは、彼の亡者もや見ゆらんと、奇異の思ひをなしければ、御弔ひは有難けれども、恨みは盡きぬ妄執を、申さん爲に來りたり。ワキ「何と恨を夕月の、そのよに歸る浦波の、藤戸の渡り教へよ

弘誓一觀音の衆  
生濟度のこと

との、仰せも重き岩波の、河瀬の様なる浅みの通りを、ワキ「教へしまよに渡りしかば、ワキ「弓矢の御名を揚ぐるのみか、ワキ「昔より今に至るまで、馬にて海を渡す事、ワキ「希代の例なればとて、ワキ「此島を御恩に賜はる程の、ワキ「御よろこびも我故なれば、ワキ「如何なる恩をも、ワキ「給ふべきに、地「思ひの外に一命を、召されし事は、馬にて海を渡すよりも、是ぞ希代の例なる。さるにても忘れがたや、あれなる浮洲の岩の上に、我を連れて行く水の、氷の如くなる刃を抜いて、胸のあたりを刺し通し、刺し通さるれば肝魂も、消えくとなる處を、其まゝ海に押し入れられて、千尋の底に沈みしに、ワキ「折節引く汐に、地「折節引く汐に、引かれて行く波の、浮きぬ沈みぬ埋木の、岩のはさまに流れかよつて、藤戸の水底の、惡龍の水神となつて、恨みをなさんと思ひしに、思はざるに御弔ひの、御法の御船にのりを得て、即ち弘誓の船に浮めば、水馴棹、さし引きて行く程に、生死の海を渡りて、願ひのまよにやすくと、彼岸に至り至りて、彼岸に至り至りて、成佛得脱の身となりぬ、成佛の身とぞなりにける。

内九

玉井たまのい

梗概

彦火々出見尊は獵をなし給ひ、御兄火闌降命は漁をなし給ひしが、或時各業を交へてなし給ひしに、尊兄命の釣を失ひ給ふ。それを返せと兄命の責め給ふに困じ給ひしが、鹽土翁の勳によりて海宮に行幸し給ひ、海神の助によりて釣を得給ふのみならず、滿珠干珠をも得て還幸あり。遂に兄命を威服し給ふ。此古史神話を材料としたるもの即ちこの曲なり。(脇能)

前シテ 豐玉姫 ツレ 玉依姫  
後シテ 海神 ツレ 天女  
ワ キ 彦火々出見尊

ワヤ、ヤシ、誦、それ天地開け始まりしより、天神七代地神四代に至り、火々出見尊とは我事なり。況さても兄火闌降命の釣針を、かりそめながら海邊に釣を垂れしに、彼釣針を魚

天神七代第一に國常立尊第二に國狹穗尊第三に豐斟浮尊第四に泥土煮尊沙土煮尊(男女)第五に大戸道尊大戸間邊尊(男女)第六に面足尊根尊(男女)第七に伊弉諾尊伊弉册尊(男女)  
地神四代第一に天照大神第二に正哉吾勝々速日天忍穗耳尊第三に天津彦々火瓊杵尊第四に彦火々出見尊かりそめ一借を掛く

はたる一貫め促すこと  
鹽土男一彦火々  
出見尊を教ひし  
翁なりその名義  
は詳ならねど汐  
づ路の義にて海  
路の案内者かと  
いふ  
無目籠一目の細  
なる籠といふ或  
は竹籠の帆を掛  
けたる舟ならん  
ともいふ  
湯津一五百箇の  
義

に取られぬ。此由を兎命に申せども、唯もとの針を返せと宣ふ間、劍をくづし針に作りて返すといへども、なほもとの鉤をはたる、さらば海中に入り、彼釣針を尋ねんと思ひ立ちて候。誑わたづみのそことも知らぬ鹽土男の、翁の教に従ひて、無目籠の猛き心、上歌直なる道を行く如く、直なる道を行く如く、波路遙かに隔て来て、ことぞ名におふわたづみの、都と知れば水もなく、廣き眞砂に著きにけり。廣き眞砂に著きにけり。誑さても我鹽土男の翁が教に従ひ、わたづみの都に入りぬ。ことに瑠璃の瓦を敷ける衡門あり、門前に玉の井あり。此井の有様銀色耀き世の常ならず。又湯津の桂の木あり、木の下に立ち寄り、暫く事の由をも窺はどやと思ひ候。  
レテ、ツレ一壁誑「はかりなき、齡を延ぶる明暮の、長き月日の光かな。ツレ誑「いとむ業も手ずさみに、レテ、ツレ誑「掬ぶも清き水ならん。レテ、ツレ誑「濁りなき心の水の泉まで、老いせぬ齡を汲みて知る、レテ、ツレ誑「藥の水の故なれや、老いせぬ門に出で入るや。月日雲らぬ久堅の、天にもますや此國の行末遠き住居かな。下歌くり返す、玉の釣瓶の掛繩の、上歌長き命を汲

みて知る、長き命を汲みて知る、心の底も曇りなき、月の桂の光添ふ、枝を連ねて諸共に、朝夕なる玉の井の、深き契は頼もしや。深き契は頼もしや。  
ワヤ誑「われ玉の井の邊にたよすむ處に、其様けたかき女性一人來り、玉の釣瓶を持ち水を汲む氣色見えたり。言葉をかけんも如何なれば、是なる桂の木陰に立ちより、身を隠しつよたよすみたり。レテ誑「人ありとだに白露の、玉の釣瓶を沈めんと、玉の井に立ち寄り底を見れば、桂の木陰に人見えたり。誑是は如何なる人やらん。ワヤ誑「忍ぶ姿も顯れて、あさまになりぬさりながら、なべてならざる御姿、如何なる人にてましますぞ。レテ誑「あら恥かしや我姿の、見えける事も我ながら、忘るよ程の御氣色、形も殊にみやびやかなり。唯人ならず見奉る。御名を名乗りおはしませ。ワヤ誑「今は何をか包むべき。我は天孫地神四代、火々出見尊とは我が事なり。ツレ誑「あら有難や天の御神の、御孫の尊を目のあたり、見奉るぞ不思議なる。レテ誑「いやさればこそ始より、天孫の光隠れなし。さて是までの臨幸は、そも何事の故やらん。ワヤ誑「實に御不審は御理。われ釣針を魚に取ら

大幣の—伊勢物語の歌に—大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ—

高垣—周囲の高大なる垣  
垣垣—高垣の上にある短少なる垣

れ、遙々是まで尋ね来る、こよをば何處と申すやらん。謡委しく語り給ふべし。レテ調「知ろしめさぬは御理。是は龍宮謡わたづみの宮。ワキ謡「かく言の葉をかはし給ふ、二人の御名は、レテ謡「豊玉姫、ツレ謡「我は妹の玉依姫、地謡「互に連枝の名乗して、つよましながら御神の、みやびやかなるに、早打ち解けて木綿四手の、神にぞ靡く大幣の、引く手あまたの心かな。引く手あまたの心かな。レテ調「如何に申し上げ候。うちつけなる御事なれども、やがて父母に逢はせ奉り、彼釣針をも尋ぬべし、御心安く思召され候へ。ワキ調「さらばやがて伴なひ申し、宮中へ参り候べし。クリ地謡「かたじけなくも天の御神の御孫、わたづみの都にいたり給ふ事、有難かりける御影かな。レテサシ謡「然れば高垣姫垣調ほり、地謡「高殿や照りかよやき、雲の八重疊を敷き、尊を請じ入れ奉り、レテ謡「父母の神いつきかしづき、地謡「臨幸の意趣を語り給ふ。クわれ兄の釣針を、かりそめながら波間行く、魚に取られて無き由を、敷き給へど其針に、あらずは取らじととにかくに、せうとを痛めさまぐに、猛き心の如何ならんと、語

潮満潮干の二つの玉—は潮を満たしめ—は干しむる如意珠なり  
たごならぬ姿—懐妊のこと

り給へば父の神、御心安く思召せ。まづ釣針を尋ねつよ、御國に歸し申すべし。シテ謡「猶兄の怒りあらば、地謡「潮満潮干の二つの玉を、尊に奉りなば御心に、任せて國も久堅の、天より降る御神の、外祖となりて豊姫も、たごならぬ姿有明の、月日程なく、三年を送り給へり。ワキ調「かくて三年になりぬれば、我國に歸り上るべし。海路の案内如何ならん。レテ調「御心安く思召せ。謡「綿津見の宮主伴なひて、海中の乗物さまぐあり。地謡「大鰐に乘じ疾風を吹かせ、陸地に送りつけ申さん、其程は待たせおはしませ。(中入) 天女ツレ二人謡「光散る、潮満玉のおのづから、くもらぬ御影仰ぐなり。地謡「各玉を捧けつよ、各玉を捧けつよ、豊姫玉依二人の姫宮、金銀盃裏に玉を供へ、尊に捧け奉り、彼釣針を待ち給ふ、綿津見の宮主持参せよ。後シテ謡「まうとの君の命に随ひ、綿津見の宮主釣針を尋ねて、天孫の御前に奉る。地謡「潮満潮干二つの玉を、潮満潮干二つの玉を、釣針に取り添へ捧け申し、舞樂を奏し

豊姫玉依、袖をかへして舞ひ給ふ。

鹿背杖一石突の  
二股にたれる杖

地謡「いづれも妙なる舞の袖、いづれも妙なる舞の袖、玉のかんざし桂の黛、月も照り添ふ花の姿、雪を廻らす袂かな。シテ舞「わたづみの宮主、(舞)地謡「わたづみ宮主姿は老龍の雲に蟠り、鹿背杖にすがり、左右に返す袂も花やかに、足踏はとうくと、拍子を揃へて時移れば、尊は御座を立ち給ひ、歸り給へば袂にすがり、わたづみの乗物を奉らんと、五丈の鰐に乗せ奉り、二人の姫に玉を持たせ、龍王立ち來る波を拂ひ、潮を蹴立て、遙に送りつけ奉り、遙に送りつけ奉りて、又龍宮にぞ歸りける。

景清

梗 悪七兵衛景清は上總介忠清の三男なり。平家滅亡の後、幾度か復讐をはかりて成らず。盲目乞食のあさましき姿となりて日向に在り。一女人丸遙々と關東より下向して、父を訪ふ。景清は態と會はず。後對面して、八島合戦の鏝引の物語をなす。(四番目)

シテ 景清 ツレ 姫(人丸) トモ 従者  
ワキ 里人

龜が江が谷一筋  
谷と山内との間

ツレ次第「消えぬ便も風なれば、消えぬ便も風なれば、露の身いかになりぬらん。ツレ舞「是は鎌倉龜が江が谷に、人丸と申す女にて候。さても我が父悪七兵衛景清は、平家の身方たるにより、源氏に憎まれ、日向の國宮崎とかやに流されて、年月を送り給ふなる。いまだ習はぬ道すがら、物憂き事も旅の習ひ、又父ゆると心強く、ツレ舞「思ひ寝の涙かたし

遠江一問ふを掛  
八橋一杜若に名  
あり

松門一柴の戸な  
ど云ふが如し  
みづから清光を  
見ざれば一宵目  
なればなり  
靨骨と衰へ一骨  
立ち瘦せさらば  
ふ事

秋きぬと古今  
集の歌下句風の  
音にぞ驚かれぬ

く、草の枕露を添へて、いと滋き袂かな。上歌相摸國を立ち出でて、相摸國を立ち出でて、誰にゆくへを遠江、けに遠き江に旅舟の、三河にわたす八橋の、雲居の都いつかさて、假寢の夢に馴れて見ん。假寢の夢に馴れて見ん。トモ訓「やうく御急ぎ候程に、是は早日向の國宮崎とかやに御著きにて候、これにて父御の御行方を御尋ねあらうするにて候。  
レテ訓「松門獨り閉ちて年月を送り、みづから清光を見ざれば、時の移るをも辨へず。暗々たる庵室に徒に眠り、衣寒暖に與へざれば、膚は髑骨と衰へたり。上歌地謡」とても世を、背くとならば墨にこそ、背くとならば墨にこそ、染むべき袖のあさましや、寒れ果てたる有様を、我だに憂しと思ふ身を、誰こそありて憐みの、憂きを訪ふよしもなし。憂きを訪ふよしもなし。  
ツレ訓「ふしぎやな是なる草の庵古りて、誰住むべくも見えざるに、聲珍らかに聞ゆるは、もし乞食のありかかと、軒端も遠くみえたるぞや。レテ訓「秋きぬと目にはさやかに見えねども、風の音信いづちとも、ツレ訓「知らぬ迷ひのはかなさを、しばし休らふ宿もなし。

只一空一切諸  
法皆自性無し事  
竟皆空なりといふ

親の絆一恩愛の  
情をいふ

レテ訓「けに三界は所なし只一空のみ。誰とかさして事問はん。又いづちとか答ふべき。トモ訓「いかに此薬屋の内へ物問はう。レテ訓「そも如何なるものぞ。トモ訓「流され人の行方や知りてある。レテ訓「流され人にとりても、名字をば何と申し候ぞ。トモ訓「平家の侍悪七兵衛景清と申し候。レテ訓「けにさやうの人をば承り及びては候へども、本より盲目なれば見る事なし。諸さもあさましき御有様承り、そごろに哀を催すなり。委しき事をばよそにて御尋ね候へ。トモ訓「さては此あたりにては御座なけに候。是より奥へ御出であつて尋ね申され候へ。  
レテ訓「ふしぎやな只今の者をいかなる者ぞと存じて候へば、この盲目なるものの子にて候はいかに。我一年尾張の國熱田にて遊女と相馴れ一人の子を設く、女子なれば何の用に立つべきぞと思ひ、鎌倉龜が江が谷の長に預けおきしが、黒馴れぬ親子を悲しみ、父に向つて言葉をかはす。上歌地謡「聲をば聞けど面影を、見ぬ盲目ぞ悲しき。名のらで過ぎし心こそ、なか／＼親の絆なれ。なか／＼親の絆なれ。

トモ訓「いかに此あたりに里人のわたり候か。ワキ訓「里人とは何の御用にて候ぞ。トモ訓「流され人の行方や御存じ候。ワキ訓「流され人にとりても、いかやうなる人を御尋ね候ぞ。トモ訓「平家の侍、悪七兵衛景清を尋ね申し候。ワキ訓「只今こなたへ御出で候ふ山陰に、薬屋の候に人は候はざりけるか。トモ訓「其薬屋には盲目なる乞食こそ候ひつれ。ワキ訓「なうその盲目なる乞食こそ、御尋ね候景清候よ。あらふしぎや、景清のことを申して候へば、あれにまします御事の、御愁傷のけしき見え給ひて候は、何と申したる御事にて候ぞ。トモ訓「御不審尤にて候、何をか包み申し候べき、是は景清の息女にてわたり候が、今一度父御に御對面ありたきよし仰せられ候ひて、是まではるく御下向にて候。とてもの事に然るべきやうに仰せられて候ひて、景清に引き合せ申されてたまはり候へ。ワキ訓「言語道斷。さては景清の御息女にて御座候か。まづ御心を靜めて聞し召され候へ。景清は兩眼盲ひまし／＼て、せん方なさに髪をおろし、日向の勾當と名を附き給ひ、命をば旅人をたのみ、我ら如き者の憐みをもつて身命を御つぎ候が、昔に引きかへたる御

あだし身一假の  
向ひたる名一日  
向の勾當といふ  
者

山は松風すは雪  
上云々一宵目な  
れど人の思はく  
は一言にて了解  
す松風吹くとい  
へば雪と心得波  
の寄するを聞き  
て満潮を知ると  
なり

有様を恥ぢ申されて、御名のりなきと推量申して候。某只今御供申し、景清と呼び申すべし、我名ならば答ふべし。其時御對面あつて、昔今の御物語候へこなたへわたり候へ。なうく景清の渡り候か。悪七兵衛景清の渡り候か。ワキ訓「かしまし／＼さなきだに、故郷の者として尋ねしを、此仕儀なれば身を恥ぢて、名のらで歸す悲しさ、誦千行の悲涙袂を朽たし、萬事は皆夢の内にあだし身なりと打ち覺めて、今は此世に亡きものと、思ひ切つたる乞食を、悪七兵衛景清などと、呼ばよ此方が答ふべきか。誦其上我名は此國の、上歌地謡日向とは日に向ふ、日向とは日に向ふ、向ひたる名をば呼びたまはで、力なく捨てし梓弓、昔に歸る己が名の悪心は起さじと思へども、又腹立ちや。ワキ訓「所に住みながら、所に住みながら、地謡御扶持ある方々に、憎まれ申す者ならば、ひとへに盲の、杖を失ふに似たるべし。片輪なる身の癖として、腹あしく由なき言事、只ゆるしおはしませ。ワキ訓「目こそ聞けれど、地謡「目こそ聞けれども、人の思はく、一言の内を知る者を、山は松風、すは雪よ、見ぬ花のさむる夢の惜しさよ。さて又浦は荒磯に、よする

波も聞ゆるは、夕汐もさすやらん。さすがに我も平家なり、物語始めて、御慰みを申さん。

シテ調「いかに申し候。只今はちと心にかよる事の候ひて、短慮を申して候御免あらうするにて候。ワキ調「いや〜いつもの事にて候程に苦しからず候。又我等より以前に、景清を尋ね申したる人はなく候か。シテ調「いや〜御尋ねより外に尋ねたる人はなく候。ワキ調「あら偽を仰せ候や。正しう景清の御息女と仰せられ候ひて御尋ね候ひし物を、何とて御包み候ぞ。あまりに御痛はしきには是まで御供申して候。急いで父御に御對面候へ。ワキ調「なう自こそ是まで参りて候へ。諸恨めしやはるくの道すがら、雨風露霜を凌ぎて参りたる志も、いたづらになる怨めしや。さては親の御慈悲も、子によりけるかや情なや。シテ調「今までは包み隠すと思ひしに、顯れけるか露の身の、置き所なや恥かしや。御身は花の姿にて、親子と名のり給ふならば、殊に我が名も顯るべしと、思ひ切りつと過すなり。我を恨みと思ふなよ。地調「あはれけに古は、疎き人をも訪へかして、怨み護る

所狭く船中なれば窮屈なるを  
取楫一船の左の  
麒麟も老いぬれば  
名馬も老いては  
役立たずとなり

其報に、正しき子にだにも、訪はれじとおもふ悲しさよ。上歌一門の船の内、一門の船の内に、肩を並べ膝を組み、所狭くすむ月の、景清は誰よりも、御座船になくて適ふまじ、一類その以下、武略さまざまに多けれど、名を取楫の船に乗せ、主従隔てなかりしは、さも羨まれたりし身の、麒麟も老いぬれば、驚馬に劣るが如くなり。ワキ調「あら痛はしや先かう渡り候へ。いかに景清に申し候。御娘御の御所望の候。シテ調「何事にて候ぞ。ワキ調「屋島にて景清の御高名の様が聞き召されたき由仰せられ候。そと御物語あつて聞かせ申させ候へ。シテ調「是は何とやらん似合はぬ所望にて候へども、是まではるばる來りたる志あまりに不便に候程に、語つて聞かせまうし候べし。此物語過ぎ候はば、かの者をやがて故郷へ歸して給はり候へ。ワキ調「心得申し候。御物語すぎ候はど、やがて歸し申さうするにて候。

シテ調「いで其頃は壽永三年三月下旬の事なりしに、平家は船源氏は陸、兩陣を海岸に張つて、たがひに勝負を決せんと欲す。諸能登守教經宣ふやう、去年播磨の室山、備中の水



利無かつし事  
利無かりし事  
いみじき勝れた  
ること

物々し事々し  
さもうしや  
もしやを延べて  
いよ

島鴨越に至るまで、一度も身方の利無かつし事、ひとへに義経が謀いみじきに依つてなり。いかにもして九郎を討たん、謀こそ有らまほしけれと宣へば、景清心に思ふやう、判官なればとて鬼神にてもあらばこそ、命を捨てば易かりなんと思ひ、教經に期このの暇乞ひ、陸にあがれば源氏の兵、誦餘すまじとて駈け向ふ。上歌地誦景清是を見て、景清是を見て、物々しやと夕日影に、打物ひらめかいて、斬つてかよればこらへずして、刃向いたる兵は、四方へばつとぞ逃けにける。通さじと、誦誦さもうしや方々よ、地誦さもうしや方々よ、源平互に見る目も恥かし。一人を留めん事は案の打物、小脇にかいこんで、なにがしは平家の侍、悪七兵衛景清と、名のりかけ、名のりかけ、手取にせんとて追うて行く。三保谷が著たりける、兜の鍔を、取りはづし取りはづし、二三度逃けのびたれども、思ふ敵なれば通さじと、飛びかより兜をおつとり、えいやと引くほどに、鍔は切れて此方に留れば、主は先へ逃けのびぬ。遙に隔てよ立ちかへり、さるにても汝おそろしや、腕の強きと言ひければ、景清は三保谷が、頸の骨こそ強ければ、笑

ひて左右へのきにける。むかし忘れぬ物がたり。衰へ果てて心さへ、亂れけるぞや恥かしや。此世はととも幾程の、命のつらさ末近し、はや立ち歸り止き跡を、弔ひ給へ盲目の、聞き所の燈、あしき道橋と頼むべし。さらばよ留る行くぞとの、只一聲を聞き残す、これぞ親子の形見なる。これぞ親子の形見なる。

杜若

梗 伊勢物語に業平東下りのをりから三河の八橋にて杜若をながめ唐衣きつくなれにし妻しあればるるきぬる旅をしぞ思ふと、かきつげたの五文字を折句にして歌を詠じ、都を懐ふ情を寄せ一行旅愁を催したる故事あり。此曲は之に據りて杜若の精を出し、旅僧の回向を受けしむ。末段伊勢物語の歌文を交へて、業平の閑雅なる風采を躍如たらしめたり。(三番目)

シテ 杜若の精 ワキ 旅僧

洛陽一京都  
ワキ詞「是は諸國一見の僧にて候。我此間は都に候ひて、洛陽の名所舊路残りなく一見仕りて候。又是より東國行脚と志し候。道行諸夕べくの假枕、夕べくの假枕、宿はあまたに變れども、同じ憂き寢の美濃尾張、三河國に著きにけり。三河國に著きにけり。急ぎ候間、程なう三河國に著きて候。又これなる澤邊に杜若の今を盛と見えて候。立ちより眺めばやと思ひ候。誦ゆにや光陰とどまらず、春過ぎ夏も來て、草木心無しとは

かはよ花一かは花ともいふ杜若の異名

心々の旅人此杜若の特記名高きに僧の心附かねばなり  
御銚手一流れの歌多に分れたること

申せども、時を忘れぬ花の色、かはよ花とも申すやらん、あら美しの杜若やな。

シテ詞「なうく御僧、何しに此澤には休らひ給ひ候ぞ。ワキ詞「是は諸國一見の者にて候が、杜若おもしろさに眺め居て候。さてことをばいづくと申し候ぞ。シテ詞「是こそ三河國八橋とて、杜若の名所にて候へ。さすがにこの杜若は、名におふ花の名どころなれば、諸色も一しほ濃紫の、なべての花のゆかりとも、思ひなぞらへ給はずして、取りわき眺め給へかし。あら心なの旅人やな。ワキ詞「けにく三河國八橋の杜若は、古歌にもよまれけるとなり、何れの歌人の言の葉やらん承りたくこそ候へ。シテ詞「伊勢物語にいはいく、ことを八橋といひけるは、水行く河の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるなり。其澤に杜若のいと面白く咲き亂れたるを、ある人かきつげたと云ふ五文字を句の上に置きて、旅の心を詠めと言ひければ、誦唐衣著つよなれにし妻しあれば、誦はるるく來ぬる旅をしぞ思ふ。これ在原業平の、此杜若を詠みし歌なり。ワキ詞「あら面白やさては此、東のはての國々までも、業平は下り給ひけるか。シテ詞「事新しき問事かな。此八橋のこよのみか、猶

昔に業平一昔  
なると言掛く

御珠手に物ぞ思  
はるゝ一色々に  
物思するとなり  
續古今集の歌に  
「戀せよとされ  
る三河の八橋の  
くもてに物を思  
ふ頃かな  
透額一十六歳未  
滿の人の著る冠  
額に透じ穴あり  
高子の后一清和  
天皇の皇后二條  
后といふ  
豊の明一毎年十  
一月中の辰の日  
に行はるゝ公事  
五節一豊明節會  
の折舞の舞あり  
五節といふ

しも心の奥深き、謡名所々々の道すがら、ワヤ謡「國々ところは多けれども、取りわき心の末かけて、レテ謡「思ひ渡りし八橋の、ワヤ謡「三河の澤の杜若、レテ謡「はるるくきぬる旅をしぞ、ワヤ謡「思ひの色を世に残して、レテ謡「主は昔に業平なれども、ワヤ謡「かたみの花は、レテ謡「今こよに、上歌地謡「在原の、跡な隔てそ杜若、跡な隔てそ杜若、澤邊の水の淺からす、契りし人も八橋の、蜘蛛手に物ぞ思はるよ。今とても旅人に、昔を語る今日の暮、やがて馴れぬる心かな。やがて馴れぬる心かな。

レテ謡「いかに申すべき事の候。ワヤ謡「何事にて候ぞ。レテ謡「見苦しく候へども、わらはが庵にて一夜を御明かし候へ。ワヤ謡「あら嬉しや。やがて参り候べし。レテ謡「なうく、此冠唐衣御覽候へ。ワヤ謡「不思議やな賤しき賤の臥處より、色もかよやく衣を著、透額の冠を著し、これ見よと承る、こはそも何如なる事にて候ぞ。レテ謡「是こそ此歌に詠まれたる唐衣、高子の後の御衣にて候へ。又此冠は業平の、豊の明の五節の舞の冠なれば、かたみの冠唐衣、身に添へ持ちて候なり。ワヤ謡「冠唐衣は先々置きぬ。さてく、御身は如何なる人ぞ。レテ謡「眞は我は杜若の精なり。植ゑおきし昔の宿の杜若と、よみしも女の杜若に、なりし謂の言葉なり。又業平は極樂の、歌舞菩薩の化現なれば、詠み置く和歌の言の葉までも、皆法身説法の妙文なれば、草木までも露の恵の、謡佛果の縁を弔ふなり。ワヤ謡「是は末世の奇特かな。正しき非情の草木に、言葉をかす法の聲、レテ謡「佛事をなすや業平の、昔男の舞の姿、ワヤ謡「是ぞ即ち歌舞の菩薩の、レテ謡「假に衆生と業平の、ワヤ謡「本地寂光の都を出でて、レテ謡「普く濟度、ワヤ謡「利生の、レテ謡「道に、地謡「はるるく來ぬる唐ころも、はるるく來ぬる唐ころも、著つとや舞を奏づらん。レテ謡「別れこし、跡の恨みの唐衣、地謡「袖の都に返さばや。

植ゑおきし云々  
一後撰集に「い  
ひぞめし昔の宿  
の杜若いるばか  
りこそ形見なり  
けれ

昔男初冠して  
伊勢物語に據る

レテ謡「そもく、此物語は、如何なる人の何事によつて、地謡「思ひの露の信夫山、忍びて通ふ道芝の、始めもなく終りもなし。レテ謡「昔男初冠して奈良の京、春日の里に知るよしして狩にいにけり。地謡「仁明天皇の御宇かとよ、いともかしこき勅を受けて、大内山の春霞、立つや彌生の初めつた、春日の祭の勅使として、透額の冠を許さる。レテ謡「君

住所求むとて一  
葉下りのこと

飛ぶ雲の雲の上  
まで一伊勢物語  
の歌末句雁に告  
げこそ  
陰陽の神一男女  
の中を司る神

の恵の深き故、地通殿上にての元服の事、當時其例稀なる故に、初冠とは申すとかや。  
クセ然れども世の中の、一度は榮え、一度は、衰ふる理の眞なりける身のゆくへ、住所  
求むとて、東の方に行く雲の、伊勢や尾張の海面に、立つ波を見て、いとどしく、過ぎ  
にし方の戀しきに、羨ましくもかへる浪かなと、うち詠めゆけば信濃なる、淺間の嶽な  
れや、くゆる煙の夕氣色、シテ通「さてこそ信濃なる、淺間の嶽に立つ煙、地通「遠近人の、  
見やはとがめぬと口ずさみ、猶はるるの旅衣、三河の國に著きしかば、こよぞ名にあ  
る八橋の、澤邊に匂ふ杜若、花紫のゆかりなれば、妻しあるやと、思ひぞ出づる都人  
然るに此物語、其品多き事ながら、とりわき此八橋、三河の水の底ひなく、契りし人  
人のかすく、に、名をかへ品をかへて、人待つ女病み、玉すだれの、光も亂れて飛ぶ  
螢の、雲の上まで往ぬべくは、秋風吹くと假にあらはれ、衆生濟度の我ぞとは、知るや  
否や世の人の、シテ通「暗きに行かぬ有明の、地通「光普き月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、  
我身ひとつはもとの身にして、本覺眞如の身を分け、陰陽の神といはれしも、只業平の

花前に蝶舞よ一  
熊野に注す

首飾の籠一五月  
五日菖蒲を冠に  
挿すこと

事ぞかし。かやうに申す物語、疑はせ給ふな旅人、遙々來ぬる唐衣、著つよや舞をかな  
づらん。  
シテ通「花前に蝶まふ紛紛たる雪、地通「柳上に鶯飛ぶ片片たる金、(序ノ舞)シテ通「植る置きし、  
昔の宿のかきつばた、地通「色ばかりこそ昔なりけれ、色ばかりこそ昔なりけれ、色はか  
りこそ。シテ通「昔男の名を留めて、花橋の匂ひうつる、菖蒲の鬢の、地通「色はいづれ、  
似たりや似たり、杜若花菖蒲、梢に鳴くは、シテ通「蟬の唐衣の、地通「袖白妙の卵の花の雪  
の、夜も白々と明るる東雲の、淺紫の杜若の、花も悟りの心開けて、すはや今こそ草  
木國土、すはや今こそ草木國土、悉皆成佛の、御法を得てこそ失せにけれ。

二人静

梗 静御前の亡魂、菜摘の女に憑きて昔語をなし、後又亡魂も形を現し、二女共に合舞をなす。地を吉野に取れるは、義経に縁故あればなり。(髪物)

シテ 静御前 ツレ 菜摘女 ワキ 勝手神職

勝手一勝手大明神は愛宕神を祀る

菜摘川一夏笠川とも書く吉野川の上流

見渡せば一拾遺集の歌末句等に「深山には一古今集の歌末句若菜摘みけり」木の芽春雨一木の芽張るを春に言掛く

「是は三吉野勝手の御前に仕へ申す者にて候。扱も當社におき御神事さまへ御座候中にも、正月七日は菜摘川より若菜を摘ませ神前に備へ申し候。今日に相當りて候程に、女どもに申付け、菜摘川へ遣はさばやと存じ候。疾うく女どもに菜摘川へ出でよと申し候へ。」

ツレ「見渡せば、松の葉白き吉野山、幾世つもりし雪ならん。ツレ深山には松の雪だに消えなくに、都は野邊の若菜摘む、頃にも今やなりぬらん、思ひやるこそゆかしけれ。上歌木の芽春雨降るとても、木の芽春雨降るとても、猶消え難き此野邊の、雪の下なる若菜を

ば、今幾日有りて摘まよし。春立つと、云ふばかりにや三吉野の、山も霞みて白雪の、消えし跡こそ道となれ、消えし跡こそ道となれ。

今幾日有りて一古今集に「春日野の飛火の野守出でてみよ今幾日ありて若菜摘みてん」春立つと一拾遺集の歌下句山も霞みてけさはみゆらん

ツレ「なうくあれなる人に申すべき事の候。ツレ如何なる人にて候ぞ。ツレ三吉野へ御歸り候は言傳て申し候はん。ツレ何事にて候ぞ。ツレ三吉野にては社家の人、其外の人々にも言傳て申し候。あまりにわらはが罪業の程悲しく候へば、一日經書いて我が跡弔ひてたび給へと、よくく仰せ候へ。ツレ「あら恐ろしの事を仰せ候や。言傳をば申すべし。さりながら御名をば誰と申すべきぞ。ツレ「まづく此由仰せ候ひて、もしも疑ふ人あらば、其時わらはおことに憑きて、委しく名をば名乗るべし。誰かまへてよくよく届け給へと、下歌地謡「夕風迷ふあだ雲の、憂き水莖の筆の跡、かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。(中入)

ツレ「かよる恐ろしき事こそ候はね、急ぎ歸り此由を申さばやと思ひ候。如何に申し候。只今歸りて候。ツレ「何とて遅く歸りたるぞ。ツレ「不思議なる事の候ひて、遅く歸りて

なに真しからずとやこれよりシテの位なる舞が過ぎたる體なり  
花をも雲と古今集の序に吉野山の櫻は人九が心には雲かとのみなん覺えける櫻は花に顯る頼政の歌に深山木の其梢とも見えざりし櫻は花に顯れにけり

心靜に又靜に思さんに靜御前の名を含む

候。ワヤ詞「さていかやうなる事ぞ。ツレ詞「菜摘川の邊にて、何くともなく女の來り候ひて、あまりに罪業の程悲しく候へば、一日經書いて跡弔ひて賜はれと、三吉野の人、取り分け社家の人々に申せとは候ひつれども、真しからず候程に申さじとは思へども。なに真しからずとや、うたてやなさしも頼みしかひもなく、真しからずとや。唯よそにてこそ三吉野の、花をも雲と思ふべけれ、近く來ぬれば雲と見し、諸櫻は花に顯はるよ物を、あら恨めしの疑ひやな。

ワヤ詞「言語道斷、不思議なる事の候物かな。狂氣して候は如何に。さて如何やうなる人の憑き添ひたるぞ名を名乗り給へ。跡をば、懇に弔ひて參らせ候べし。ツレ詞「何をか包み參らせ候ふべき、判官殿に仕へ申せし者なり。ワヤ詞「判官殿の御内の人はず多き中にも、殊に衣河の御最期まで御供申したりし十郎權頭、ツレ詞「兼房は判官殿の御死骸、心靜かに取納め、腹切り焔に飛んで入り、殊にあはれなりし忠の者。されどもそれにはなきものを、誠は我は女なりしが、此山までは御供申し、こよにて捨てられ參らせて、絶えぬ思ひの涙

精好一組の種類水干—上に着る結東

川淀近き—萬葉集の歌に「吉野なる夏光の川の川淀に鴨やなくなる山陰にし

の袖、地謡「つよまししながら我が名をば、靜に申さん恥かしや。

ワヤ詞「さては靜御前にてましますかや、靜にて渡り候はど、隠れなき舞の上手にて有りしかば、舞をまうて御見せ候へ。跡をば、懇に弔ひ申し候べし。ツレ詞「我が著し舞の裝束をば、勝手の御前に納めしなり。ワヤ詞「さて舞の衣裳は何色ぞ。ツレ詞「袴は精好、ワヤ詞「水干は、ツレ詞「世を秋の野の花盡し。ワヤ詞「是は不思議の事なりとて、寶藏を開き見れば、けにけに疑ふ所もなく、舞の衣裳の候。是を召されて疾く御舞ひ候へ。靜御前の舞を御舞ひ有るぞ。皆々寄りて御覽候へ。ツレ詞「實に恥かしや我ながら、昔忘れぬ心とて、ワヤ詞「さもなつかしく思出の、ツレ詞「時も來にけり、ワヤ詞「靜の舞、ツレ詞「今三吉野の河の名の、後ツレ詞「菜摘の女と思ふなよ。地謡「川淀近き山陰の、香もなつかしき袂かな。ツレ詞「さても義經兇徒に準せられ、既に討手向ふと聞えしかば、小船に取り乗り、渡邊神崎より押し渡らんとせしに、海路心に任せず難風吹いて、もとの地に著きし事、天命かと思へば科なかりしも、地謡「科有りけるかと、身を怨むるばかりなり。ツレ詞「さる程

清見原の天皇云  
云一壬申の風の  
こと

唐土の佐國一  
撰朝歌集に大江  
佐國の花を愛す  
る詩あり唐土の  
とあるは野し  
遊子残月に行き  
しも一宵の孟嘗  
君が函谷關を越  
えし故事  
今身の上は白雪  
の一身の上は知  
らるる意を含む  
踏花同惜少年  
春一白樂天の詩  
句

に 次第々々に道せばき、御身となりて此山に、分け入り給ふ頃は春、所は三吉野の、花  
に宿かる下臥も、長閑ならざる夜嵐に、寝もせぬ夢と花も散り、まことに一榮一落、ま  
のあたりなる浮世とて、又此山を落ちて行く。レテッレテッ 昔清見原の天皇、地謡「大友皇子に  
襲はれて、彼山に踏み迷ひ、雪の木陰を、頼み給ひける櫻木の宮、神の宮瀧西河の瀧、我  
こそ落ち行け、落ちても波はかへるなり。さるにても三吉野の、頼む木陰の花の雪、雨  
もたまらぬ奥山の、音さわがしき春の夜の、月は朧にて、猶足引の山深み、分け迷ひ行  
く有様は、レテッレテッ 唐土の、佐國は花に身を捨てよ、地謡「遊子残月に行きしも、今身の上  
に白雪の、花を踏んでは、同じく惜しむ少年の、春の夜も静かならで、騒がしき三吉野  
の、山風に散る花までも、追手の聲やらんと、跡をのみみよし野の、奥深く急ぐ山路か  
な。地謡「そののみならず憂かりしは、頼朝に召し出だされ、静は舞の上手なり、とくく  
と有りしかば、心も解けぬ舞の袖、返すくも恨めしく、昔戀しき時の和歌、レテッレテッ 賤  
や賤（序ノ舞）レテッレテッ 賤や賤、賤の苧環繰返し、地謡「昔を今になすよしもがな。レテッレテッ 思ひ

衣川一義經の討  
死せし所

かへせばいにしへも、地謡「思ひかへせばいにしへも、戀しくもなし憂き事の、今も恨み  
の衣川、身こそは沈め名をば沈めぬ、レテッレテッ 武士の、地謡「物毎に浮世の習ひなればと  
思ふばかりぞ山櫻、雪に吹きなす花の松風、静が跡を弔ひ給へ。静が跡を弔ひ給へ。

# 安達原

梗概

旅僧行脚の砌、奥州安達が原の黒塚なる鬼女の家に泊り合  
せ、女の禁を犯して閨の内を覗ひしかば、女怒りて鬼形を顯  
し、逐ひ來りしを、法力を以て調伏する事を作る。前牛女の  
悲しき述懐あり。後半一轉して物凄き光景を演出す。も  
と拾遺集の「陸奥の安達が原の黒塚に鬼籠れりとさくは誠  
か」の歌を以て根本資料とせり。(五番目)

シテ 鬼女(前は廻) ワキ 東光坊祐慶  
ツレ 同行山伏

那智の東光坊  
熊野の内  
阿闍梨師匠の  
義この格式の我  
國に置かれしは  
清和若しくは文  
徳の朝といふ  
捨身抖擻出家  
のこと  
鹽崎の浪一紀伊  
牟婁郡  
結の濱一同

ワキ三人 旅の衣は篠懸の、露けき袖やしをららん。ワキ、サシ語 是は那智  
の東光坊の阿闍梨、祐慶とは我事なり。ワキ、ツレ等 夫れ捨身抖擻の行體は、  
山伏修行の便  
なり。ワキ語 熊野の順禮廻國は、皆釋門の習ひなり。ツレ三人語 然るに祐慶此間、心に立  
つる願あつて、廻國行脚に赴かんと、上歌我が本山を立ち出でて、我が本山を立ち出で  
て、分行く末は紀の路瀉、鹽崎の浦をさし過ぎて、錦の濱のをりくは、なほしをりゆ

わび人住み煩  
へる人

く旅衣、日も重ねば程もなく、名にのみ聞きし陸奥の、安達が原に著きにけり。安達が  
原に著きにけり。ワキ詞 急ぎ候程に是ははや陸奥の安達が原に著きて候。あら笑止や日の  
暮れて候。此あたりには人里もなく候。あれに火の光の見え候程に、立ちより宿を借ら  
ばやと存じ候。  
シテ、サシ語 實にわび人のならひ程、悲しきものはよもあらじ。かよるうき世に秋の來て、朝  
けの風は身にしめども、胸を休むる事もなく、昨日も空しく暮れぬれば、まどろむ夜半  
ぞ命なる。あら定めなの生涯やな。  
ワキ詞 如何に此屋の内へ案内申し候。シテ詞 そも如何なる人ぞ。ワキ三人語 如何にや主聞き  
給へ。我等始めて陸奥の、安達が原に行き暮れて、宿を借るべき便もなし。願はくは我  
等を憐みて、一夜の宿をかし給へ。シテ語 人里遠きこの野邊の、松風はけしく吹きあれ  
て、月影たまらぬ閨の内には、いかでか留め申すべき。ワキ語 よしや旅寐の草枕、今宵は  
かりの假寐せん。たどく宿をかし給へ。シテ語 我だにも憂き此庵に、ワキ語 たど泊らん



せはしなき一袂  
きこと

梓梓輪一絲繰道  
具

眞緒の糸一願糸  
のこと薄を含め  
たり俊頼の歌に  
花薄まそほの糸  
をくりかけてな  
どあり  
昔を今に一繰返  
しとあるより繰  
けて歌詞を用ひ  
たり  
生身を助けてこ  
そ一生活の道を  
得てこそ

と柴の戸を、シテ謡「さすが思へば痛はしさに、上歌地謡」さらばとどまり給へとて、櫃を開き  
立ち出づる。異草も交じる茅筵、うたてや今宵敷きなまし。強ひても宿を狩衣、片敷く  
袖の露深き、草の庵のせはしなき、旅寐の床ぞ物憂き、旅寐の床ぞ物憂き。  
ワヤ謡「今宵の御宿かへすくも有り難うこそ候へ。又あれなる物は見馴れ申さぬ物にて  
候。是は何と申したる物にて候ぞ。シテ謡「さん候、是は梓梓輪とて、いやしき賤の女のい  
となむ業にて候。ワヤ謡「あらおもしろや、さらば夜もすがら營うで御見せ候へ。シテ謡「實  
に愧かしや旅人の、見る目も恥ぢずいつとなき、賤が業こそ物憂けれ。ワヤ謡「今宵とどま  
る此宿の、主の情深き夜の、シテ謡「月もさし入る、ワヤ謡「闇の内に、次第地謡「眞緒の糸を繰  
返し、眞緒の糸を繰返し、昔を今になさばや。シテ謡「賤が績麻の夜までも、地謡「世わたる  
業こそ物憂けれ。シテ謡「あさましや人界に生を受けながら、かよる憂き世に明け暮らし、  
身を苦しむる悲しさよ。ワヤ、サン謡「はかなの人の言の葉や。まづ生身を助けてこそ、佛身  
を願ふ便もあれ。地謡「かよる憂き世にながらへて、明暮ひまなき身なりとも、心だに誠

佛果一成佛  
地水火風一四大  
といふ佛説にて  
は之を人體の原  
質とす  
あだなる減一無  
常

扱ても一以下糸  
に關する故事引  
句を列ねたり  
五條あたり一源  
氏物語夕顔の故  
事  
賀茂の御生れ一  
四月中の四の日  
に行はるゝ葵祭

の道にかなひなば、祈らずとて終になど、佛果の縁とならざらん。タセ只是れ地水火  
風の、假にしばらくも纏はりて、生死に輪回し、五道六道にめぐる事、只一心の迷ひな  
り。凡そ人間の、あだなる事を案ずるに、人更に若き事なし、終には老となる物を、か  
ほどはかなき夢の世を、などや厭はざる我ながら、あだなる心こそ怨みてもかひなかり  
けれ。ロンギ扱そも五條あたりにて、夕顔の宿を尋ねしは、シテ謡「日蔭の糸の冠著し、そ  
れは名高き人やらん。地謡「加茂の御生れにかざりしは、シテ謡「糸毛の車とこそ聞け。地謡「糸  
櫻、色もさかりに咲く頃は、シテ謡「くる人多き春の暮、地謡「穂に出づる秋の糸薄、シテ謡「月  
に夜をや待ちぬらん。地謡「今はた賤が繰る糸の、シテ謡「長き命のつれなさを、地謡「長き命  
のつれなさを、思ひ明石の浦千鳥、音をのみひとりなき明かす、音をのみひとりなき明  
かす。

シテ謡「如何に客僧達に申し候。ワヤ謡「承り候。シテ謡「あまりに夜寒に候程に、上の山に上  
り木を取りて、焚火をしてあて申さうするにて候、暫く御待ち候へ。ワヤ謡「御志ありが

闇の内ばししはをばの意

膿血以下物硬き状を寫せり

あさまになされ一禁を犯して見願はされし意

たうこそ候へ。さらば待ち申さうするにて候。やがて御歸り候へ。レテ調「さらばやがて歸り候べし。や、如何に申し候、妾が歸らんまで此闇の内ばし御覽じ候な。ワヤ調「心得申し候。見申す事は有るまじく候。御心安く思召され候へ。レテ調「あらうれしや候。かまへて御覽じ候な。此方の客僧も御覽じ候な。ワヤ、ツレ調「心得申し候。(申入)

ワヤ調「ふしぎや主の闇の内を、物の隙よりよく見れば、膿血忽ち融滌し、臭穢は満ちて臆脹し、膚膩ことごとく爛壞せり。人の死骸は數しらす、軒と等しく積み置きたり。如何さま是は音に聞く、安達が原の黒塚に、籠れる鬼の住所なり。ツレ調「恐ろしやかよる憂き目をみちのくの、安達が原の黒塚に、鬼こもれりと詠じけん、歌の心もかくやらんと、上、歌、ツレ二人「心も惑ひ肝を消し、心も惑ひ肝を消し、行くべき方は知らねども、足に任せて逃けて行く。足に任せて逃けて行く。

後シテ調「如何にあれなる客僧、詞とまれとこそ。さしもかくし闇の内を、あさまになされ參らせし、恨申しに來りたり。調「胸を焦がす炎、咸陽宮の煙紛紛たり。地調「野風山嵐

東方に五大明王に祈る詞及び種々の咒文

吹き落ちて、レテ調「鳴神稻妻天地に満ちて、地調「空かき曇る雨の夜の、レテ調「鬼一口に食はんとて、地調「歩みよる足音、レテ調「振り上ぐる鐵杖の勢、地調「あたりを拂つて恐ろしや。ワヤ調「東方に降三世明王、ツレ調「南方に軍荼利夜叉明王、ワヤ調「西方に大威德明王、ツレ調「北方に金剛夜叉明王、ワヤ調「中央に大日大聖不動明王、二人調「唵呼嚩呼嚩旋荼利摩登根、唵阿毘羅吽欠娑婆呵、吽多羅吒干輪、地調「見我身者發菩提心、見我身者發菩提心、聞我名者斷惡修善、聽我說者得大智惠、知我身者即身成佛、即身成佛と、明王の繫縛にかけ、責めかけ、祈り伏せにけり。さて懲りよ。

レテ調「今まではさしも實に、地調「今まではさしも實に、怒りをなしつる鬼女なるが、忽ちに弱りはてと天地に身をつどめ、眼くらみて足もとは、よろしくとたよひめぐる、安達が原の黒塚に、隠れ住みしもあさまになりぬ。あさましや愧づかしの我姿やと、云ふ聲はなほ物冷ましく、云ふ聲はなほ冷ましく、夜嵐の音に、立ちまぎれ失せにけり。夜嵐の音に失せにけり。

内十

賀茂

梗概

賀茂明神の縁起を説き、神徳を謳歌せる神事能なり。丹塗矢の神話は釋日本紀所引山城風土記にあり。談曲拾葉抄所引秦氏本系帳亦参照すべし。(脇能)

シテ別雷神(前は里女)

シテツレ天女(前は里女)

ワキ神職

ワキツレ神職

賀茂の宮居一上賀茂には別雷神下賀茂には別雷神の御母玉依姫と丹塗矢とを祀る  
出陰の―社地の山を指す神山日影山などの名あり

ワキ次第「清き水上尋ねてや、清き水上尋ねてや、賀茂の宮居に参らん。ワキ抑是は播州室の明神に仕へ申す神職の者なり。さても都の賀茂と、當社室の明神とは御一體にて御座候へども、いまだ参詣申さず候程に、此度思立ち都の賀茂へと急ぎ候。道行誦播磨湯室の櫛の曙に、室の櫛の曙に、立つ旅衣色染むる、飾磨の徒路行く舟も、上る雲井や久堅の、月の都の山陰の、賀茂の宮居に著きにけり。賀茂の宮居に著きにけり。

乱下賀茂の地  
もちがほ一満足  
の意  
よるべの水一神  
社に備ふる水の  
水

白木綿一御幣

一 聲「御手洗や、清き心に澄む水の、賀茂の河原に出づるなり。ツレ直に頼まば人の世も、ツレ直に神ぞ糸の道ならん。ツレ直に半ゆく空水無月の影更て、秋程もなき御祓川、ツレ直に風も涼しき夕波に、心も澄める水桶の、もちがほならぬ身にしあれど、命の程は千早振、神に歩を運ぶ身の、宮居曇らぬ心かな。下歌頼む誓は此神によるべの水を汲まうよ。上歌御手洗の、聲も涼しき夏陰や、聲も涼しき夏陰や、糺の杜の梢より、初音ふり行く時鳥、なほ過ぎがてに行きやらで、今一通り村雨の、雲もかけろふ夕づく日、夏なき水の河隈、汲ますとも陰は疎からじ、汲ますとも陰は疎からじ。ワヤ調如何に是なる水汲む女性に尋ね申すべき事の候。ツレ直は此あたりにては見馴れ申さぬ御事なり、何處よりの御参詣にて候ぞ。ワヤ實によく御覽じ候物かな。是は播州室の明神の神職の者にて候が、始めて當社に参りて候。先々是なる河邊を見れば、新しく壇を築き、白木綿に白羽の矢を立て、剩へ湯仰の氣色見えたり。こはそも何と申したる事にて候ぞ。ツレ直さては室の明神よりの御参詣にて候ぞや。また是なる御矢は、當社

あざしくしく一  
群かにの意  
秦氏女一玉依姫  
の事  
白羽の矢一丹塗  
矢こと

賀茂三所一祭神  
三柱なればなり

弓矢一文武の道

の御神體とも御神物とも、只此御矢の御事なり。詠あからさまなる御事なりとも、湯仰申させ給ひ候へ。ワヤ實に有難き御事かな。さてく當社の神祕に於て、さまざま有るべき其内に、分きて此矢の御謂、委しく語り給ふべし。ツレ直總じて神の御事を、あざあざしくは申さねども、あらく一義を顯すべし。むかし此賀茂の里に、秦氏女と云ひし人、朝な夕な此河邊に出でて水を汲み神に手向けけるに、ある時河上より白羽の矢一つ流れ来り、此水桶にとまりしを、取りて歸り庵の軒に挿す。主思はず懐胎し男子を生めり。此子三歳と申しし時、人々圍居して父はと問へば、此矢をさして向ひしに、此矢即ち鳴る雷となり、天に上り神となる。別雷の神是なり。ツレ直其母御子も神となりて、賀茂三所の神所とかや。ツレ直さやうに申せば憚りの、誠の神祕は愚なる、ツレ直身に辨へは如何にとも、いさ白眞弓彌猛の人の、治めん御代を告げ白羽の、八百萬代の末までも、弓筆に残す心なり。ワヤ實によく聞けば有難や。さてく其矢は上る代の、今末の代にあたらぬ矢までも、御神體なる謂は如何に、ツレ直實によく不審し給へども、

石川や瀬見の小  
河の清ければ月  
も流れを尋ねて  
ぞ渡わし新古今  
集鴨長明の歌石  
川や瀬見の小河  
は鴨川のこと

水も無く見えし  
大井河―後拾遺  
集―水も無く見  
えこそ渡れ大井  
川峯の紅葉は雨  
とふれども―  
清瀬川新古今集  
西行の歌に―ふ  
りつみし高嶺の  
みゆきとけにけ  
り清瀬川の水の  
白波―  
老いちろく―老い  
の事

隔てはあらじ何事も、ワヤ謡「心からにて澄むも濁るも、シテ謡「同じ流れのさまなく」に、  
ワヤ謡「鴨の河瀬も變はる名の、シテ謡「下は白河、ワヤ謡「上は鴨河、シテ謡「又其内にも、ワヤ謡「變  
はる名の、上歌地謡「石川や、瀬見の小河の清ければ、瀬見の小河の清ければ、月も流れを  
尋ねてぞ、澄むも濁るも同じ江の、浅からぬ心もて、何疑ひの有るべき。年の矢の、早  
くも過ぐる光陰、惜しみても歸らぬはもとの水、流れはよも盡きじ。絶えせぬぞ手向な  
りける。下歌いざくく水を汲まうよ、いざくく水を汲まうよ。

ロンギ地謡「汲むや心もいさぎよき、鴨の河瀬の水上は、如何なる所なるらん。シテ謡「何處と  
か、岩根松が根凌ぎ來る、瀧つ流は白玉の、音ある水や貴船川、地謡「水も無く見えし大井  
河、それは紅葉の雨と降る、シテ謡「嵐の底の戸無瀬なる、波も名にや流るらん。地謡「清  
瀧川の水汲まば、高嶺の深雪解けぬべき、シテ謡「朝日待ち居て汲まうよ。地謡「汲まぬ音羽  
の瀧浪は、シテ謡「受けて頭の雪とのみ、地謡「戴く桶も、シテ謡「身の上と、地謡「誰も知れ老  
いらくの、暮るとも同じ程なき、今日の日も夢の現ぞと、うつろふ影は有りながら、濁

わすぶの神―萬  
物育生の神、後  
世夫婦の縁を司  
る神の意とす

影向微妙の相好  
莊嚴―神體示現  
の姿美しく嚴か  
なること

りなくぞ水むすぶの神の慮汲まうよ、神の御慮汲まうよ。

ワヤ謡「實に有難き御事かな。かやうに委しく語り給ふ、御身は如何なる人やらん。シテ謡「誰  
とは今は愚なり。詠「汝知らずや神慮に趣き、迎へ給はど君を守りの、此神徳を告げ知ら  
しめんと、現れ出でて、地謡「恥かしや我が姿、恥かしや我が姿の、眞を現さばあさまし  
やな、あさまにやなりなん、よし名ばかりは白眞弓の、やごとなき神ぞかしと、木綿四  
手に立ち紛れて、神隠れになりにけりや。神隠れになりにけり (中人)  
天女謡「あら有難の折からやな、我此宮居に地を占めて、法界無縁の衆生をだに、一子と思  
し見そなはず 御祖の神徳仰ぐべしやな。曇らぬ御代を守るなり。地謡「守るべし守るべ  
しやなや、君の恵も今此時、天女謡「時至るなり時至る、地謡「感應あれば影向微妙の、相好  
莊嚴まのあたりに、有難や。上歌地謡「賀茂の山竝御手洗の影、賀茂の山竝御手洗の影、映  
り映ろふ緑の袖を、水に浸して涼みとる、涼みとる。裳裾をうるほす折からに、山河草  
木動揺して、まのあたりなる別雷の、神體來現し給へり。

風雨隨時一五  
十兩宜しきにか  
なふこと

後レテ謡「我は是れ、王城を守る君臣の道、別雷の神なり。地謡「或は諸天善神となつて、虚空に飛行し、レテ謡「又は國土を垂跡の方便、地謡「和光同塵結縁の姿、あら有難の御事やな。地謡「風雨隨時の御空の雲居、地謡「風雨隨時の御空の雲居、レテ謡「別雷の雲霧を穿ち、地謡「光稻妻の稲葉の露にも、レテ謡「宿る程だに鳴雷の、地謡「雨を起して降りくる足音は、レテ謡「ほろく、とどろく、とどろく、と踏みとどろかす、鳴神の鼓の時も至れば五穀成就も國土を守護し、治まる時には此神徳と、威光を顯しおはしまして、御祖の神は糺の森に、飛び去りく、入らせ給へば、猶立ち添ふや雲霧を、別雷の、神も天路に攀ち昇り、神も天路に攀ち昇つて、虚空に上らせ給ひけり。

俊寛

梗 俊寛成経康頼の三人、平家を覆さんとして、事顯れ共に鬼界が島に遠流のうきめを見たり。然るに年経て成経、康頼の二人は赦免せられ、俊寛一人のみ取殘されぬ。俊寛の愁歎、思ひやるべし。此曲は平家物語によりて、其状を脚色す。(四番目)

シテ 僧都俊寛 ツレ 平判官康頼 ツレ 丹波少將成経  
ワキ 赦免使

相國一太政大臣  
清盛をさす  
中宮一高倉天皇  
の後建禮門院  
御産一安德天皇  
御誕生あるべき  
折の事  
神を疏黄が島一  
神を賣ふと言ひ  
三つの山一船野  
三山

ワキ「是は相國に仕へ申す者にて候。さても此度中宮御産の御祈の爲に、非常の大赦行はるよにより、國々の流人赦免ある、中にも鬼界が島の流人の内、丹波少將成経、平判官康頼二人赦免の御使をば、某承つて候間、只今鬼界が島へと急ぎ候。ツレ「次第、神を疏黄が島なれば、神を疏黄が島なれば、願ひも三つの山ならん。ヤシ「これは九州薩摩、鬼界が島の流人の内、成経、丹波少將成経、康頼、平判官入道康頼、康頼、二

浦の濱木綿一重  
おもとと稱よる  
草

玉兔晝眠雲母  
地、金雞夜宿不  
萌枝一宿御願に  
出づといふ  
寒蟬抱枯木鳴  
盡不回首一海  
花無盡藏の詩句

酒一涿酒也酒  
を地にまくこと

人が果にて候なり。われら都にありし時、熊野參詣三十三度の、歩みをなさんと立願せしに、其半にも數足らで、かゝる遠流の身となれば、所願も空しく早なりぬ。せめての事の餘りにや、此島に三熊野を勸請申し、都よりの道中の、九十九處の王子まで、下敷ことごとく順禮の、神路に幣を捧げつと、上敷こととて、同じ宮居と三熊野の、同じ宮居と三熊野の、浦の濱木綿一重なる、麻衣のしをるよを、只其儘の白衣にて、眞砂を取りて散米に、白木綿花の御祓して、神に歩みを運ぶなり。神に歩みを運ぶなり。  
レテ一覽誦「後の世を、待たで鬼界が島守と、地誦「なる身の果の闇きより、レテ誦「闇き道にぞ入りにける。サン 玉兔晝眠る雪母の地、金雞夜宿す不萌の枝。寒蟬枯木を抱きて、鳴き盡して首を回さず。俊寛が身の上知られて候。康頼誦「あれなるは俊寛にてわたり候か。是までは何の爲の御出にて候ぞ。レテ誦「早くも御覽じ咎めたり。道迎のその爲に、酒を持ちて参りて候。康頼誦「そも一酒とは竹葉の、此島にあるべきかと立ち寄り見れば、や、是は水なり。レテ誦「是は仰せにて候へども、それ酒と申す事は、もとは是藥の水なれば、醴

重慶一九月九日  
彭祖一菊を眼し  
て壽七百歳に至  
る  
濡れて干す一古  
今集の歌下句い  
つか千年を我は  
へにけん

喜見城一帝釋天  
の居所  
流るるも又涙川  
一古今集に「涙  
川なに水上を懸  
ねけん物思ふ時  
の我身なりけり

酒にてなど無かるべき。康頼、成經、誦「けにくは是は理なり。頃は長月、レテ誦「時は重陽、成經誦「所は山路、レテ誦「谷水の、成經誦「彭祖が七百歳を経しも、心を汲み得し深谷の水、上歌地誦「飲むからに、けにも藥と菊水の、けにも藥と菊水の、心の底も白衣の、濡て干す、山路の菊の露のまに、我も千年をふる心地する。配所はさてもいつまでぞ、春すぎ夏たけて又、秋暮れ冬の來るをも、草木の色ぞ知らするや、あら戀しの昔や。思ひでは何につけても、あはれ都にありし時は、法勝寺法成寺、たど喜見城の春の花、今はいつしか引きかへて、五衰減色の秋なれや、落つる木の葉の盃、のむ酒は谷水の、流るるも又涙川、水上は我なるものを、物思ふ時しもは、今こそ限なりけれ。  
ワヤ一覽誦「早船の、心に適ふ追風にて、舟子やいと勇むらん。誦「いかに此島に流され人の御座候か。都より赦免状を持ちて参りて候。急いで御拜見候へ。レテ誦「あら有難や候。やがて康頼御覽候へ。康頼誦「何々中宮御産の御祈の爲に、非常の大赦行はるよにより、國の流人赦免ある、中にも鬼界が島の流人の内、丹波少將成經、平判官入道康頼、二人

誓の綱一佛の助

渚の千鳥一渚に  
無きを掛く  
感時花瀧涙恨  
別鳥驚心一杜  
子美の詩句

赦免ある所也。シテ詞「何とて俊寛をば読み落し給ふぞ。康頼御名はあらばこそ、赦免状の面を御覽候へ。シテ詞「さては筆者の誤か。ワヤ詞「いや某都にて承り候も、康頼成経二人は御供申せ、俊寛一人をば此島に残し申せとの御事にて候。

シテ詞「こはいかに罪も同じ罪、配所も同じ配所、非常も同じ大赦なるに、一人誓の綱に漏れて、沈み果てなん事は如何に。ワヤ詞「此ほどは三人一處に有りつるだに、さもおそろしく冷ましき、荒磯島にたど一人、離れて海士の捨草の、波の藻屑のよるべもなくて、あられんものか淺ましや。歎くにかひも渚の千鳥、泣くばかりなる有様かな。ワヤ詞「時を感じては、花も涙を濺ぎ、別れを恨みては、鳥も心を動かせり。もとよりも此島は、鬼界が島と聞くなれば、鬼ある所にて、今生よりの冥途なり。たとひ如何なる鬼なりと、此哀などか知らざらん。天地を動かし、鬼神も感をなすなるも、人のあはれなるものを、此島の鳥獸も、鳴くは我を弔ふやらん。シテ詞「せめて思ひの餘りにや、地謡「さきに讀みたる巻物を、又引き開き同じあとを、繰り返し繰り返し、見れども見れども唯、成経康頼

禮紙一書状の上  
包  
上その歎き一俊  
寛の鬱歎をさす  
向ひの地一九州  
をいふ

と、書きたる其名ばかりなり。もしも禮紙にやあるらんと、巻きかへして見れども、僧都とも俊寛とも、書ける文字は更になし。こは夢かさても夢ならば、さめよくと現無き、俊寛が有様を見るこそ哀なりけれ。

ワヤ詞「時刻うつりて叶ふまじ、成経康頼二人は早、御船に召され候へとよ。成経「かくてあるべき事ならねば、よその歎きをふりすてよ。一人は船に乗らんとす。シテ詞「僧都も船に乗らんとて、康頼の袂にとりつけば、ワヤ詞「僧都は船に叶ふまじと、さも荒げなく言ひければ、シテ詞「うたてやな公の私といふ事のおれば、せめては向ひの地までなりとも、情に乘せて給ひ給へ。ワヤ詞「情も知らぬ舟子ども、櫓権をふりあげ打たんとす。シテ詞「さすが命の悲しさに、又立ち歸り出船の、地謡「取りつき引きとむる。ワヤ詞「舟人ともづな押し切つて、船を深みに押し出だす。シテ詞「せん方波にゆられながら、たど手を合はせて船よなう、ワヤ詞「船よといへど乗せざれば、シテ詞「力及ばず俊寛は、地謡「もとの渚にひれふして、松浦佐用姫も、我身にはよも増さじと、地謡「聲も惜まず泣き居たり。



康頼ワキ、成経「痛はしの御事や。我等われら都みやこに上りなば、よき様に申し直しつゝ、やがて歸洛きらくはあるべし。御心おんこころ強く待ち給へ。レテ謡うた歸洛きらくを待てよとの、呼よばはる聲こゑも幽かすかなる、頼たのみを松まつ蔭かげに、音ねを泣なきさして聞ききたり。頼たの聞きくやいかにと夕波ゆふなみの、みな聲こゑ々に俊寛しゅんくわんを、レテ謡うた申し直なほさば程ほどもなく、康頼ワキ、成経「必ず歸洛きらくあるべしや。レテ謡うた「これは真まことか。康頼ワキ、成経「なかなかに、レテ謡うた頼たのむぞよたのもしくて、地謡ぢう待てよ待てよといふ聲こゑも、姿すがたも次第さだまに遠とほざかる沖おきつ波なみの、幽かすかなる聲こゑ絶たえて、船影ふなかげも人影ひとかげも、消きえて見えすなりにけり、あと消きえて見えすなりにけり。

松風

梗 在原行平は阿保親王の子にして、業平の兄なり。曾て須磨にさすらひしをりから、姉妹の海士少女を寵せし事ありと傳ふ。此曲は姉妹の幽霊あらはれて昔物語をなし、旅僧の回向を受くる事を作る。松風村雨の名は謡曲作者の設けしものならん。此曲文趣頗る優麗なるは、源氏物語須磨の卷に負ふ所多し。(鬘物)

シテ松風 ツレ村雨 ワキ僧

シカ〜〜里人より松のいはれを聞く事あり其身は土中に云一白樂天の體門原上土埋骨不埋名の意縁の秋一秋にたりても尚緑色なること

「是は諸國一見の僧にて候。我われいまだ西國さいこくを見ず候程に、此度このたび思おもひ立ち西國さいこく行脚ぎやくと志して候。あら嬉うれしや、急いそぎ候程に、是ははや津つの國須磨すまの浦うらとかや申し候。又是これなる磯邊いそべを見れば、様やうありけなる松まつの候。如何いかさま謂いはれなき事は候ま。此このあたりの人に尋たづねばやと思おもひ候。狂言きやうげんシカ〜。謡うたさては此松このまつは、いにしへ松風村雨まつかぜむらこりとて、二人ににんの海士うみの舊跡きよせきかや。痛いたはしや其身そのみは土中どちゆうに埋うづもれぬれども、名は残のこる世よのしるしとて、變かはらぬ色いろの松まつ

波こそもとや  
源氏物語須磨の  
巻に按たどこも  
もとに立ちくる  
心地しての句に  
よる  
心づくしの秋風  
以下須磨の巻  
に心づくしの  
秋風に海は少し  
遠けれど行平の  
中納言の關吹き  
越ゆるといひけ  
ん浦波よるく  
はげにいと近く  
聞えて云々の  
句に據る  
關吹き越ゆる  
旅人の秋涼し  
くなりけり關  
吹き越ゆる須磨  
の浦風  
かくばかり云々  
拾遺集の歌末  
句覆ゆる月かな  
月の出汐一月の  
出と共にさしく  
る汐

一木、緑の秋を残す事のあはれさよ。詞かやうに經念佛して弔ひ候へば、實に秋の日の  
ならひとて程なう暮れて候。あの山本の里までは程遠く候程に、是なる海士の鹽屋に立  
ち寄り、一夜を明かさばやと思ひ候。  
シテ、ツレ一雙語「汐汲車わづかなる、うき世に廻るはかなさよ。ツレ波こよもとや須磨の浦、  
月さへぬらす袂かな。シテ、サン語「心づくしの秋風に、海はすこし遠けれども、彼の行平の中  
納言、關吹き越ゆるとながめ給ふ、浦わの波の夜々は、實に音近き海士の家、里離れな  
る通路の、月より外は友もなし。シテ語「實にや浮世の業ながら、殊につたなき海士小舟  
の、シテ、ツレ語「渡りかねたる夢の世に、住むとや云はんうたかたの、汐汲車よるべなき、身は  
海士人の袖ともに、思を乾さぬ心かな。地語「かくばかり經がたく見ゆる世の中に、うら  
やましくも澄む月の、出汐をいざや汲まうよ。出汐をいざや汲まうよ。上歌「影はづかしき  
我姿、影はづかしき我姿、忍び車を引く汐の、跡に残れる溜水、いつまですみは果つべ  
き。野中の草の露ならば、日影に消えも失すべきに、是は磯邊に寄藻かく、海士の捨草

瀧をなみ一人  
の歌に「和歌の  
浦に潮満ちけれ  
ば瀧を無み瀧邊  
をさしてたづな  
き渡る」  
松島や新古今  
集に「松島や小  
島の海士の秋の  
袖月は物思ふ習  
ひのみかは」  
蘆の屋「伊勢物  
語に「芦の屋の  
瀧の汐焼いとま  
なみつげの小橋  
もささず來にけ  
り」さしくるは  
橋をさすより汐  
のさすに言掛く

いたづらに、朽ち増り行く袂かな。朽ち増り行く袂かな、シテ、サン語「面白や馴れても須磨  
の夕ま暮、海士の呼聲幽にて、シテ、ツレ語「沖にちひさき漁舟の、影幽なる月の顔、雁の姿  
や友千鳥、野分汐風いづれも實に、かよる所の秋なりけり。あらし心すこの夜すがらやな。  
シテ語「いざく汐を汲まんとて、汀に満干の汐衣の、ツレ語「袖を結んで肩に掛け、シテ語「汐  
汲む爲とは思へども、ツレ語「よしそれとても、シテ語「女車、上歌地語「寄せては歸る瀧をな  
み、寄せては歸る瀧をなみ、瀧邊の田鶴こそは立さわげ、四方の嵐も音添へて、夜寒何  
と過さん。更け行く月こそさやかなれ。汲むは影なれや。焼く鹽煙心せよ。さのみなど  
海士人の、憂き秋のみを過さん。松島や小島の海士の月にだに、影を汲むこそ心あれ、影  
を汲むこそ心あれ。ロンギ地語「運ぶは遠き陸奥の、其名や千賀の鹽道、シテ語「賤が鹽木を運  
びしは、阿漕が浦に引く汐、地語「其伊勢の、海の一見の浦、二度世にも出でばや。シテ語「松  
の村立霞む日に、汐路や遠く鳴海瀧、地語「それは鳴海瀧、こよは鳴尾の松蔭に、月こそ  
さはれ蘆の屋、シテ語「灘の汐汲む憂き身ぞと、人にや誰も黄楊の櫛、地語「さしくる汐を汲

み分けて、見れば月こそ桶かぶにあれ。レテ馬こ是にも月の入りたるや、地通こうれしや是も月あり。レテ馬こ月は一つ。地通こ影は二つ満つ汐の、夜の車くるまに月を載せて、憂うれしとおもはぬ汐路かなや。

ワヤ詞「鹽屋しほやの主あるじの歸りて候。宿やどを借らばやと思ひ候。如何いかに是なる鹽屋しほやの内へ案内申し候。ツレ詞「誰たれにて渡り候ぞ。ワヤ詞「是は諸國しよこく一見いつけんの僧そうにて候。一夜いちやの宿やどを御貸おんかし候へ。ツレ詞「暫しばく御待おんまちち候へ、主あるじに其由そのよし申し候べし。如何いかに申し候、旅人たびびとの御入おんいり候が、一夜いちやの御宿おんやどと仰おほせ候。レテ詞「餘あまりに見苦みくるしき鹽屋しほやにて候程に、御宿おんやどは叶かなふまじきと申し候へ。ツレ詞「主あるじに其由そのよし申し候へば、鹽屋しほやの内見うちみ若わかしく候程に、御宿おんやどは叶かなふまじき由よし仰おほせ候。ワヤ詞「いやく見苦みくるしきは苦くるしからず候。出家しゆつげの事ことにて候へば、平ひらに一夜いちやを明あかさせて給たまはり候へと重ねて御申おんまうし候へ。ツレ詞「いや叶かなひ候まじ。レテ詞「暫しばく。露つゆ月の夜影よかげに見奉たまれば世よを捨すて人びと、よし〜かよる海士あまの家、松まつの木柱きばしらに竹たけの垣かき、夜寒よふさめさこそと思へども、蘆あし火びにあたりて、御泊おんやどりあれと申し候へ。ツレ詞「此方こなたへ御入おんいり候へ。ワヤ詞「あらうれしやさ

松の木柱云々  
是も須磨の巻の  
詞によれり

らばかう参まゐらうするにて候。

レテ詞「始はじめより御宿おんやど参まゐらせたくは候ひつれども、餘あまりに見苦みくるしく候程に、さて否いなと申して候。ワヤ詞「御志おんこころ有難ありがたう候。出家しゆつげと申し旅たびといひ、泊やどりはつべき身みならねば、何いづくを宿やどと定さだむべき。其上このすま此須磨このすまの浦うらに心こころあらん人は、わざともわびてこそ住すむべけれ。誰たれわくらはに問とふ人ひとあらば須磨すまの浦うらに、詞ことば藻鹽もしほたれつよわぶと答こたへよと、行平ゆきひらも詠たい給たまひしとなり。又またあの磯邊いそべに一木ひとこの松まつの候を、人ひとに尋たづねて候へば、松風まつかぜ村雨むらみ二人ふたりの海士あまの舊跡きゆうせきとかや申し候程に、逆縁さか縁ながら弔さびひてこそ通り候ひつれ。あら不思議ふしぎや、松風まつかぜ村雨むらみの事ことを申して候へば、二人ふたり共に御愁傷おんしゆうしやう候。是これは何なにと申したる事ことにて候ぞ。レテ、ツレ馬こ實ひにや思おもひ内うちにあれば、色外いろほかに顯あられさむらふぞや。わくらには問とふ人ひとあらばの御物語おんものがたり、餘あまりになつかしう候ひて、猶執心なほしんの闇浮あんぶの涙なみだ、再び袖そでをぬらしさむらふ。ワヤ詞「なほ執心しんの闇浮あんぶの涙なみだとは、今は此世このよに亡なき人の詞ことばなり。又またわくらはの歌うたもなつかしいなどと承うけたまり候。かたぐ不審ふしんに候へば、二人ふたりともに名なを御名おんなのり候へ。レテ、ツレ馬こ恥はかしや申まさんとすればわくら

わくらはに  
まさかに

月にも馴るる  
新後撰集に「沙  
風の波懸衣袂を  
へて月になれた  
る須磨の海士  
人」  
鎌一聖蹟の約簿  
き翔布

はに、言問ふ人もなき跡の、世にしほじみてこりすまの、恨めしかりける心かな。クドヤ此  
上は何をかさのみ包むべき。是は過ぎつる夕暮に、あの松陰の苔の下、亡き跡とはれ参  
らせつる、松風村雨二人の女の、幽霊是まで来りたり。さても行平三年が程、御つれなく  
の御船遊び、月に心は須磨の浦、夜汐を運ぶ海士少女に、おとどひ選ばれ参らせつよ、折  
にふれたる名なれやとて、松風村雨と召されしより、月にも馴るる須磨の海士の、レテ馬鹽  
焼衣色替へて、レテ馬、緑の衣の空焼なり。レテ馬かくて三年も過ぎ行けば、行平都に上り  
たまひ、レテ馬幾程なくて世を早う、去り給ひぬと聞きしより、レテ馬「あら戀しやさるに  
ても、又いつの世の音信を、地馬松風も村雨も、袖のみ濡れてよしなやな。身にも及ば  
ぬ戀をさへ、須磨の餘りに罪深し。跡帯ひて給ひ給へ。」  
上歌地馬「戀草の露も思ひも亂れつよ、露も思ひも亂れつよ、心狂氣に馴衣の、巳の日の祓  
や木綿四手の、神の助けも波の上、あはれに消えし憂き身なり。クセあはれ古へを、思ひ  
出づればなつかしや、行平の中納言 三年はこよに須磨の浦、都へ上り給ひしが、此程

形見こそ伊勢  
物語の歌を引く  
宵々に古今集  
の歌下句かけて  
思はぬ時の間も  
なし  
枕より古今集  
の歌下句せん方  
なみぞ床中に居  
る

あらうれしや  
狂風の塵

の形見とて、御立烏帽子狩衣を、残し置き給へども、是を見る度に、彌増の思草、葉末  
に結ぶ露の間も、忘れればこそあぢきなや、形見こそ、今はあだなれ是なくは、忘るよ  
隙も有りなんと、詠みしも理や、なほ思ひこそは深けれ。レテ馬「宵々に、ぬぎて我寝る  
狩衣、地馬「かけてぞ頼む同じ世に、住むかひあらばこそ、忘形見もよしなしと、捨てよ  
も置かれず、取れば面影に立ち増り、起臥わかで枕より、跡より戀の責め來れば、せん  
かた涙に、伏し沈む事ぞ悲しき。  
レテ馬「三瀬河、絶えぬ涙の憂き瀬にも、亂るよ戀の淵はありけり。あらうれしやあれに行  
平の御立有るが、松風と召されさむらふぞや、いで参らう。レテ馬「あさましや其御心故にこ  
そ、執心の罪にも沈み給へ。娑婆にての妄執をなほ、忘れ給はぬぞや。あれは松にてこ  
そ候へ。行平は御入もさむらはぬものを。レテ馬「うたての人の言事や、あの松こそは行平  
よ。誰たとひ暫しは別るとも、松とし聞かば歸りこんと、連ね給ひし言の葉は如何に。  
レテ馬「實になう忘れてさむらふぞや。たとひ暫しは別るとも、待たば來んとこの言の葉を、

立ち別れ一行平の歌古今集に出

レテ「こなたは忘れず松風の、立ち歸りこん御音信、ツレ馬終にも聞かば村雨の、袖しばしこそぬるよとも、レテ馬まつに變らで歸りこば、ツレ馬あら頼もしの、レテ馬御歌や。地通立ち別れ、(中絶)レテ馬いなばの山の峰に生ふる、松しと聞かば今歸りこん。それは稲葉の遠山松、地通是はなつかし君こよに、須磨の浦わの松の行平、立ち歸りこば我も木陰に、いざ立ち寄りて磯剛松の、なつかしや。松に吹き來る風も狂じて、須磨の高波はけしき夜すがら、妄執の夢に見みゆるなり。我跡弔ひて給ひ給へ。暇申して歸る波の音の、須磨の浦かけて、吹くや後の山おろし、關路の鳥も聲々に、夢も跡なく夜も明けて、村雨と聞きしも今朝見れば、松風ばかりや残るらん、松風ばかりや残るらん。

西行櫻

梗 西行上人、京都の西山の草庵に在りし頃、櫻の精現れ、西行の「あたら櫻のとがにぞありける」の歌につきて問答せし物語を作る。九重の都の花景色を詠へる所精彩あり。(四番目)

シテ 櫻の精  
ツレ 花見の人々  
ワキ 西行上人  
狂言 寺男

ツレ立衆「頃待ち得たる櫻狩、頃待ち得たる櫻狩、山路の春に急がん。ツレ馬かやうに候ふ者は、下京邊に住居仕る者にて候。さてもわれ春になり候へば、こよかしこの花をながめ、さながら山野に日を送り候。昨日は東山地主の櫻を一目見仕りて候。今日は又西山西行の庵室の花、盛なるよし承りおよび候程に、花見の人々を伴ひ、只今西山西行の庵室へと急ぎ候。ツレ道行馬百千鳥、轉る春は物毎に、轉る春は物毎に、あらたまりゆく日數経て、頃も彌生の空なれや、やよ留りて花の友、知るも知らぬも諸共に、誰も花な

地主一地主權現のこと清水寺  
百千鳥古今集の歌下句改まれども我ぞよりゆく

上求本来一上は  
淨土に向ひて本  
來の善提成佛を  
求むること  
下化冥暗一下は  
人間に對して冥  
暗なる衆生を救  
化すること  
行く水に一朗詠  
集に池冷水無  
三伏夏一松高風  
有ニ一豊秋

花故ありかを知  
られん事一世を  
厭へる陀住居を  
花のために見あ  
らばさるゝは迷  
惑なれども意

櫻花咲きにけり  
しな古今集の  
歌未句見ゆる白  
雲

浮世のさが一さ  
がは性のこと類  
娥に掛く

る心かな。誰も花なる心かな。  
ツレ調「急ぎ候程に、是ははや西行の庵室に著きて候。暫く皆々御待ち候へ、某案内を申さうするにて候。如何に案内申し候。狂言調「誰にて渡り候ぞ。ツレ調「さん候。是は都方の者にて候が、此御庵室の花、盛なる由承り及び、遙々是まで参りて候。そと御見せ候へ。狂言調「易き間の御事にて候へども、禁制にて候さりながら、御機嫌を見てそと申し見うするにて候。暫く御待ち候へ。ツレ調「心得申し候。  
ワキ、ツレ調「夫れ春の花は上求本来の梢にあらはれ、秋の月下化冥暗の水に宿る。誰か知る行く水に三伏の夏もなく、潤底の松の風一聲の秋を催す事。草木國土おのづから、見佛聞法の結縁たり。調「さりながら四つの時にも勝れたるは花實の折なるべし。調「あら面白や候。  
狂言調「日本一の御機嫌にて候やがて申さう。如何に申し候。都より此御庭の花を見たく由申して、是まで皆々御出でて候。ワキ調「何と都よりと申し、此庵室の花を眺めん爲

に、是まで皆々來り給ふと申すか。狂言調「さん候。ワキ調「およそ洛陽の花盛、何處もと云ひながら、西行が庵室の花、花も一木、我も獨と見るものを、花故ありかを知られん事いかどなれども、是まで遙々來りたる志を見せでは如何で歸すべき。あの柴垣の戸を開き内へ入れ候へ。狂言調「畏つて候。如何に方々へ申し候。よき御機嫌に申して候へば、見せ申せとの御事にて候程に、急いで此方へ御出で候へ。ツレ調「心得申し候。  
ツレ調「櫻花咲きにけらしな足びきの、山のかひより見えしまよ、此木の本に立ち寄れば、ワキ調「我は又心ことなる花の本に、飛花落葉を觀じつよ、獨り心を澄ますところにて、ツレ調「貴賤群集の色々に、心の花も盛んにて、ワキ調「昔の春に歸る有様、ツレ調「隠れ所の山といへども、ワキ調「さながら花の、ツレ調「都なれば、上歌地調「捨人も、花には何と隠家の、花には何と隠家の、所は嵯峨の奥なれども、春に訪はれて山までも、浮世のさがになるものを、實にや捨てよだに、此世の外はなきものを、何くか終の住家なる。何くか終の住家なる。

花見んと云々  
西行の歌

ワヤ詞「如何に面々、是まで遙々來り給ふ志、かへすくも優しうこそ候へさりながら、捨てよ住む世の友とては、花獨なる木の本に、身には待たれぬ花の友、少し心の外なれば、花見んと群れつよ人の來るのみぞ、あたら櫻のとはには有りける。地謡「あたら櫻の陰暮れて、月になる夜の木の本に、家路忘れて諸共に、今宵は花の下臥して、夜と共に眺め明かさん。」

埋木の云々同

シテ謡「埋木の人知れぬ身と沈めども、心の花は残りけるぞや。花見んと群れつよ人の來るのみぞ、あたら櫻のとはには有りける。ワヤ謡「不思議やな朽ちたる花の空木より、白髪の老人現れて、西行が歌を詠する有様、さも不思議なる仁體なり。シテ謡「これは夢中の翁なるが、今の詠歌の心を詠猶も、調尋ねん爲に來りたり。ワヤ謡「そもや夢中の翁とは、夢に來れる人なるべし。調「それに付きても只今の、詠歌の心を尋ねんとは、歌に不審の有るやらん。シテ謡「いや上人の御歌に、何か不審の有るべきなれども、群れつよ人の來るのみぞ、あたら櫻のとはには有りける。調「さて櫻のとはは何やらん。ワヤ謡「いや是は只浮世

影唇を動かさず  
朗詠集に輕淡激  
吟影動唇

花笑撫前壁未  
難鳥啼林下涙  
難盡一白聯抄  
解の詩句  
朝露落花相伴  
出暮隨飛鳥一  
時歸一白樂天の  
詩  
見渡せば古今  
集の歌下句都ぞ  
春の跡なりける  
春宵一刻一蘇東  
坡の詩

を厭ふ山住なるに、貴賤群集の厭はしき、心を少し詠するなり。シテ謡「恐れながら此御意こそ、少し不審に候へとよ。浮世と見るも山と見るも、只其人の心にあり。非情無心の草木の、花に浮世のとははあらし。ワヤ謡「實にくは是は理なり、さてくかやうに理をなす、御身は如何さま花木の精か。シテ謡「眞は花の精なるが、此身も共に老木の櫻の、ワヤ謡「花物言はぬ草木なれども、シテ謡「とがなき謂れを木綿花の、ワヤ謡「影唇を、シテ謡「動かすなり。地謡「恥かしや老木の、花も少く枝朽ちて、あたら櫻の、とがのなき由を申し開く花の、精にて候なり。およそ心なき草木も、花實の折は忘れめや、草木國土皆成佛の御法なるべし。シテ謡「有難や上人の御知遇に引かれて、惠の露あまねく、地謡「花檻前に笑んで聲いまだ聞かず、鳥林下に鳴いて涙盡き難し。ワヤ謡「夫れ朝に落花を踏んで相伴なつて出づ、夕には飛鳥に随つて一時に歸る。シテ謡「九重に咲けども花の八重櫻、地謡「幾代の春を重ぬらん。シテ謡「然るに花の名高きは、地謡「まづ初花を急ぐなる、近衛殿の糸櫻、ワヤ謡「見渡せば、柳櫻をこき交せて、都は春の錦燦爛たり。千本の櫻を植る置

き、其色を所の名に見する、千本の花盛、雲路や雪に残るらん。毘沙門堂の花盛、四王  
 天の榮花も、是にはいかで勝るべき。上なる黒谷下河原、むかし遍昭僧正の、レテ浮世  
 を厭ひし花頂山、地蔵、鶯の御山の花の色、枯れにし鶴の林まで、思ひ知られてあはれな  
 り。清水寺の地主の花、松吹く風の音羽山、こよは又嵐山、戸無瀬に落つる瀧つ波まで  
 も、花は大井河、井堰に雪やかよるらん。レテすはや数添ふ時の鼓、地蔵、後夜の鐘の音  
 響ぞ添ふ。レテ「あら名残惜の夜遊やな。惜しむべし惜しむべし、得難きは時、逢ひ難き  
 は友なるべし。レテ春宵一刻價千金、花に清香月に陰、春の夜の、(序ノ體)  
レテ「花の陰より明け初めて、地蔵、鐘をも待たぬ別れこそあれ、別れこそあれ、別れこそあ  
 れ。レテ「待てしはし待てしはし、夜はまだ深きぞ。地蔵、白むは花の影なりけり。よそはま  
 だ小倉の山陰に、残る夜櫻の花の枕の、レテ「夢は覺めにけり。地蔵、夢は覺めにけり。嵐  
 も雪も散り敷くや、花を踏んでは同じく惜しむ少年の、春の夜は明けにけりや、翁さび  
 て跡もなし。翁さびて跡もなし。」

踏花同惜少年  
琴一白樂天の詩

翁さびて一老人  
めくこと

浮船

梗 此曲の材料は源氏物語なり。薰大將宇治の里なる浮舟の  
 君に契りしが匂兵部卿宮もまた言ひ寄りたり。浮舟つひ  
 に己がはかなき運命を悔て宇治川に身を投げんとしたま  
 たま初瀬より下向の横川僧都に救はれ、尼になれりといふ。  
 之に基きて、浮舟の幽霊を出し旅僧の巾ひを受くる事を作  
 る。(四番目)

シテ 浮舟(前は里女) ワキ 旅僧

ワキ「是は諸國一見の僧にて候。我此程は初瀬に候ひしが、是より都に上らばやと思ひ候。  
道行初瀬山、夕越え暮れし宿もはや、夕越え暮れし宿もはや、檜原の外に三輪の山、し  
 るしの杉も立ち別れ、嵐と共にならの葉の、暫し休らふ程もなく、狛の渡りや足早み、宇  
 治の里にも著きにけり。宇治の里にも著きにけり。詞急ぎ候程に、是は早宇治の里に著  
 きて候。暫く休らひ名所をも詠めばやと思ひ候。」

初瀬山云々！新  
古今集に「初瀬  
山夕越え暮れて  
宿とへば三輪の  
檜原に秋風ぞ吹  
泊の渡り山城



柴積船—宇治の名物なり源氏物語浮舟の巻に宇治橋のはるし見渡さるるに柴積船のとこるどころに行違ひたる云々とあり

里の名を聞かむ—宇治は憂に掛けていふ浮舟の歌に「里の名を我身に知れば山城の宇治のわたりぞいと住みうき」

シテ一雙謡「柴積船の寄る波も、なほたづきなき憂き身かな。憂きは心の科ぞとて、たが世をかこつ方もなし。ヤシ住み果ぬ住家は宇治の橋柱、立居苦しき思ひ草、葉末の露を憂き身にて、老い行く末も白眞弓、もとの心を歎くなり。下歌とにかくに、定めなき世の影頼む、上歌月日も受けよ行末の、月日も受けよ行末の、神に祈りの叶ひなば、頼みをかけて御注連繩、長くや世をも祈らまし。長くや世をも祈らまし。

ワキ詞「いかに是なる女性に尋ね申すべき事の候。シテ此方の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ詞「この宇治の里に於て、古へ如何なる人の住みたまひて候ぞ。委しく御物語り候へ。シテ詞「所には住み候へども、賤しき身にて候へば、委しき事をも知らず候さりながら、古へ此所には、浮舟とやらんの住み給ひしとなり。謡「同じ女の身なれども、數にもあらぬ憂き身なれば、いかでかさまでは知り候べき。ワキ詞「實にくに光源氏の物語、なほ世に絶えぬ言の葉の、それさへ添へて聞かまほしきに、誰心に残り給ふなよ。シテ詞「むつかしの事を問ひ給ふや。里の名を聞かじといひし人もこそあれ、誰さのみは何と問ひ給ふ

橋の小島が崎—宇治川の名所

ちほどか—ちほやうなること

汀の水—匂部御宮の歌に「峰の駕汀の水ふみわけて君にぞまどふ道はまどはデ」

ぞ、上歌地謡「さなきだに古の、さなきだに古の、戀しかるべき橘の、小島が崎を見渡せば、河より遠の夕煙、立つ河風に行く雲の、跡より雪の色添へて、山は鏡をかけまくも、賢き世々に有りながら、猶身を宇治と思はめや、猶身を宇治と思はめや。ワキ詞「猶々浮舟の御事委しく御物語り候へ。クリ地謡「そもくこの物語と申すに、其品々も妙にして、事のこころ廣ければ、ひろひて云はん言の葉の、シテ、サン謡「玉の數にもあらぬ身の、そむきし世をやあらはすべき。地謡「まづ此里にいにしへは、人々あまた住み給ひたる類ひながら、取り分き此浮舟は、薫中將のかりそめに、する給ひし名なり。クセ人がらもなつかしく、心さまよし有りて、おほどかに過し給ひしを、物いひさがなき世の人の、ほのめかし聞えしを、色深き心にて、兵部卿の宮なん、忍びて尋ねおはせしに、織り縫ふ業のいとまなき、宵の人目も悲しくて、垣間見しつよおはせしも、いと不便なりし業なれや。其夜にさても山住の、めづらかなりし有様の、心にしみて有明の、月澄み昇る程なるに、シテ謡「水の面も曇りなく、地謡「船さしとめし行方とて、汀の水踏み分け

一方一黨大将を  
晴れぬながめ  
蕨大将の歌に  
「水まさる遠の  
里人いかならん  
晴れぬながめに  
かきくらす頃」

小野一浮舟の養  
母の尼君が住み  
し地

大比叡の杉のし  
るし一新續古今  
集に「大ひえや  
杉立つかげを尋  
ぬればしるしも  
同じ三輪の神  
垣」

て、道は迷はずと有りしも、浅からぬ御契なり。一方は長閑にて、訪はぬ程經る思さへ、  
晴れぬながめと有りしにも、涙の雨や増さりけん、とにかくに思ひわび、此世になくも  
ならばやと、歎きし末ははかなくて、終に跡無くなりけり。終に跡無くなりけり。  
ワキ調「浮舟の御事は委しく承りぬ。さてく御身は何處に住む人ぞ。レテ調「是は此所にか  
りに通ひものするなり。妾が住家は小野の者、都のつてに訪ひ給へ。ワキ調「あら不思議  
や、何とやらん事たがひたるやうに候。さて小野にては誰とか尋ね申すべき。レテ調「隠れ  
はあらじ大比叡の、杉のしるしはなけれども、横川の水のすむ方を、比叡坂と尋ね給  
ふべし。下歌地謡「猶物の氣の身に添ひて、惱む事なんある身なり。法力を頼み給ひつよ、  
あれにて待ち申さんと、浮き立つ雲の跡もなく、行く方知らずなりにけり、行く方知ら  
ずなりにけり。  
ワキ調「かくて小野には來たれども、何處を宿と定むべき。上歌謡「所の名さへ小野なれば、  
所の名さへ小野なれば、草の枕は理や、今宵はこよに經を讀み、彼御跡を弔ふとかや、

彼御跡を弔ふとかや。

憂き名洩れんと  
一浮舟の歌に  
「なげきわび身  
をば捨つとも亡  
き影にうき名流  
さんことをこそ  
思へ」

小島の色は一兵  
部卿の歌に「年  
経ともかはらん  
ものか橋の小島  
の崎に賣る心  
は」

都卒一天上

後レテ調「亡き影の絶えぬも同じ涙川、寄るべ定めぬ浮舟の、法の力を頼むなり。あさましや  
本より我は浮舟の、よる方わかで漂ふ世に、憂き名洩れんと思ひわび、此世になくもな  
らばやと、明暮思ひ煩ひて、人皆寝たりしに、妻戸を放ち出でたれば、風烈しう河波荒  
う聞えしに、知らぬ男の寄り來つつ、誘ひ行くと思ひしより、心も空になりはてよ、あ  
ふささるさの事もなく、地謡「我がの氣色もあさましや。レテ調「あさましやあさましやな橋  
の、地謡「小島の色は變らじを、レテ調「此浮舟ぞよるべ知られぬ。地謡「大慈大悲の理は、  
大慈大悲の理は、世に廣けれど殊に我が心一つに怠らず、明けては出づる日の影を、  
絶えぬ光と仰ぎつよ、暮れては闇に迷ふべき、後の世かけて頼みしに、レテ調「頼みしまよ  
の觀音の慈悲、地謡「頼みしまよの觀音の慈悲、初瀬の便に横川の僧都に見付けられつよ  
小野に伴なひ、祈り加持して物の氣除けしも、夢の世に猶、苦しみは大比叡や、横川の  
杉の古き事ども、夢に顯れ見え給ひ、今此聖も同じ便に、弔ひ受けんと思ひしに、思ひ

のまよに執心晴れて、都卒に生まるようれしきと、いふかと思へば明け立つ横川、いふかと思へば明け立つ横川の、杉の嵐や残るらん。杉の嵐もや残るらん。

内十一

吳服

梗 概 應神天皇の時來朝せし吳織漢織の女工現はれて故事を語り、御代を壽ぐ事を作る。めでたき曲なり。(脇能)

シテ 吳織(前は里女) ツレ 里女  
ワキ 臣下

三人次第、道の道たる時とてや、道の道たるときとてや、國々豊なるらん、ワキ耳そもく是は當今に仕へ奉る臣下なり。我此間は攝州住吉に參詣申して候。又是より浦傳ひし、西の宮に參らばやと存じ候。三人道行、住の江や、のどけき浪のあさか潟のどけき浪のあさか潟、玉藻刈るなる海士人の、道もすぐなる難波潟、ゆくへの浦も名を得たる、吳服の里に著きにけり。吳服の里に著きにけり。

西の宮—廣田明神と號す姪子を記る  
吳服の里—攝津池田村といふ

送り迎へし機物  
御調の織物を  
いよ

やごとなき一や  
んごとなきとも  
いよ貴きこと

シテ、ツレニ聲請くればととり、綾の衣の浦里に、年経て住むや海士少女、ツレ通立ちよる浪も  
白糸の、シテ、ツレ通機織り添ふる音しけし。シテ、サレ通これは津の國吳服の里に、住みて久  
しき二人の者、シテ、ツレ通我この國にありながら、身は唐の名にしおふ、女工の昔を思ひ出  
づる、月の入るさや西の海、波路はるかに來し方の、身は唐人の年を経て、こよに吳服  
の里までも、身に知られたる名所かな。下歌これもかしこき御代のため、送り迎へし機物  
の、上歌倭にも、織る唐衣の營みを、織る唐衣の營みを、今數島の道かけて、言の葉草の  
花までも、あらはしぎぬの色そへて、心をくたく紫の、袖も妙なるかさしかな。袖も  
妙なるかさしかな。

ワヤ調「さて我此松原に來て見れば、やごとなき女性二人あり。一人は機を織り、今一人  
は糸を取り引き、互に常の里人とは見え給はず。そも方々はいかなる人ぞ。シテ、ツレ通は  
づかしや里ばなれる松陰の、うしほも曇る夕月の、影にまぎれて浦波の、聲にたぐへ  
て機物の、音きこえじと思ひしに、知られけるかや恥かしや。ワヤ調何をか包み給ふらん

吳織とは申し  
傳へたりけれ  
はとりをあやと  
いふため枕詞と  
なること

これほとりまや  
に戀しく後撰  
集の歌下句二村  
山も越さずなり  
にき

其身は常の里人ならで、此松陰に隠れ居て、機織り給ふは不審なり。詠いかさま名の  
り給ふべし。シテ調「これは應神天皇の御宇に、めでたき御衣を織り初し、吳織漢織と申  
しよ二人の者、今又めでたき御代なれば、現にあらはれ來りたり。ワヤ調不思議の事を聞  
くものかな。それは昔の君が代に、唐國よりも渡されし、綾織二人の人なるが、今現  
在にあらはれ給ふは、詠何といひたる事やらん。シテ調「はやくも心得給ふものかな。ま  
づ此里を吳服の里と名づけ初めしも何故ぞ。我此所にありし故なり。ツレ通又漢織とは機  
物の、糸を取り引く工ゆゑ、綾の紋をもなす故に、漢織とは申すなり。シテ調「吳織とは機  
物の、糸引く木をばくれはと云へば、くれはとる手によそへつと、詠吳織とは申すなり。  
ツレ通「されば二人の名によせて、シテ通「吳織、ツレ通綾とは申し傳へたり。シテ、ツレ通「しかれば  
われらは唐人なれば、やまと詞は知らねども、シテ通「くれはととりあやに戀しくありしかば、  
二村山とよみし歌も、ふたたりを思ふ心なり。上歌地通「くれはととり、怪しめ給ふ旅人の、怪  
しめ給ふ旅人の、御目の程はさすがけに、名にしおふ都人の、所から唐人と、われらを

御覽せらるゝは、實にかしこしや善き君に、仕ふる人かありがたや、仕ふる人かありがたや。

吳郡—今ゴヤンと語へり

クリ地誦「それ綾と云つば、もろこし吳郡の地より織りそめて、女工のながき營みなり。シテ、サレ誦「しかるに神功皇后、三韓をしたがへ給ひしより地誦和國異朝の道廣く、人の國まで靡く世の、我日の本はのどかなる、御代の光は普くて國富み民のたかなり。シテ、南雲收まりて、地誦「西北に風靜かなり。クセ應神天皇の御宇かとよ、吳國の勅使此國に、はじめて來り給ひしに、綾女糸女の女婦を添へ、萬里の滄波を凌ぎ來て、西日影残りなく、吳服の里に休らひ、連日に立つる機物の、錦を折々の、綾の御衣を奉る。勅使奏覽ありしかば、叡感殊に甚し、それより名づけつよ、衰龍の御衣の紋、いと名も名高き、山鳩色を移しつよ、氣色だつなり雲鳥の、羽ぶさをたよむ綾となす、いと名もかしこかりけり。シテ誦「しかれば萬代に、絶えせぬ御調なるべしと、地誦「御定めありしより、吳服の文字をやはらけて、吳織漢織と、名づけさせ給へば、年を迎へて色をなす、綾

衰龍—天皇の御山鳩色—勅使の袍のこと下は黃上は青雲鳥—雲と鶴とを織りつく羽ぶさ—翼

の錦の唐衣、かへすくも君が袖、古きためしを引く糸の、かよる御世ぞめでたき

ロンギ地誦「これにつけても此君の、これにつけても此君の、めでたきためし有明の、夜すがら機を織り給へ。シテ、ソレ誦「いざくさらば機物の、錦を織りて我君の、御調に備へ申さん。

地誦「けにや御調の數々に、錦の色は、シテ、ソレ誦「小車の、地誦「丑三つ時過ぎ、曉の空を待ち給へ、姿をかへて來らん。さらばといひて吳織漢織は歸れども、鶏はまだ鳴かずや、夜長なりと待ち給へ、夜長くととも待ち給へ。(中人)

ワキ上歌誦「うれしきかなやいざさらば、うれしきかなやいざさらば、此松陰に旅居して、風も嘯く寅の時、神の告をも待ちて見ん。神の告をも待ちて見ん。

後シテ誦「君が代は天の羽衣稀にきて、撫つとも盡きぬ巖ならなん。千代に八千代を松の葉の、散り失せずして色は猶、正木のかづら長き代の、ためしに引くや綾の紋、曇らざりける時とかや。地誦「此君の、かしこき世ぞと夕浪に、聲立て添ふる機物の音、シテ誦「錦を織る機物の内に、相思の字をあらはし、衣うつ砧の上に怨別の聲、松の風、又は磯うつ浪

君が代は云々—拾遺集の歌末句巖なるらん松の葉の云々—古今集序の詞高砂にも見ゆ織錦機中已解相思之字據衣砧上砧添怨別之聲—朗詠集

精靈の童菩薩  
夢を支配する者

の音 地謡しきりにひまなき機物の、シテ取るや吳服の手繰の糸、地謡我取るはあやは、  
シテ踏木の足音、地謡きりはたりちやう、シテきりはたり、ちやうくと、地謡悪魔  
も恐るゝ聲なれや。けに織姫のかざしの袖、(中ノ舞)地謡思ひ出でたり織女の、思ひ出でた  
り織女の、たまくと逢へる旅人の、夢の精靈妙童菩薩も、影向なりたる夜もすがら、夜もす  
がら、寶の綾を織り立て織り立て、我君に捧物、御代のためしの二人の織姫、吳服あや  
はのとりぐに、くれはあやはのとりぐの御調物、供ふる御代こそめでたけれ。

八島

梗概

源義経の靈現れ、八島合戦の鍔引、弓流しなどの事を物語る。  
勝修羅物の一にして、祝言能として用うる。申入の時狂言  
方那須の語り(與一扇を射る事)をなす事あり。(二番目)

シテ 源義経(前は漁翁) ツレ 漁夫  
ワキ 僧

八島一屋島とも  
書く

ワキ次第「月も南の海原や、月も南の海原や、八島の浦を尋ねん、ツレ是は都方より出で  
たる僧にて候。我未だ四國を見ず候程に、此度思ひたち西國行脚と志し候。ワキ道行菩薩  
霞、浮き立つ浪の沖つ舟、浮き立つ浪の沖つ舟、入日の雲も影添ひて、其方の空と行く  
程に、はるくくなりし舟路へて、八島の浦に著きにけり。八島の浦に著きにけり、ツレ急  
ぎ候程に、是は早讀岐國八島の浦に著きて候。日の暮れて候へば、是なる鹽屋に立ち寄  
り、一夜を明かさばやと思ひ候。

漁翁衣傍西岸  
宿曉波清湘燒  
楚竹一柳宗元  
の詩

知らぬ火の—筑  
紫の枕詞  
釣のいとま—縁  
を暇に言掛く

「おもしろや月海上に浮んでは波濤野火に似たり。ツレ」漁翁夜西岸に傍うて宿す、  
「あかつき湘水を汲んで楚竹を焼くも、今に知られて蘆火のかけ、ほの見えそむる物  
す。さよ。ツレ」月の出汐の沖つ波、ツレ「霞の小舟こがれ来て、ツレ」海士のよび聲、  
ツレ「里近し。ツレ」一葉萬里の舟の道、唯一帆の風に任す。ツレ「夕の空の雲の浪、  
ツレ」月のゆくへに立ち消えて、霞にうかむ松原の、かけは縁に映るひて、海岸をことも  
知らぬ火の、筑紫の海にや續くらん。下歌こよは八島の浦づたひ、海士の家居もかすく  
に、上歌釣のいとまも波の上、釣のいとまも波の上、霞わたりて沖行くや、海士の小  
舟のほのくくと、見えて残る夕ぐれ、浦風までものどかなる、春や心をさそふらん。春  
や心をさそふらん。ツレ「まづく鹽屋に歸り休まうするにて候。  
ツレ」鹽屋の主の歸りて候。立ち越え宿を借らばやと思ひ候。いかに是なる鹽屋の内へ案  
内申し候。ツレ「誰にて渡り候ぞ。ツレ」諸國一見の僧にて候。一夜の宿を御貸し候へ。  
ツレ「暫く御待ち候へ、主に其由申し候べし。いかに申し候、諸國一見の御僧の、一夜の

照りもせア新  
古今集の歌末句  
しくものぞなき  
若くを敷くと言  
辨く  
などか雲居に  
新古今集に「天  
つ風ふけひの浦  
にゐるたづのな  
どか雲居に歸ら  
ざるべきし

御宿と仰せ候。ツレ「易き程の御事なれども、あまりに見苦しく候ほどに、御宿は叶ふま  
じき由申し候へ。ツレ「御宿の事を申して候へば、あまりに見ぐるしく候ほどに、叶ふま  
じき由仰せ候。ツレ「いやく見ぐるしきは苦しからず候。殊に是は都方の者にて、此浦  
はじめて一見の事にて候が、日の暮れて候へば、ひらに一夜と重ねて御申し候へ。ツレ「心  
得申し候。唯今の由申して候へば、旅人は都の人にて御入り候が、日の暮れて候へば、平  
に一夜と重ねて仰せ候。ツレ「何旅人は都の人と申すか。ツレ「さん候。ツレ「けに痛は  
しき御事かな。さらば御宿を貸し申さん。ツレ「もとより住みかも蘆の屋の、ツレ「たど  
草枕と思召せ。ツレ「しかも今宵は照りもせず、ツレ「曇も果ぬ春の夜の、ツレ「ツレ「臘月  
夜に、しく物もなき海士の苦、地謡八島に立てる高松の、昔の席は痛はしや。上歌地謡「さて  
慰みは浦の名の、さて慰みは浦の名の、群れるる田鶴を御覽ぜよ。などか雲居に歸らざ  
らん。旅人の故郷も都と聞けばなつかしや。われらも元はとて、やがて涙にむせびけり。  
やがて涙にむせびけり。

似合はぬ所望一  
僧の身として戦  
の話を望めばな  
り

いでたち一裝束  
者背長一鏡  
鞍笠一鞍轡とも  
いふ  
一院一後白河上  
皇  
言葉戦ひ一敵身  
方罵り合ふこと

平家の方にも云  
云一前の景清と  
對照すべし

ワキ訓「いかに申し候。何とやらん似合はぬ所望にて候へども、いにしへ此所は、源平の合戦の衝と承りて候。よもすがら語つて御聞かせ候へ。レテ訓「やすき間の事かたつて聞かせ申し候べし。語いで其頃は元暦元年三月十八日の事なりしに、平家は海の面一町ばかりに舟を浮め、源氏は此汀に打ち出で給ふ。大將軍の御いでたちには、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の御著背長、鎧ふんばり鞍笠につよ立ちあがり、一院の御使、源氏の大将檢非違使五位の尉、源の義經と、謠名のり給ひし御骨がら、あつばれ大將やと見えし、今のやうに思ひ出でられて候。ツレ謠「其時平家の方よりも、言葉戦ひ事終り兵船一艘漕ぎよせて、波打際に下り立つて、陸の敵を待ちかけしに、レテ訓「源氏の方にもつどく兵五十騎ばかり、中にも三保の谷の四郎と名のつて、眞先かけて見えし處に、ツレ謠「平家の方にも悪七兵衛景清と名のり、三保の谷を目懸け戦ひしに、レテ訓「彼三保の谷は其時に、太刀打ち折つて力なく、すこし汀に引き退きしに、ツレ謠「景清追つかけ三保の谷が、レテ訓「著たる兜の鉦を搦んで、ツレ謠「後へ引けば三保の谷も、レテ謠「身を遁れんと前へ引く。

能登殿一能登守  
敏經

朝倉や一天智天皇の御製に「朝倉や木の丸殿に我居れば名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ」

義經一名のるとも許し常の神世と意を續けたり

ツレ謠「互にえいやと、レテ謠「引く力に、地謠「鉢附の板より引きちぎつて、左右へくわつとぞ退きにける。是を御覽じて判官、御馬を汀に打ち寄せ給へば、佐藤繼信、能登殿の矢先にかよつて、馬より下にどうと落つれば、舟には菊王も討たれければ、ともにあはれと思しけるか、舟は沖へ陸は陣に、相引に引く汐の、あとは関の聲たえて、磯の浪松風ばかりの、音寂しくぞなりにける。

ロンギ地謠「ふしぎなりとよ海士人の、あまり委しき物語、其名を名のり給へや。レテ謠「我名を何と夕浪の、引くや夜汐も朝倉や、木の丸殿にあらばこそ、名のりをしても行かまし。地謠「けにや言葉を聞くからに、其名ゆかしき老人の、レテ謠「昔を語る小忌衣。地謠「頃しも今は、レテ謠「春の夜の、地謠「潮の落つる曉ならば、修羅の時になるべし。其時は我名や名のらん。たとひ名のらすとも名のるとも、義經の浮世の、夢ばし覺まし給ふなよ。夢ばし覺まし給ふなよ。(中人)



孫花云々傳燈  
録の落花上  
枝破鏡不重照  
の意  
業因一罪業の因

えつる、上歌謡 聲も更け行く浦風の、聲も更け行く浦風の、松が根枕 軟てよ、思ひをの  
ぶる 苦席、かさねて夢を待ちちるたり。かさねて夢を待ちちるたり。  
後シテ謡「落花枝にかへらず、破鏡ふたよび照らさず。然れどもなほ妄執の瞋恚とて、鬼神  
魂魄の境界にかへり、我と此身を苦しめて、修羅の衝に寄り来る波の、淺からざりし業  
因かな。

機弓一機の木に  
て造れる弓の本  
末よりもとの身  
と破けたり

ワキ謡「ふしぎやな早 曉にもなるやらんと、思ふ寢覺の枕より、甲冑を帶し見え給ふは、  
もし判官にてましますか。シテ謡「我義經の幽霊なるが、瞋恚に引かるよ妄執にて、猶西海  
の浪に漂ひ、誦 生死の海に沈淪せり。ワキ謡「おろかやな心からこそ生死の、海とも見ゆれ  
眞如の月の、シテ謡「春の夜なれど曇りなき、心も澄める今宵の空。ワキ謡「昔を今に思ひ出  
づる、シテ謡「舟と陸との合戦の道、ワキ謡「所からとて、シテ謡「忘れえぬ、上歌謡「武士の、八  
島に入るや機弓の、八島に入るや機弓の、元の身ながら又こよに、弓箭の道は迷はぬに、迷  
けひるぞや生死の、海山を離れやらで、歸る八島の恨めしや。とにかくに執心の、残り

の海の深き夜に、夢物語申すなり。夢物語申すなり。

クリ地謡「忘れぬものを閻浮の故郷に、去つて久しき年波の、夜の夢路に通ひきて、修羅道の  
有様あらはすなり。シテ、サシ謡「思ひぞ出づる昔の春、月も今宵にさへかへり。地謡「本の渚  
はこよなれや。源平互に矢先を揃へ、舟を組み駒を並べて、打ち入れ打ち入れ足なみに、  
轡を浸して攻め戦ふ。シテ謡「其時何とかしたりけん、判官弓を取り落し、浪にゆられて  
流れしに、地謡「其をりしもは引く汐にて、遙に遠く流れゆくを、シテ謡「敵に弓を取られじ  
と、駒を浪間におよがせて、敵船近くなりし程に、地謡「敵は是を見しよりも、船をよせ  
熊手にかけて、既に危く見え給ひしに、シテ謡「されども熊手を切りはらひ、終に弓を取り  
返し、もとの渚に打ちあがれば、地謡「其時兼房申すやう、口惜しの御振舞やな、渡邊にて  
景時か申しよも、是にてこそ候へ。たとひ千金を延べたる御弓なりとも、御命には換へ  
給ふべきかと、涙を流し申しければ、判官これを聞しめし、いやとよ弓を惜むにあらす、  
クセ義經源平に、弓箭を取つて私なし、然れども、佳名は未だ半ならず、されば此弓を

兼房一増尾十郎  
權守兼房  
渡邊にて云々  
源平景時と渡邊  
の論のこと

智者云々一論語を引く  
後記一後世の記録のこと歴史なり

敵に取られ義経は、小兵なりといはれんは、無念の次第なるべし。よしそれ故に討たれんは、力なし義経が、運の極めと思ふべし。さらすは敵に渡さじとて、浪に引かる弓取の、名は末代にあらすやと、語り給へば兼房さて其外の人までも、皆感涙を流しけり。  
レテ謡「智者は惑はず、地謡「勇者は恐れずの、やたけ心の梓弓、敵には取り傳へじと、惜むは名のため、惜まぬは一命なれば、身を捨ててこそ後記にも、佳名を留むべき、弓筆の跡なるべけれ。

レテ謡「又修羅道の関の聲、地謡「矢叫びの音震動せり。レテ謡「今日の修羅の敵は誰ぞ。なに能登の守教経とや、あら物々しや、手竝は知りぬ、誰思ひぞ出づる壇の浦の、地謡「其船軍今は早、其船軍今は早、闇浮にかへる生死の、海山一同に震動して、舟よりは関の聲、レテ謡「陸には波の楯、地謡「月に白むは、レテ謡「劔の光、地謡「潮にうつるは、レテ謡「兜の星の影、地謡「水や空、空ゆくもまた雲の波の、撃ち合ひ刺し違ふる、船軍の掛引、浮き沈むとせし程に、春の夜の浪より明けて、敵と見えしは群れるる鷗、関の聲と聞えしは、浦

風なりけり。高松の浦風なりけり。高松の朝嵐とぞなりにける。

鸚鵡小町

梗— 小野の小町老衰の後、勅に應じて鸚鵡返し和歌を詠する  
概— ことを作る。老女物とて重き能柄の一つなり。

シテ 小野小町 ワキ 大納言行家

新大納言—末座  
の大納言をいふ  
歌鳥の道—和歌

關寺—逢坂の關  
の東  
六ツの巻—六道  
のこと  
粟穂—あかざ  
凍梨—老人の膚  
を喩ふ

ワキ「是は陽成院に仕へ奉る新大納言行家にて候。扱も我君敷島の道に御心を懸けられ、普く歌を撰ぜられ候へども、敬慮に叶ふ歌なし。ことに出羽の國小野の良實が娘に小野の小町、彼はならびなき歌の上手にて候が、今は百年の姥となりて、關寺邊に在る由聞し召し及ばれ、帝より御憐みの御歌を下され候。其返歌により、重ねて題を下すべきとの宣旨に任せ、只今關寺邊小野の小町が方へと急ぎ候。  
シテ一壁通「身は一人、我は誰をか松坂や、四の宮河原四つの辻、いつ又六つの巷ならん。サレむかしは芙蓉の花たりし身なれども、今は藜藿の草となる。顔ばせは憔悴と衰へ、膚は凍梨の梨の如し。杖つくならでは力もなし。人を恨み身をかこち、泣いつ笑うつ安か

かちらざりせば  
—後拾遺集に  
「見る度に鏡の  
影のつちきかな  
かちらざりせば  
かちらざりま  
し」とあり王昭  
君を詠める歌な  
り

長橋—危き意上  
りつれなき命と  
續く

らねば、物狂ひと人は言ふ。上歌さりとては、捨てぬ命の身に添ひて、捨てぬ命の身に添ひて、面影に九十九髪、かよらざりせばかよらじと、昔を戀ふる忍麻の、夢は寐覺の長き夜を、飽きはてたりな我心。飽きはてたりな我心。  
ワキ「如何に是なるは小町にてあるか。シテ「見奉れば雲の上人にてまします。小町と承り候かや何事にて候ぞ。ワキ「さて此程は何くを住家と定めけるぞ。シテ「誰留むるとはなけれども、只關寺邊に日數を送り候。ワキ「實に—關寺は、さすがに都遠からで、閑居には面白き所なり。シテ「前には牛馬の通路有つて、貴きも行き賤しきも過ぎ。ワキ「後には靈驗の山高うして、シテ「通しかも道もなく、ワキ「春は、シテ「春霞、上歌地通し立出で見れば深山邊の、立出で見れば深山邊の、梢にかよる白雲は、花かと見えて面白や、松風も匂ひ、枕に花散りて、それとばかりに白雲の、色香面白き景色かな。北に出づれば湖の、志賀辛崎の一つ松は、身の類ひなる物を、東に向へば有難や、石山の觀世音、瀬田の長橋は狂人の、つれなき命の、かよるためしなるべし。

涙の關寺一涙の  
涙き歌へぬ意を  
掛く  
仙洞一院の御所

古き流れを汲ん  
て一衣通姫の流  
のこと

レテ調「かくて都の戀しき時は、柴の庵に暫しと留むべき友もなければ、謡便梨の杖にすがり、謡都路に出でて物を乞ふ、調乞ひ得ぬ時は涙の關寺に歸り候。ワキ調「如何に小町、扱今も歌をよみ候べきか。レテ調「我いにしへ百家仙洞の交はりたりし時こそ、事によそへて歌をも詠みしが、今は花薄穂に出で初めて、霜のかよれる有様にて、浮世にながらふるばかりにて候。ワキ調「實に尤道理なり。帝より御憐みの御歌を下されて候。是々見候へ。レテ調「何と帝より御憐みの御歌を下されたと候や。あら有難や候。老眼と申し文字もさだかに見え分かず候。それにて遊ばされ候へ。ワキ調「さらば聞き候へ。レテ調「如何にも高らかに遊ばされ候へ。ワキ調「雲の上は、レテ調「雲の上は、ワキ調「雲の上は、有りし昔にかはらねど、見し玉だれの内やゆかしき。レテ調「あら面白の御歌や候。謡悲しやな古き流れを汲んで、水上を正すとすれど、歌詠むべしとも思はれず。調又申さぬ時は恐れなり。所詮此返歌を只一字にて申さう。ワキ調「不思議の事を申す者かな。それ歌は三十一字を連ねてだに、心の足らぬ歌もあるに、一字の返歌と申す事、謡是も狂氣の故やらん。

鸚鵡返し一人上  
り附られたる歌  
の口眞似して返  
歌すること  
旋頭歌一五七七  
を二度繰返した  
る歌  
折句一前の杜若  
に見ゆる唐衣の  
歌の如きもの  
誦詠一滑稽なる  
趣を含む古今  
集を見よ  
混本歌一卅一文  
字の末の七を名  
ける歌  
廻文歌一上下何  
れより讀みても  
同じ歌

レテ調「いや、ぞと云ふ文字こそ返歌なれ。ワキ調「ぞと云ふ文字とはさて如何に。レテ調「さらば帝の御歌を、詠吟せさせ給ふべし。ワキ調「不審ながらもさし上げて、謡雲の上は有りし昔にかはらねど、見し玉だれの内やゆかしき。レテ調「さればこそ内やゆかしきを引きのけて、内ぞゆかしきとよむ時は、小町がよみたる返歌なり。ワキ調「さて古もかよるためしの有るやらん。レテ調「なう鸚鵡返しと云ふ事は、上歌地謡「此歌の様を申すなり。帝の御歌を、ばひ参らせてよむ時は、天の恐も如何ならん。和歌の道ならば、神も許し在しませ。貴からずして高位に交はると云ふ事、たゞ和歌の徳とかや、たゞ和歌の徳とかや。ワキ調「それ歌の様を尋ぬるに、長歌短歌旋頭歌、折句誦詠混本歌、鸚鵡返し、廻文歌なり。レテ、サレ調「中んづ、鸚鵡返しと云ふ事、唐に一つの鳥あり、地謡「その名を鸚鵡と云へり。人の云ふ言葉を受けて、即ちおのが囀りとす。何ぞといへば何ぞと答ふ。鸚鵡の鳥の如くに、歌の返歌もかくの如くなれば、鸚鵡返しとは申すなり。ワキ調「にや歌の様、語るに附け、いにしへの、猶思はるよはかなさよ。されば來し方の、代々の集めの歌人の、其多く

和歌の六義一詩の六義即ち風賦比興類より採らへ歌へ歌なずたこと歌詠ひ歌の六つをいふたこと歌のためしにいつはりのなき世なりせばの歌を古今集の序に出せりこれ小町の歌として然か言へるか

葛葉の里一河内月にはめてじ一葉平の歌に「大方の月をもめてじこれぞこの積れば人の老となるもの」

ある中に、今の小町は、妙なる花の色好み、歌の様さへ女にて、只弱々とよむとこそ、家の書傳にも、しるし置き給へり。シテ謡「和歌の六義を尋ねしにも、地謡「小町が歌をこそ、たゞこと歌のためしに、引くのみか我ながら、美人の形も世に勝れ、餘情の花と作られ、桃花雨を帯び、柳髪風にたをやかなり。紫筭なほ動きほこり、梨花は名のみなりしかど、今憔悴と落ちぶれて、身體疲瘁する小町ぞ、あはれなりける。

ワキ詞「如何に小町、業平玉津島にての法樂の舞をまなび候へ。シテ謡「さても業平玉津島に参り給ふと聞えしかば、我も同じく参らんと、謡「都をばまだ夜をこめて稻荷山、葛葉の里も浦近く、和歌吹上にさしかより、地謡「玉津島に参りつよ、玉津島に参りつよ、業平の舞の袖、思ひめぐらす信夫摺、木賊色の狩衣に、大紋の袴の稜を取り、風折烏帽子召されつよ、シテ謡「和光の光玉津島、地謡「廻らす袖や波がへり。(舞)シテ謡「和歌の浦に汐満ち来ればかたをなみの、地謡「蘆邊をさして鶴鳴き渡る鳴き渡る。シテ謡「立つ名もよしなや忍び音の、地謡「立つ名もよしなや忍び音の、月には愛でじ、シテ謡「是ぞ此、地謡「積れば人の、

シテ謡「老となるものを、地謡「かほどに早き光の陰の、時人を待たぬ習ひとは白波の、シテ謡「あら戀しの昔やな。地謡「かくて此日も暮れ行くまよに、さらばと云ひて、行家都に歸りければ、シテ謡「小町も今は是までなりと、地謡「杖にすがりてよろくと、立ち別れ行く袖の涙、立ち別れ行く袖の涙も關寺の、柴の庵に歸りけり。

# 葛城

梗概

山伏、葛城山に登り、雪中、女に宿を借る事より、葛城の神の物語に及ぶ。昔、役行者吉野の金峰山と葛城山との間に岩橋を渡さんとし、神々を使役す。葛城の一言主神は其形醜きを恥ぢて、夜ならでは見えす。行者怒つて神を繫縛したりといふ古傳に基き、葛城の古歌を以て文飾とす。(四番目)

シテ 葛城の神(前は女) ワキ 山伏

羽黒山一羽前に在り山伏の修行する所 大峯一吉野の奥

ワキ次第「神の昔の跡とめて、神の昔の跡とめて、かづらき山に参らん。詞 是は出羽の羽黒山より出でたる山伏にて候。我此度大峯葛城に参らばやと存じ候。道行諸條懸の、袖の朝霜起臥の、袖の朝霜起臥の、岩根の枕松が根の、宿りも茂き嶺つどき、山又山を分け越えて、ゆけば程なく大和路や 葛城山につきにけり。葛城山につきにけり。ワキ詞「いそぎ候間、ほどなく葛城山に著きて候。あら笑止や、又雪のふり來りて候。こなれる木陰に立ちよらばやと思ひ候。

常陰一いつも日のさくぬ所 笠重吳山雪鞋香 楚地花一詩人玉 層に出でたる詩 山人の笠も云々 菅家の歌末句 谷の下道

シテ詞「なうくあれなる山伏は何方へ御通り候ぞ。ワキ詞「此方の事にて候か。御身はいかなる人やらん。シテ詞「是は此葛城山に住む女にて候。柴採る道の歸るさに、躰み馴れたる通路をさへ、雪のふぶきにかきくれて、家路もさだかにわきまへぬに、誦ましてや知らぬ旅人の、末いづくにか雪の山路に、迷ひ給ふはいたはしや。詞 見苦しく候へども、わらはが庵にて一夜を御あかし候へ。ワキ詞「うれしくも仰せ候物かな。今にはじめぬ此山の度々峯入して、通ひなれたる山路なれども、今の吹雪に前後を忘れて候に、御志ありがたうこそ候へ。誦さて御宿りはいづくぞや。シテ詞「此岨傳ひのあなたなる、谷の下庵みぐるしくとも、程ふる雪の晴間まで、御身をやすめ給ふべし。ワキ詞「さらば御供申さんと、夕べの山の常陰より、シテ誦「さらでも嶮しき岨傳ひを、ワキ誦「道しるべする山人の、ワキ誦「笠はおもし吳山の雪、鞋は香ばし楚地の花、上歌地誦「肩上の笠には、肩上の笠には、無影の月を傾け、擔頭の柴には、不香の花を手折りつと、歸る姿や山人の、笠も薪も埋もれて、雪こそくだれ谷の道を、たどりく歸りきて、柴の庵に著きにけり。柴の庵に

大和舞—大嘗會の儀式に行はるる舞曲  
しもとゆふ云々—古今集に出づ即ち大和舞の歌

著きにけり。  
ワヤ調「あら嬉しや候。今の雪に前後を忘れて候處に、こよひの御宿かへすぐも有りがたうこそ候へ。シテ調「あまりに夜寒に候程に、是なる標を解き亂し、火に焚きてあて參らせ候べし。ワヤ調「あらおもしろや標とは、此木の名にて候か。シテ調「うたてやな此葛城山の雪の内に、結ひあつめたる木々の梢を、標と知ろしめされぬは御心なきやうにこそ候へ。ワヤ調「あら面白やさては此、標と言ふ木は葛城山に、由緒ある木にて候よなう。シテ調「申すにや及ぶ古き歌の言葉ぞかし。標を結ひたる葛なるを、此葛城山の名に寄せたり。是大和舞の歌といへり。ワヤ調「けにくふるき大和舞の、歌の昔を思ひ出の、シテ調「をりから雪も、ワヤ調「降るものを、上歌地謡「しもとゆふ葛城山にふる雪は、葛城山にふる雪は、間なく時なく、思ほゆるかなと詠む歌の、言の葉添へて大和舞の、袖の雪も古き世の、よそにのみ、見し白雲や高間山の、峯の柴屋の夕煙、松が枝そへて焼かうよ。松が枝そへて焼かうよ。

葛城や木の間に  
光る云々—堀川院次郎百首兼昌の歌但し字句異同あり  
そみかくた—山伏をいふ

三熱の苦しき—  
日に三度熱き苦しみを受く

ワヤ調「葛城や、木の間にひかる稻妻は、山伏の打つ火かとこそ見れ。實にや世の中は、電光朝露石の火の、光の間ぞと思へたど、わが身のなけきをも、取り添へて、思ひ眞柴を焚かうよ。シテ調「捨人の昔の衣の色深く、地謡「法に心は墨染の、袖もさながら白妙の、雪にや色をそみかくたの、篠懸もさえまさる、標を集め柴を焚き、寒風を防ぐ葛城の、山伏の名にし負ふ、かたしく袖の枕して、身を休め給へや。御身を休め給へや。ワヤ調「あら嬉しや篠懸を乾して候ぞや。いそぎ後夜の勤を始めばやと思ひ候。シテ調「御勤めとは有難や。我に悩める心あり、御つとめのついでに祈り加持して賜り候へ。ワヤ調「そも御身に悩む事ありとは、何といひたる事やらん。シテ調「さなきだに女は五障の罪深きに、法のとがめの咒詛を負ひ、此山の名にしおふ、葛葛にて身をいまして、猶三熱の苦みあり、此身を助けてたび給へ。ワヤ調「そも神ならで三熱の、苦みといふことあるべきか。シテ調「はづかしながら古の、法の岩橋かけざりし、其とがめとて明王の、索にて身をいまして、今に苦しみ絶えぬ身なり。ワヤ調「是はふしぎの御事かな。さては昔の葛

明くるわびしき  
拾遺集に「岩  
橋の夜の奥も照  
ぬべし明くる俗  
しき高城の神」

城の、神の苦しみ盡きがたき、シテ誦「石は一つの神體として、ワヤ誦「葛葛のみかよる巖の、シテ誦「撫づとも盡きじ葛の葉、ワヤ誦「はひ廣ごりて、シテ誦「露に置かれ、ワヤ誦「霜に責められ起臥の、立居も重き岩戸の内、下歌地誦「明くるわびしき葛城の、神の五衰の苦しみあり、祈り加持してたび給へと、岩橋の末絶えて、神隠れにぞなりにける。神隠れにぞなりにける。(中入)

ワヤ上歌誦「岩橋の、昔の衣の袖そへて、昔の衣の袖そへて、法の筵のことはに、法味をなして夜もすがら、彼葛城の神ごころ、夜の行ひ聲すみて、一心敬禮。後シテ誦「われ葛城の夜もすがら、和光の影にあはられて、五衰の眠を無上正覺の月に覺まし、法性真如の寶の山に、法味に引かれて來りたり。よくく勤めおはしませ。  
ワヤ誦「ふしぎやな峨々たる山の常陰より、女體の神とおほしくて、玉のかんざし玉葛の、なほ懸けそへて葛かづらの、はひまとはるよ小忌衣、シテ誦「これ見たまへや明王の、索は斯かる身をいましめて、ワヤ誦「なほ三熱の神ごころ、シテ誦「年經る雪や、ワヤ誦「しもとのゆふ、

岩戸の舞—岩戸  
神樂  
面なや—面目無

地誦「葛城山の岩橋の、夜なれど月雪の、さもいちじるき神體の、みぐるしき顔ばせの、神姿ははづかしや。よしや吉野の山かづら、かけて通へや岩橋の、高天の原は是なれや、神樂歌はじめて、大和舞いざやかなでん。  
シテ誦「ふる雪の、しもと木綿花の白和幣、地誦「高天の原の岩戸の舞、高天の原の岩戸の舞、天のかぐ山も向ひに見えたり。月白く雪白く、いづれも白妙のけしきなれども、名に負ふかづらきの、神の顔がたち、面なやおもはゆや、恥かしやあさましや。あさまにもなりぬべし。あけぬ前にとかづらきの、あけぬ前にとかづらきの、夜の岩戸にぞ入り給ふ。岩戸の内に入り給ふ。



當麻

概 梗 當麻寺の曼陀羅の縁起を脚色す。即ち前は化尼女の二人あらはれ、後は中將姫現れて蓮糸もて曼陀羅を織りし故事を叙べ、佛徳を讚歎す。(五番目)

シテ 中將姫(前は老尼) ツレ 化尼  
ワキ 旅僧

ワキ次第誦「教うれしき法の門、教うれしき法の門、開くる道に出でうよ。詞是は念佛の行者にて候。我此度三熊野に参り、下向道に赴きて候。又是より大和路にかより、當麻の御寺に参らばやと思ひ候。道行誦程もなく、歸り紀の路の關越えて、歸り紀の路の關越えて、こや三熊野の岩田川、波も散るなり朝日影、夜晝わかぬ心地して、雲も其方に遠かりし、二上山の麓なる、當麻の寺に著きにけり。當麻の寺に著きにけり。  
シテ、サン誦「一念彌陀佛即滅無量罪とも説かれたり。ツレ誦「八萬諸聖教皆是阿彌陀とも有りけ

二上山一葛城山のつゞきにあり當麻の寺一大和

唱ふれば一廻上人の歌末句聲ばかりして、ナトしき道一極樂をいふ

五つの雲一女人の五障を雲に喻ふ  
雨夜の月の一玉葉集に「彌陀頼む人は雨夜の月なれや雲はれねども西へこそ行け  
末の法云々一慈恩大師の語に末法萬年餘經悉滅云々とあるに據る

に候。シテ誦「釋迦は遣り、ツレ誦「彌陀は導く一筋に、シテ、ツレ誦「心ゆるすな南無阿彌陀佛と、シテ一聲誦「唱ふれば、佛も我もなかりけり。ツレ誦「南無阿彌陀佛の聲ばかり、シテ誦「すしき道は、シテ、ツレ誦「頼もしや、シテ、ツレ次第誦「濁にしまぬ蓮の糸、濁にしまぬ蓮の糸の、五色にいかで染みぬらん。

シテ、サン誦「ありがたや諸佛の誓ひ様々なれども、わきて超世の悲願とて、迷ひの中にも殊に猶、シテ、ツレ誦「五つの雲は晴れやらぬ、雨夜の月の影をだに、知らぬ心の行くへをや、西へとばかり頼むらん、實にや頼めば近き道を、何遙々と思ふらん。下歌するの世に、迷ふ我等が爲なれや、上歌説き遺す。御法はこれぞ一聲の、御法はこれぞ一聲の、彌陀の教へを頼ますは、末の法、萬年々經るまでに、餘經の法はよもあらじ。たましく此生に浮ますは、又いつの世を松の戸の、明くれば出でて暮るとまで、法の場に交るなり、御法の場に交るなり。

ワキ詞「如何に是なる方々に尋ね申すべき事の候。シテ詞「何事にて候ぞ。ワキ詞「是は當麻の御

曼陀羅一淨土の  
有様を圖に繪出  
せるをいふ  
法の潤ひ一佛法  
を雨霖に喩ふ

寺にて候か。シテ詞「さん候當麻の御寺とも申し、又當麻寺とも申し候。ツレ謡「又是なる池は蓮の糸を、濯ぎて清めし其故に、染殿の井とも申すとかや。シテ謡「あれは當麻寺、ツレ謡「是は染寺、シテ謡「又此池は染殿のシテ、ツレ謡「色々様々所々の、法の見佛聞法ありとも、それをいさや白糸の、只一筋ぞ一心不亂に、南無阿彌陀佛。ワキ謡實に有難き人の言葉、即ち是こそ彌陀一教なれ。詞さて又是なる花櫻、常の色には變りつゝ、是も故ある寶樹と見えたり。ツレ謡「實によく御覽じ分けられたり。あれこそ蓮の糸を染めて、シテ詞「掛け乾されし櫻木の、花も心の有る故に、謡「蓮の色に咲くとも云へり。ワキ謡「中々なるべし本よりも、草木國土成佛の、色香に染める花心の、シテ謡「法の潤ひ種添へて、ワキ謡「濁にしまぬ蓮の糸を、シテ謡「濯ぎて清めし人の心の、ワキ謡「迷ひを乾すは、シテ謡「緋櫻の、上歌謡「色はえて、掛けし蓮の糸櫻、掛けし蓮の糸櫻、花の錦の經緯に、雲の絶間に晴れ曇る、雪も、緑も、紅も、只一聲の誘はんや、西吹く秋の風ならん、西吹く秋の風ならん。ワキ詞「猶々當麻の曼陀羅の謂れ委しく御物語り候へ。ツレ謡「そもく此當麻の曼陀羅と

横佩の右大臣一  
淡海公の孫武智  
磨の子

念佛三昧一熱心  
に念佛すること  
忘れ水一野中の  
流をいふ  
座禪圓月の窓一  
座禪して心中安  
念を去るを圓月  
に譬ふ  
呼子鳥一古今集  
に「遠近のたづ  
きも知らぬ山中  
に覺東無くも呼  
子鳥かなし

申すは、人皇四十七代の帝、廢帝天皇の御宇かとよ、横佩の右大臣豐成と申しと人、シテサシ謡「その御息女中將姫、此山に籠り給ひつゝ、地謡「稱讚淨土經、毎日讀誦し給ひしが、心中に誓ひ給ふやう、願はくは正身の彌陀來迎あつて、我に拜まれおはしませと、一心不亂に觀念し給ふ。シテ謡「然らずは畢命を期として、地謡「此草庵を出でじと誓つて、一向に念佛三昧の定に入り給ふ。クセ所は山陰の、松吹く風も涼しくて、さながら夏を忘れ水の、音も絶々に、心耳を澄ます夜もすがら、稱名觀念の床の上、座禪圓月の窓の内、窓々と有る折節に、一人の老尼の、忽然と來りたよすめり。是は如何なる人やらんと、尋ねさせ給ひしに、老尼答へて宣はく、誰とはなどや愚なり、呼べばこそきたりたれと、仰せられける程に、中將姫はあきれつゝ、シテ謡「我は誰をか呼子鳥、地謡「たづきも知らぬ山中に、聲立つる事とは、南無阿彌陀佛の稱へならで、又他事もなきものをと、答へさせ給ひしに、それこそ我名なれ、聲をしるべに來れりと、宣へば姫君も、さては此願成就して、正身の彌陀如來、實に來迎の時節よと、感涙肝に銘じつゝ、綺羅衣の

時正—彼岸の中  
日

御袖もしをるばかりに見え給ふ。

ロンギ地誦「實にや貴き物語、即ち彌陀の教ぞと、思ふに付けて有難や。レテ、ツレ誦「今宵しも、二月中の五日にて、しかも時正の時節なり。法事をなさんため、今此寺に來りたり。地誦「法事のため來るとは、そもや如何なる御事ぞ。レテ、ツレ誦「今は何をか包むべき、其古への化尼、化女の、地誦「夢中に現れ來れりと、レテ、ツレ誦「言ひもあへねば、地誦「光さして、花降り異香薫じ、音樂の聲すなり。恥かしや旅人よ、暇申して歸る山の、二上之嶽とは二上之、山とこそ人はいへど、誠は此尼が、上りし山なる故に、尼上の嶽とは申すなり。老の坂を上り上る、雲に乗りて上りけり。紫雲に乗りて上りけり。(中入)  
ワキ誦「かく有難き御事なれば、重ねて奇特を拜まんと、上歌誦「いひもあへねば不思議やな、いひもあへねば不思議やな、妙音聞え光さし、歌舞の菩薩の目のあたり、現はれ給ふ不思議さよ。現はれ給ふ不思議さよ。

後シテ誦「只今夢中に現はれたるは、中將姫の精魂なり。我婆婆に在りし時、稱讚淨土經、

世界の衆—清淨  
世界佛菩薩の群  
に入る  
盡虚空界云々—  
往生要集の文を  
引く

爲一切世間云々  
—阿彌陀經の文  
句

後夜—今の夜二  
時  
さをなぐるま—  
舟の棹より棹を  
投ぐると言掛く

朝夕時々おととに怠おこらず、信心しんじん誠まことなりし故に、微妙安樂みせうあんらくの潔界けつがいの衆しゆとなり、本覺ほんがく眞如しんにょの圓月えんげつに座ざせり。然れどもこゝを去る事遠とほからずして、法身ほふしん却來きやくらいの法味ほふみをなせり。地誦「有難ありがたや、盡じん虚空界こくうがいの莊嚴しょうげんは、眼まなこは雲路うんろにかよき、レテ誦「轉妙法輪てんめうほふりんの音聲おんじやうは、聽寶利ちやうほりの耳みみに充みてり。地誦「蕭然せうぜんとある曉あかつきの心、レテ誦「眞まことに涼すずしき道みちに引ひかるゝ光陰くわういんの心、地誦「惜おぼしむべしやな、惜おぼしむべしやな、時は人をも待たざるものを。すなはちこゝぞ、唯心ゆいしんの淨土經じやうとじやうきやう、戴たいきまつれや、戴たいきまつれや。攝取せつしゆ不捨ふしや、レテ誦「爲一切世間ゐいっさいせけん、說此せつし難信なんしん、地誦「之法ほふせ是爲しんなん堪難かんなん、レテ誦「實じつにも此法このほふ甚はなはだしければ、地誦「信しんずる事ことも難かたかるべしとや。レテ誦「唯た頼ため、地誦「頼ためや頼ため、レテ誦「慈悲じひ加か祐う、地誦「令心りやうしん不亂ふらん、レテ誦「亂らんるなよ、地誦「亂らんるなよ。レテ誦「十じふ聲せいも、地誦「一聲いっせいぞ有難ありがたや。(早舞)

シテ誦「後夜の鐘かねの音ね、地誦「後夜の鐘かねの音ね覺鐘かくしやうの響ひび、稱名しょうみやうの妙音めうおんの、見佛けんぶつ聞法もんぽうの色いろ々々の法ほふ事じ、實じつにも普あまねき光くわう明みやう遍照へんじやう、十方じつぱうの衆生しゆじやうを唯ただ西方さいぱうに迎むかへ行く、御法みほふの舟ふねの水みづ刷な棹さし、御法みほふの舟ふねのさをなぐるまの、夢ゆめの夜よはほのくとぞなりにける。

内十二

海士

梗一 藤原房前生母の海士の跡を弔ひ、その幽霊に會ひ、玉取の故  
概一 事を語るを聴く事を作る。志度寺縁起に據る。(五番目)

前シテ 海士の靈 後シテ 龍女  
シテツレ 房前大臣 ワキ 從者

立<sup>ワキ</sup>次<sup>ツレ</sup>第<sup>シテ</sup>通<sup>ツレ</sup>出<sup>ツレ</sup>づる<sup>ツレ</sup>ぞ<sup>ツレ</sup>名<sup>ツレ</sup>残<sup>ツレ</sup>三<sup>ツレ</sup>日<sup>ツレ</sup>月<sup>ツレ</sup>の、出<sup>ツレ</sup>づる<sup>ツレ</sup>ぞ<sup>ツレ</sup>名<sup>ツレ</sup>残<sup>ツレ</sup>三<sup>ツレ</sup>日<sup>ツレ</sup>月<sup>ツレ</sup>の、都<sup>ツレ</sup>の<sup>ツレ</sup>西<sup>ツレ</sup>に<sup>ツレ</sup>急<sup>ツレ</sup>が<sup>ツレ</sup>ん。ワキ、サ<sup>ツレ</sup>ト<sup>ツレ</sup>馬<sup>ツレ</sup>天<sup>ツレ</sup>  
地<sup>ツレ</sup>の<sup>ツレ</sup>開<sup>ツレ</sup>け<sup>ツレ</sup>し<sup>ツレ</sup>惠<sup>ツレ</sup>久<sup>ツレ</sup>方<sup>ツレ</sup>の、天<sup>ツレ</sup>の<sup>ツレ</sup>兒<sup>ツレ</sup>屋<sup>ツレ</sup>根<sup>ツレ</sup>の<sup>ツレ</sup>御<sup>ツレ</sup>讓<sup>ツレ</sup>、ツレ<sup>ツレ</sup>馬<sup>ツレ</sup>房<sup>ツレ</sup>前<sup>ツレ</sup>の<sup>ツレ</sup>大<sup>ツレ</sup>臣<sup>ツレ</sup>と<sup>ツレ</sup>は<sup>ツレ</sup>我<sup>ツレ</sup>事<sup>ツレ</sup>な<sup>ツレ</sup>り。さ<sup>ツレ</sup>て<sup>ツレ</sup>も<sup>ツレ</sup>み<sup>ツレ</sup>づ<sup>ツレ</sup>か  
ら<sup>ツレ</sup>が<sup>ツレ</sup>御<sup>ツレ</sup>母<sup>ツレ</sup>は、讚<sup>ツレ</sup>州<sup>ツレ</sup>志<sup>ツレ</sup>度<sup>ツレ</sup>の<sup>ツレ</sup>浦<sup>ツレ</sup>、房<sup>ツレ</sup>前<sup>ツレ</sup>と<sup>ツレ</sup>申<sup>ツレ</sup>す<sup>ツレ</sup>所<sup>ツレ</sup>に<sup>ツレ</sup>て、空<sup>ツレ</sup>く<sup>ツレ</sup>な<sup>ツレ</sup>り<sup>ツレ</sup>た<sup>ツレ</sup>ま<sup>ツレ</sup>ひ<sup>ツレ</sup>ぬ<sup>ツレ</sup>と、承<sup>ツレ</sup>り<sup>ツレ</sup>て<sup>ツレ</sup>候<sup>ツレ</sup>へ<sup>ツレ</sup>ば、  
急<sup>ツレ</sup>ぎ<sup>ツレ</sup>彼<sup>ツレ</sup>の<sup>ツレ</sup>所<sup>ツレ</sup>に<sup>ツレ</sup>下<sup>ツレ</sup>り、追<sup>ツレ</sup>善<sup>ツレ</sup>を<sup>ツレ</sup>も<sup>ツレ</sup>な<sup>ツレ</sup>さ<sup>ツレ</sup>ば<sup>ツレ</sup>や<sup>ツレ</sup>と<sup>ツレ</sup>思<sup>ツレ</sup>ひ<sup>ツレ</sup>候。ワキ<sup>ツレ</sup>馬<sup>ツレ</sup>習<sup>ツレ</sup>は<sup>ツレ</sup>ぬ<sup>ツレ</sup>旅<sup>ツレ</sup>に<sup>ツレ</sup>奈<sup>ツレ</sup>良<sup>ツレ</sup>阪<sup>ツレ</sup>や、か<sup>ツレ</sup>へ<sup>ツレ</sup>り<sup>ツレ</sup>み<sup>ツレ</sup>か  
さ<sup>ツレ</sup>の<sup>ツレ</sup>山<sup>ツレ</sup>隱<sup>ツレ</sup>す、春<sup>ツレ</sup>の<sup>ツレ</sup>霞<sup>ツレ</sup>ぞ<sup>ツレ</sup>恨<sup>ツレ</sup>め<sup>ツレ</sup>し<sup>ツレ</sup>き。上<sup>ツレ</sup>歌<sup>ツレ</sup>三<sup>ツレ</sup>笠<sup>ツレ</sup>山<sup>ツレ</sup>今<sup>ツレ</sup>ぞ<sup>ツレ</sup>榮<sup>ツレ</sup>え<sup>ツレ</sup>ん<sup>ツレ</sup>此<sup>ツレ</sup>岸<sup>ツレ</sup>の、今<sup>ツレ</sup>ぞ<sup>ツレ</sup>榮<sup>ツレ</sup>え<sup>ツレ</sup>ん<sup>ツレ</sup>此<sup>ツレ</sup>岸<sup>ツレ</sup>の、南<sup>ツレ</sup>の

天<sup>ツレ</sup>兒<sup>ツレ</sup>屋<sup>ツレ</sup>根<sup>ツレ</sup>命<sup>ツレ</sup>一<sup>ツレ</sup>藤<sup>ツレ</sup>  
原<sup>ツレ</sup>氏<sup>ツレ</sup>の<sup>ツレ</sup>祖<sup>ツレ</sup>神<sup>ツレ</sup>  
追<sup>ツレ</sup>善<sup>ツレ</sup>一<sup>ツレ</sup>死<sup>ツレ</sup>者<sup>ツレ</sup>を<sup>ツレ</sup>甲<sup>ツレ</sup>  
上<sup>ツレ</sup>事<sup>ツレ</sup>  
今<sup>ツレ</sup>ぞ<sup>ツレ</sup>榮<sup>ツレ</sup>え<sup>ツレ</sup>ん<sup>ツレ</sup>！  
一<sup>ツレ</sup>補<sup>ツレ</sup>陀<sup>ツレ</sup>落<sup>ツレ</sup>の<sup>ツレ</sup>雨<sup>ツレ</sup>の<sup>ツレ</sup>  
岸<sup>ツレ</sup>に<sup>ツレ</sup>立<sup>ツレ</sup>立<sup>ツレ</sup>て<sup>ツレ</sup>今<sup>ツレ</sup>  
ぞ<sup>ツレ</sup>榮<sup>ツレ</sup>え<sup>ツレ</sup>ん<sup>ツレ</sup>北<sup>ツレ</sup>の<sup>ツレ</sup>浦<sup>ツレ</sup>  
波<sup>ツレ</sup>一<sup>ツレ</sup>春<sup>ツレ</sup>日<sup>ツレ</sup>の<sup>ツレ</sup>神<sup>ツレ</sup>詠<sup>ツレ</sup>  
なり<sup>ツレ</sup>と<sup>ツレ</sup>傳<sup>ツレ</sup>ふ

日の本のはじめ  
淡路島を生み給  
へるをいふ

海士の刈る古  
今集の海士の刈  
る藻にすむ嵐の  
われかちとの歌  
を引く  
内外の山―内宮  
外宮の事

何をみるめ―見  
る目より海松に  
貫掛く

海に急がんと、行けば程なく津の國の、こや日の本のはじめなる、淡路のわたり末近く、  
鳴門の沖に音するは、泊り定めぬ海士小舟、とまり定めぬ海士小舟。御急ぎ候ほどに、  
是は早讃州志度の浦に御著きにて御座候。又あれを見れば男女の差別は知らず一人來  
り候。彼の者を御待ち有つて、この所の謂を委しく御尋ねあらうするにて候。

シニ一雙謡海士の刈る、藻に栖む蟲にあらねども、われから濡らす袂かな。サレは讃州志  
度の浦、寺近けれども心なき、あまのよ里の海人にて候。けにや名に負ふ伊勢をの海士  
は夕波の、内外の山の月を待ち、濱萩の風に秋を知る。また須磨の海士人は鹽木にも、若  
木の櫻を折り持ちて、春を忘れぬたよりもあるに、此浦にては慰みも、名のみあまのの  
原にして、花の咲く草もなし。何をみるめ刈らうよ。下歌刈らでも運ぶ濱川の、刈らても  
運ぶ濱川の、鹽海かけて流れ蘆の、世を渡る業なれば、心なしともいひがたき、あまの  
の里に歸らん。あまのの里に歸らん。

ワキ詞「いかに是なる女 おことは此浦の海士にてあるか。レテ詞「さん候 此浦のかづきの

かづきの海士！  
波を漕りて海底  
の物を探る海士  
のこと

海士にて候。ワキ詞「かづきの海士ならば、あの水底のみるめを刈りて參らせ候へ。レテ詞「痛  
はしや旅づかれ、飢にのぞませ給ふかや。わが住む里と申すに、かほどいやしき田舎の  
はてに、謡不思議や雲の上人を、みるめ召され候へ。詞刈るまでもなし此みるめを召さ  
れ候へ。ワキ詞「いやくさやうの爲にてはなし。あの水底の月を御覽するに、海松藻繁り  
て障りとなれば、刈り除けよとの御説なり。レテ詞「さては月のため刈り除けよとの御説か  
や。昔もさるためしあり。明珠をこの沖にて龍宮へ取られしを、謡かづきあけしも此浦  
の、地謡「天みつ月も満潮の、天みつ月も満潮の、海松藻をいざや刈らうよ。

ワキ詞「暫く。何と明珠をかづきあけしも此浦の海士にてあると申すか。レテ詞「さん候 此  
浦の海士にて候。またあれなる里をばあまのの里と申して、かの海士人の住み給ひし  
所にて候。又是なる島は、彼の珠を取り上げ始めて見そめしによつて、新しき珠島と書  
いて、新珠島と申し候。ワキ詞「さて其玉の名をば何と申しけるぞ。レテ詞「玉中に釋迦の像ま  
します、いづかたより拜み奉れども同じ面なるによつて、面を向ふに背かずと書いて、

興福寺一春日山の麓にあり不比等の建立

便なやーいとほしの意  
恵開けし一繁榮せること  
あまり申せば一海士を言掛く

尋木一母を言掛く

面向不背の珠と申し候。ツヤ蓋「かほどの寶を何とてか、漢朝よりも渡しけるぞ。レテ蓋「今の大臣淡海公の御妹は、もろこし高宗皇帝の后に立たせ給ふ。されば其御氏寺なればとて、興福寺へ三つの寶を渡さるよ。華原碧酒瀆石、面向不背の玉、二つの寶は京著し、明珠はこの沖にて龍宮へ取られしを、大臣御身をやつし此浦に下り給ひ、いやしき海士少女と契をこめ、ひとりの御子を設く。いまの房前の大臣是なり。ツレ蓋「やあ是こそ房前の大臣よ。あらなつかしの海士人や。なほく語り候へ。レテ蓋「あら何ともなや、今まではよその事とこそ思ひつるに、さては御身の上にて候ひけるぞや、あら便なや候。ツレ蓋「みづから大臣の御子と生れ、恵開けし藤の門。されども心にかよる事は、此身残りて母知らず。ある時傍臣語りて曰く、忝くも御母は、讚州志度の浦、房前のあまり申せば恐ありとて言葉を残す、さては賤しき海士の子、賤の女の腹に宿りけるぞや。上歌地蓋、よしそれとても尋木に、よしそれとても尋木に、しばし宿るも月の光、雨露の恩にあらずやと、思へば尋ね來りたり。あらなつかしの海士人やと、御涙を流し給へば、レテ蓋「けに

朽たす一汚すこと

海漫々一白樂天  
詩に海漫々直下  
無底旁無邊雲  
懸燈後量探處人  
傳中有三神山

心なき海士衣、地蓋「さらでもぬらす我が袖を重ねてしをれとや。かたじけなの御事や、かかる貴人の、賤しき海士の胎内に、宿り給ふも一世ならず。たとへば日月の、涙にうつりて、光陰を増す如くなり。われらも其海士の、子孫と答へ申さんは、事もおろかや我が君の、ゆかりに似たり紫の、藤咲く門の口を閉ぢて、いはじや水鳥の、御主の名をば朽たすまじ。  
ツヤ蓋「とてもものに彼玉をかづきあけし所を、御前にてそと學うで御目につけ候へ。レテ蓋「さらばそと學うで御目につけ候へし。其時海士人申すやうもし此玉を取り得たらば、此御子を世繼の御位になし給へと申しよかば、仔細あらじと領承し給ふ。さては我子ゆゑに捨てん命、露ほども惜しからじと、千尋の繩を腰につけ、もし此玉を取り得たらば、此繩を動かすべし、其時人々力を添へ、引きあげ給へと約束し、蓋「一のつ利劍を抜きもつて、地蓋「かの海底に飛び入れば、空は一つに雲の波、煙の波を凌ぎつよ、海漫々と分け入りて、直下と見れども底もなく、邊も知らぬ海底に、そも神變はいさ知らず、取り

大徳の利劍一親  
普力を働に響ふ

得ん事は不定なり。かくて龍宮に到りて、宮中を見れば其高さ、三十丈の玉塔に、かの珠を籠めおき、香花を供へ守護神は、八龍並み居たり。其外悪魚鰐の口、のがれがたしや我命、さすが恩愛の、故郷の方ぞ戀しき。あの波のあなたにぞ、我子はあるらん、父大臣もおはすらん、さるにても此まよに、別れはてなん悲しさよと、涙ぐみて立ちしが、又思ひ切りて手を合はせ、南無や志度寺の観音薩埵の、力をあはせてたび給へとて、大悲の利劍を額にあて、龍宮の中に飛び入れば、左右へばつとぞ退いたりける其ひまに、寶珠を盗みとつて、逃げんとすれば守護神追つかく。かねて計みし事なれば、持ちたる劍を取り直し、乳の下をかき切り玉を押しこめ、劍を捨てよぞ伏したりける。龍宮のならひに死人を思めば、あたりに近づく悪龍なし。約束の繩を動かせば、人々よろこび引きあけたりけり。玉は知らず海士人は、海上に浮び出でたり。

レテ謡「かくて浮は出でたれども、悪龍の業と見えて、五體もつとかず朱になりたり。珠もいたづらになり、主も空しくなりけるよと、大臣歎き給ふ。其時息の下より申すやう、我

明けて悔しき  
夜開けて母子相  
別るるをいふ

黄壤一黄泉

寂寞無人聲一法  
華經法師品の文  
句  
五逆の達多一提  
婆達多の五逆罪  
を犯しむこと  
天王記別を蒙り  
に入ること

乳のあたりを御覽せとあり。けにも劍のあたりたる跡あり、其なかより光明赫奕たる玉を取り出す。さてこそ御身も約束のごとく、此浦の名によせて、房前の大匠とは申せ。今は何をか包むべき、是こそ御身の母海士人の幽霊よ。地謡「此筆の跡を御覽じて、不審をなさで弔へや。今は歸らんあだ波の、夜こそ契れ夢人の、明けて悔しき浦島が、親子のちぎり朝潮の、波の底に沈みけり。立つ波の下に入りけり。(中入)

ワヤ詞「いかに申し上げ候。あまりに不思議なる御事にて候ほどに、御手跡を披いて御覽せられうするにて候。ツレ謡「さては亡母の手跡かと、ひらきて見れば、魂黄壤に去つて一十三年、骸を白沙に埋んで、日月の算を經、冥路昏々たり、我を弔ふ人なし、君孝行たらばわが冥闇をたすけよ。けにそれよりは十三年、地謡「さては疑ふ所なし。いざ弔はん此寺の、志ある手向草、花の蓮の妙經、色々の善をなし給ふ、色々の善をなし給ふ。地謡「寂寞無人聲、後シテ謡「あらありがたの御弔ひやな。此御經にひかれて、五逆の達多は天王記別を蒙り、八歳の龍女は、南方無垢世界に生を受くる。なほく、展讀し給ふ

深達罪福相云々  
法華經提持品の  
文句

八講法華經八  
卷を毎日朝夕一  
巻宛講ずる佛事

べし。地誦「深達罪福相、遍照於十方、  
レテ誦「微妙淨法身、具相三十二、地誦「以八十種好、  
レテ誦「用莊嚴法身、地誦「天神所戴仰、龍人咸恭敬、  
あらありがたの御經やな。(早廻)レテ誦「今  
此經の徳用にて、地誦「今此經の徳用にて、天龍八部、  
人與非人、皆遙見彼、龍女成佛、さて  
こそ讚州志度寺と號し、毎年八講朝暮の勤行、  
佛法繁昌の靈地となるも、此供養と承  
はる。

### 鞍馬天狗

梗概

牛若丸鞍馬寺に在りし頃大天狗より兵法の傳授を受け、平家追討の豫言を聞く事を作る。中に張良と黄石公との故事を交へたり。發端を美しき花見の場とせるは、後半の物凄き景と對照の妙を得たり。(五番目より未)

前シテ 客僧 後シテ 大天狗 子方 牛若丸  
ワキ 東谷僧 狂言 能力

客僧一修行のため滞在せる僧

シテ「かやうに候者は、鞍馬の奥僧正が谷に住居する客僧にて候。さても當山において、花見の由承り及び候間、立ち越え、よそながら梢をも眺めばやと存じ候。狂言詞「是は鞍馬の御寺に仕へ申す者にて候。さても當山において毎年花見の御座候。殊に當年は一段と見事にて候。さる間東谷へ唯今文を持ちて参り候。いかに案内申し候。西谷より御使に参りて候。是に文の御座候御覽候へ。何々西谷の花、いまを盛と見えて



花咲かば一箱政の歌末句馬に鞍置け

遙見人家有花入不論貴賤與親疎一朗詠集の詩句

候に、など御音信にもあづからざる。一筆啓上せしめ候。古歌にいはいはく、誰けふ見ずはくやしからまし花ざかり、咲きものこらす散りもはじめず。誰けにおもしろき歌の心、たとひ音づれなくとも、木陰にてこそ待つべきに、上歌「花咲かば告げんといひし山里の、告げんといひし山里の、使は來たり馬に鞍、鞍馬の山の空珠櫻、手打葉をしるべにて、奥も迷はじ咲きつどく、木陰に竝み居て、いざく花をながめん。狂言「いかに申し候、あれに客僧の渡り候。是は近頃狼藉なる者にて候。追つ立てうするにて候。ワキ詞「暫く。さすがに此御座敷と申すに、源平兩家の童形、達各御座候に、かやうの、外人は然るべからず候。しかれども又かやうに申せば人を選申すに似て候間、花をば明日こそ御覽候べけれ。まづく此所をば御立ち有らうするにて候。狂言詞「いやくそれは御説にて候へども、あの客僧を追ひ立てうするにて候。ワキ詞「いやたど御立ち有らうするにて候。

遙見人家を見て花あれば即ち入る、論ぜず貴賤と親疎とを辨へぬをこそ、春の習ひ

多聞天一毘沙門に同じ  
花の下の云々  
平家物語丹波少將都連りの條にある文句假初の契をいふ  
深山櫻一客僧の身を吟ふ

三春一正二三月をいふ  
檜柴の云々一新古今集に「御狩する狩場の小野の檜柴のなれはまさらで懸ぞまされる」

と聞くものを、浮世に遠き鞍馬寺、本尊は大悲多聞天、慈悲に洩れたる人々かな。牛若詞「けにや花の下の半日の客、月の前の一夜の友、詞それさへ好みはあるものを、あら痛はしや近うよつて花御覽候へ。シテ詞「思ひよらずや松蟲の、音にだに立てぬ深山櫻を、御訪ひの有難さよ此山に、牛若詞「ありとも誰か白雲の、立ち交はらねば知る人なし。シテ詞「誰をかも知る人にせん高砂の、牛若詞「松も昔の、シテ詞「友鳥の、地謡「御物笑の種蒔くや、言の葉しけき戀草の、老をな隔てそ垣穂の梅、さてこそ花の情なれ。花に三春の約あり、人に一夜を馴れそめて、後いかならんうちつけに、心空に檜柴の、馴れは増らで、戀のまさらん悔しさよ。

シテ詞「いかに申し候、只今の兒達は皆々御歸り候に、なにとて御一人是には御座候ぞ。牛若詞「さん候、只今の兒達は平家の一門、中にも安藝守清盛が子供たるにより、一寺の賞散他山のおほえ時の花たり。誰みづからも同山には候へども、よろづ面目もなきことどもにて、月にも花にも捨てられて候。シテ詞「あら痛はしや候、さすがに和上藤は、常磐

見る人も云々  
古今集の歌末句  
後ぞさかまし

腹には三男、毘沙門の沙の字をかたどり、御名をも沙那王殿と付け申す。誦あら痛はし  
や御身を知れば、所も鞍馬の木陰の月、地誦見る人もなき山里の櫻花、よその散りなん  
のち  
後にこそ、咲かばさくべきに、あら痛はしの御事や。

上歌地誦 松嵐花の跡訪ひて、松嵐花の跡訪ひて、雪と降り雨となる、哀猿雲に叫んでは、  
腸を断つとかや。心凄のけしきや。夕を残す花のあたり 鐘は聞えて夜ぞ遅き、奥は鞍  
馬の山道の、花ぞしるべなる。此方へ入らせ給へや。さても此程御供して、見せ申しつ  
る名どころの、ある時は愛宕高雄の初櫻、比良や横河の遅櫻、吉野初瀬の名所を見のこ  
す方も有らばこそ。

牛若誦「さるにても、如何なる人にましますば、我を慰め給ふらん、御名を名のりおはし  
ませ。シテ誦「今は何をか包むべき。我此山に年経たる、大天狗は我なり。地誦「君兵法の大  
事を傳へて、平家を滅し給ふべきなり。さも思召されば、明日參會申すべし。さらば  
といひて客僧は、大僧正が谷を分けて、雲を踏んで飛んでゆく。立つ雲を踏んで飛んで

ゆく。(中入)

牛若一聲誦「さても沙那王がいでたちには、肌には薄花櫻の單に、顯紋紗の直垂の、露を結  
んで肩にかけ、白糸の腹巻白柄の長刀、地誦「たとへば天魔鬼神なりとも、さこそ嵐の山  
櫻、華やかなりけるいでたちかな。

薄花櫻—表白裏  
顯紋紗—花の紋  
ある紗  
罽—直垂の袖の  
くさり  
腹巻—鏡にて袖  
なきもの  
四州—四國  
飯綱—信濃  
前鬼—役行者の  
使役せし鬼  
邊土—近邊の地

天狗倒し—深山  
に起る風の如き  
物音をいよ

後シテ誦「そもく是は、鞍馬の奥僧正が谷に、年経て住める大天狗なり。地誦「まづ御供の  
天狗は誰々ぞ。筑紫には、シテ誦「彦山の豊前坊、地誦「四州には、シテ誦「白峰の相摸坊、大  
山の伯耆坊、地誦「飯綱の三郎富士太郎、大嶺の前鬼が一黨、葛城高間、よそまでもある  
まじ、邊土においては、シテ誦「比良、地誦「横川、シテ誦「如意が嶽、地誦「我慢高雄の峯に住  
んで、人の爲には愛宕山、霞とたなびき雲となつて、シテ誦「月は鞍馬の僧正が、地誦「谷に  
満ちく、峯をうごかし、嵐木枯瀧の音、天狗倒しはおびたよしや。  
シテ誦「いかに沙那王殿、只今小天狗を參らせて候に、稽古の際をばなんほう御見せ候ぞ。  
牛若誦「さん候唯今小天狗ども來り候程に、薄手をも斬りつけ、稽古の際を見せ申したく

此一大事一兵法のこと

彼の家の水上一源氏の起り

は候ひつれども、師匠にや叱られ申さんと思ひ止まりて候。レテ誦「あらいとほしの人や、  
 詞さやうに師匠を大事に思召すに就いて、さる物語の候語つて聞かせ申し候べし。さても  
 漢の高祖の臣下張良といふ者、黄石公に此一大事を相傳す。ある時馬上にて行きあひた  
 りしに、何とかしたりけん左の履を落し、いかに張良あの履取つてはかせよといふ。安  
 からずは思ひしかども履を取つてはかす。又其後以前の如く馬上にて行きあひたりしに、  
 今度は左右の履を落し、やあ如何に張良あの履取つてはかせよといふ。誦猶やすか  
 らず、詞思ひしかども、よし／＼此一大事を相傳する上はと思ひ、落ちたる履をおつと  
 つて、地誦「張良履を捧げつよ、張良履を捧げつよ、馬の上なる石公に、はかせける  
 にぞ心とけ、兵法の奥儀を傳へける。レテ誦「其ごとくに和上臈も、地誦「其ごとくに和上臈  
 も、さも花やかなる御有様にて、姿も心も荒天狗を、師匠や坊主と御賞飯は、いかに  
 も大事を残さず傳へて、平家を討たんと思召すかや。優しの志やな。  
 上歌地誦「抑武略の譽の道、抑武略の譽の道、源平藤橘四家にも取りわき、彼の家の

會稽一會稽の恥の意

水上は、清和天皇の後胤として、あら／＼時節を考へ來るに、驕れる平家を西海に追つ  
 下し、煙波滄波の、浮雲に飛行の自在を受けて、敵を平らけ、會稽を雪がん御身と守る  
 べし。是までなりや、お暇申して立ち歸れば、牛若袂にすがり給へば、實に名残あり、西  
 海四海の合戦といふとも、影身を離れず、弓矢の力を添へ守るべし、頼めやたのめと夕  
 影くらき、頼めやたのめと夕影鞍馬の、梢に翔つて失せにけり。

# 定家

梗概

定家は藤原俊成の子にて和歌の名匠たり。嘗て式子内親王と情交あり。後定家の執心葛となりて、内親王の石塔にはひまつばれりと傳ふ。この傳説に據りて、内親王の亡靈、旅僧の回向を受け給ふ事を作る。(鬘物)

前シテ里女 後シテ式子内親王  
ワ キ 旅僧

山より出づる云  
云一行脚僧の行  
方定めなきを時  
雨に響へていふ

ワキ次第 山より出づる北時雨、山より出づる北時雨、行方や定めなかるらん。詞 是は北國方より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候程に、此度思ひ立ち都に上り候。道行話 冬立や、旅の衣の朝まだき、旅の衣の朝まだき、雲も行きかふ遠近の、山又山を越え過ぎて、紅葉に残る眺めまで、花の都に著きにけり。花の都に著きにけり。詞 急ぎ候程に、是は早都千本のあたりにて有りけに候。暫く此あたりに休らはばやと思ひ候。面白や頃は神無月十日餘、木々の梢も冬枯れて、枝に残りの紅葉の色、所々の有様までも、都の景色は

時雨を晴らさば  
や一雨の響るを  
待たんとの意  
時雨の亭一所在  
たしかならず

一入の眺め殊なる夕かな。あら笑止や。俄に時雨が降り來りて候。是に由有りけなる宿りの候。立ち寄り時雨を晴らさばやと思ひ候。シテ詞「なうく御僧、何しにその宿りへは立ち寄り給ひ候ぞ。ワキ詞「只今の時雨を晴らさるために立ち寄りてこそ候へ。シテ詞「それは時雨の亭とて由ある所なり。其心をも知し召して立ち寄せ給ふかと、思へばかやうに申すなり。ワキ詞「實にくは是なる額を見れば、時雨の亭と書かれたり。折柄面白うこそ候へ。是は如何なる人の建て置かれたる所にて候ぞ。シテ詞「是は藤原の定家の卿の建て置き給へる所なり。都の内とは申しながら、心凄く時雨物哀れなればとて此亭を建て置き、時雨の頃の年々は、こよにて歌をも詠じ給ひしとなり。謡 古跡といひ折からといひ、其心をも知し召して、逆縁の法をも説き給ひて彼御菩提を御弔ひあれと、勧め參らせん其ために、是まで現れ來りたり。ワキ詞「さては藤原の定家の卿の建て置き給へる所かや。さてく時雨をとどむる宿の、歌はいづれの言の葉やらん。シテ詞「いやいづれとも定めなき、時雨の頃の年々なれば、分きてそれとは申